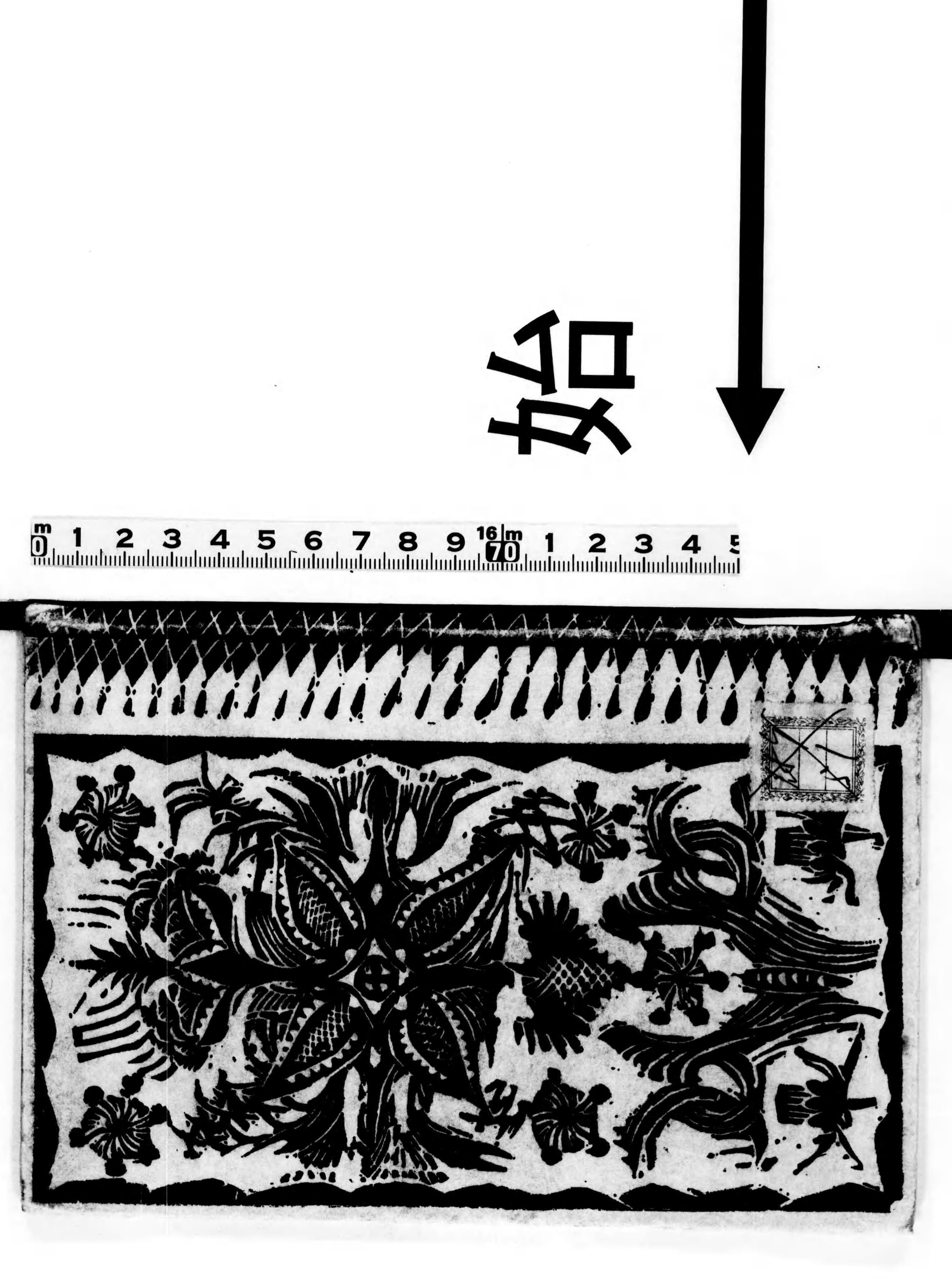

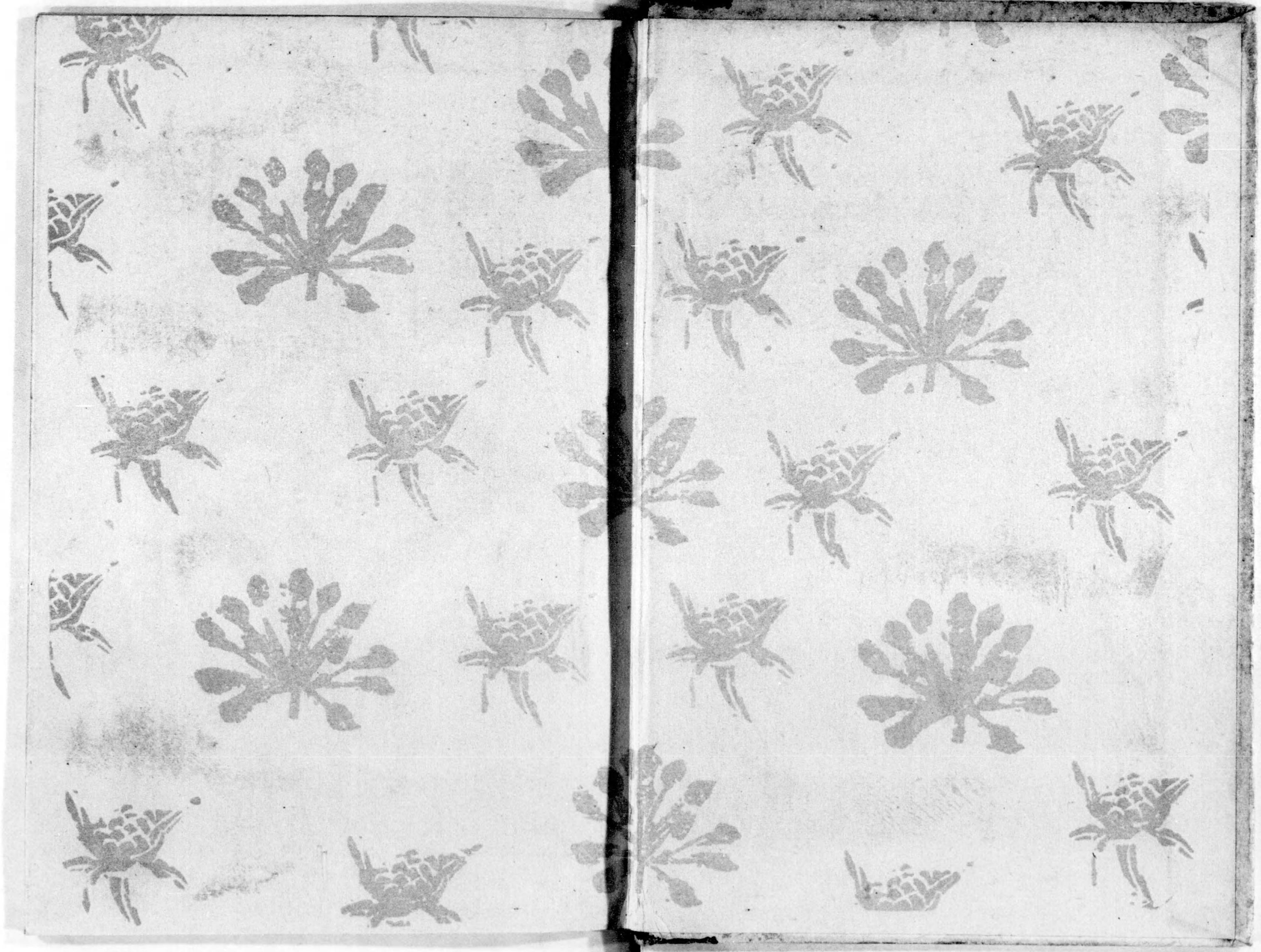

特103
434

根據

為澤

清道

大正
11. 4
内交

廣川松五郎裝幀
高村光太郎題字

一

午前中のことは一切知らないが、私が起きてからも其の日は、まるで底翳の目でも見るやうに、どんよりと曇つてゐて、其の陰氣さと云つたらないのだ。それに、一夜の中に秋が押しよせてでもきたやうに、四邊の風物が皆うすら寂しく白けて見えるのだ。私が寢卷にしてゐる、洗ひざらしの白地の浴衣を一枚つけてゐると、不意に剃刀でも突きつけられたやうな冷たさが、全身へしみてくるのだ。殊に襟元などは、獸にぞくぞくとしてきて、何となく味氣ない思ひさへしてくるのだ。

一つはさう云つた陽氣のせいからでもあらうが、其の日はまた、もう私が目を覺ました時から、私の左脚に持つてゐる、宿疾の骨髓炎が痛みだしてきて、其の不愉快さと云つた

らないのだ。私が顔を洗つてから、自分の部屋の机の前へきて坐つて、病める方の脚を前へ投げだしてゐると、何時の間にか、内へ多量な瓦斯を注入されてゐるやうな、ある壓力を感じてくるのだ。そして、それに依つて、骨格の内の内なる骨髓に潛在してゐる黴菌が一段と其の發生を助けられて、刻刻に化膿しつつあるもののやうな鈍痛さを覺えるのだ。で、私は氣になつて溜らないところから、左手の中指でもつて、患部を押してみると、骨格其のものまで、例へば一疋の二十日鼠が暇にあかして、石をもなほ嚙みやぶりさうな、あの微細で、しかも鋭利な齒でもつて、窃にそれを嚙みつづけてゐるのを目にするやうな苦痛を感ずるのだ。だから今度は其の指を引いて、掌でもつて上から一面に、靜にそれを撫してゐると、なんのことはない、地下へ布設されたる地雷火が、今まさに爆發しようとして、點じられたる口火の延燒してくるのを、凝と待つてゐる時のそれを見詰めてゐるやうな、一種名狀しがたいある不安を覺えるのだ。

若しこれが、何時ものやうに、ただ一時季節の變化につれての現はれであつて、其の中に影をひそめてくれるなら、もう問題ではない。だがしかし、不幸にしてこれが、飽くまで

經過不良で押しとほしてきて、化膿に次ぐ化膿をもつてしたことのつまりが、どうでも手術をしなければいけないことなつた日には、どうしたら好いのだと思ふと、私の心は、もう地雷火にかかつたやうに、粉微塵になつてしまつた。其の時私は、ただ一圖に金が欲しくなつてきた。さうだ。金さへあれば、明日をも待たず今から飛んでいつて、名醫の診察を受けてみよう。其の上で、入院しなければならないものなら入院もしよう。若し手術をしなければならないものなら、直ぐと手術も受けようと思ふにつけても、貧しい身の上が悲しまれてきた。全く今のやうに窮迫してゐては、一日十錢の買ひ藥をするのも、なかなか容易な業ではない。と云つて、現在自分の知つてゐる限りでは、誰一人あつて、私の力になつてくれるやうな者はありやしない。第一私には、ただの一軒だつて、自分の窮狀を訴へて行くところがありやしない。だからかうして、日を追ふてだんだん苦痛が加つてきて歩行も自由にならなくなつてきたら、其の時は仕方がない。私とは過去になんらの關係がないだけに、私の最も嫌忌するところではあるが、あの區役所へでも泣きついて、何分の手當なり、方法なりを仰ぐことにでもするより外はないと思ふと、私の心は、暗く墓の中

へでも入つて行くやうになつてくるのだ。

で、私は今更に、身の貧しさ、無知無能さを思ひ、そして、絶えず不治の疾患に惱まされなければならない哀れさを考へながら、仰向けに倒れて、凝と目を瞑つてゐた。がしかし、生ある者の悲しさには、さうはしてゐても、果てしなき思ひはそれからそれと、蜘蛛の糸でも手繰るやうに、打ちつづいてくるのだ。——自分は今後どうして生きて行かなければならないのだ。自分は何をしなければならないのだ。さうだ。それより先自分には如何なる能力があるのだと考へてくると、私はいきなり魂を奪ひさられでもした者のやうになつてくるのだつた。ただ私が其の時感じたものは、無知無能な自分を痛むことの外には何もなかつた。其の痛みは、死と隣りしたものゝやうになつて、徒らに、私に無限の悲哀をのみ齎してきた。そして、ともすれば其の悲哀は、我れと我が身を、隣りしてゐる死の手へ渡さうともしたが、しかし、極度に自殺を卑しみ、且つそれを憎んでやまない心の働きに依つて、幾にそれからだけは免がれることが出來たが、相次いで起つてきた問題はなほ此の上にも生きて行かうとするには、何を措いても其の用意をしなければならないと

云ふことだつた。それは、明日をも問はず 今日も今から——かう云つてゐる今から始まるのだ。始めなければならぬのだと思ふと、私は期せずして、現在自分が勤めてゐる、ある青年雜誌の訪問を思ひだしてきた。さうだ。未來といふものは、過去を絶して現在を考へられないやうに、現在を外にしては一歩も始めらるべきものではないと云ふ、此の分り切つた論理の上に立たせられた私は、其の時また當然に、自分の現在やつてゐる訪問記者と云ふ職業を思ひだしてきた。

無論其處には、自殺にも比すべき卑醜さ憎惡さを、同時に併せ感じなければならなかつたけれども、現在私に許されてゐる職業と云ふものは、それを外にしてはないのだと思ふと、幾分心を安んじて、それに對することが出來てきた。そして、自分にもつともつと、新な能力が得られるまでは、それに伴ふ憎惡さ卑醜さをも忍んで力めることにするのだと思ふと、其の時また、何處からか飛んできた一羽の鴉が、とある寺院の屋根へきてとまつたやうに、私の心へ思ひついてきたのは、明日か明後日、それをごんなに後らしても、明後日は尋ねなければならぬ、伊東博士のことだつた。すると今度は、それが定められた出發

點でもあるやうにして、私の心は、また現在痛みつつある私の脚へ歸つてきた。そしてまたしてもいろいろと、其の經過如何が案じられてきた。だが、これがどう云ふ結果になるかは、一に今後の經過に徴してみなければ分らないが、しかし一方糊口の問題は、もう今日明日に迫つてゐるのだから、全然歩行が出來なくならない限り、二三日中には、是非伊東博士を訪問しなければならないと思ふと、今度はまた新に、着物のことが氣になつてきた。

何しろ世間の人達は、袷に袷羽織を重ねてゐようと云ふ時に、なんぼなんでも、自分のやうに洗ひざらしの安單衣を纏つてゐては、自分獨りでゐる時はとにかく、人を訪問する日になると、流石に氣が引けてくる。だから私は、どうにかして、伊東博士を訪問するまでに、物はなんでも構はないから、袷を一枚欲しくなつてきた。どころで、現在の自分には、それを購求する金などは持つてゐない。と云つて、それを商つてゐるところには、ただの一軒だつて近づきはない。かう云ふことなら、此の春まで着てゐた袷や袷羽織は、屑屋などへ賣るのではなかつたと思つたところで、もう追つつかない。あれはあれで、自分

には當時缺くべからざる必要から、賣り拂はなければならなかつたのだ。よしそれか、一夜の買淫料に當てたにしたところで少くとも當時の自分には、他人が米鹽を買ひに行くと同樣の必要からきてゐたのだと思つて、其のことはそれで諦めたものの、諦められないのは、今度また必要になつてきた袷のことだ。これをどうにかして、手に入れたいと思つていろいろと考へてゐる中に、ふと思ひついたのは石崎のところだつた。さうだ。彼に事情を云つて頼んでみたら、素氣なく拒絶するやうなことはあるまい。彼も決してそれを喜びはしないだらうが、しかし事情を明して頼んだなら、屹度着古しの一枚位は恵んでくれるだらうと思つた。で、それと思ひつくと、一方脚のことが氣になりながらも、行つてみなければ凝と坐つて居れなくなつてきた。と云ふのは、これも貧乏人のあさましさで、當つてみて、本當にそれを手にするまでは、少しも安心出來ないところからだ。

それと、其の時も一つ進まぬ私の氣を引きたてて、石崎のところへ出向かせた理由があつた。それはなんだと云へば、私は起きてからまだ飯も食ひに行かずに、まる半日と云ふものを、さう云つた風な悲しいことばかり思ひつづけてゐたので、もう日が蔭つてくると

私はなんとも云へない寂しさを覺えてきたからだ。かう云ふ時には、誰でも好いから、友達でもきてくれたらと思つたけれど、誰一人尋ねてくる者と云つてはなかつた。若しか今日あたりは、岡田がやつてきはしないかと思つてもみたけれど、彼もいつぞ顔を見せなかつた。もう彼がこなくなつてから、五六日にもなるが、其の後どうしてゐるのだらう。屹度彼は、職をみつけて歩くのだらうと私は思つた。で、外からくる者は、くる日もあればこない日もあるから、それは當てにはならないが、其の日はまたどうしたのか、毎日屹度二三時間は、此方から行くか向うからくるかして、無駄話をし合ふことになつてゐる同宿の吉川まで、其の日は早朝から外出したとか云ふのでもつて、どうぞう話合ふどころか、顔を合すことも出來なかつた。それやこれやで、それこそ私は獨り、深山の奥に取りのこされたやうにされたところから、少し位は無理をしても、石崎のところへ行つてみたくて溜らなくなつてきたのだ。

で、私が宿を出る時に、天氣が案じられたから、用意の爲に傘を持つて行かうかと思つたけれども、足には半月ばかり前に、十三錢出して買つた山桐の下駄を履ひて行くのだから、一つはそれとの調和も考へて、持たずに出掛けたのだ。そして、若し降りになつたら石崎のところから借りてくることにしようと思つたのだ。それとも一つ、私は飯を食べて行かうかと思つたが、しかし、これも中をあらためて見るまでもなく、其の時私の持つてゐた蝦蟇口の中には五十錢あるかなしだつたから、さうだ、飯は後廻しにしろと云ふのでもつて、私は食はずに出掛けることにしたのだ。と云ふのは、若し向うでそれと察して、飯を出してくれれば、なんのことはない一飯助かるからだ。それが外れれば、歸りにおでん屋へ寄つて、茶飯を食べてもことは足りると思つたところから、私は態と食べずに出掛けたのだ。

無論私は其の時も、自から身を勞せずして、徒らに人の厚意をのみ當てに、生活しようとする自分の心情に對しては、泣くにも泣けないやうなさもしさ悲しさを感じた。終ひには、自分で自分を蹴殺してしまひたいと思ふほど憤りをも覺えた。が同時に、無知無能な上に、極度の貧乏人に生れついてゐる私は、今暫く、自分を守つて行けるだけの力を獲得するまでは、其の卑醜さ、其の慚愧さを忍ばなければならぬと云ふ考へに制せられて、其

の癖、蛇に見込まれてゐる蛙のやうに、顫へがちな心を抱きしめながら、こにかく出掛けゐることにしたのだ。

外へ出てからも私は、一日も早く今の境遇から脱したいこ思つて、ごんなに頭を悩ましたか知れない。其の方法は、ちよつこつかなければつかないだけ、私はあの子供が積木をしてゐるやうに、幾度積んでは壞し、壞しては積んで、味氣ない思ひを繰返へしたか知れない。さうだ、一日も早く自分も、他の下宿人のやうに、間だけ借りてゐるのではなく、賄付になりたい。さうすれば、三度三度食事をしに、一一外へ出掛ける必要もなくなるのだ。現在自分がそれを嫌つてゐるのは、月に十圓こ十五圓こ纏つた金を拂ひるかごうかが疑はれるこころから、苦痛ではあるが現金でもつて、近くの飯屋へ通つて、やうやく飢えを凌いでゐるのだが、早くかう云つた慘めな境遇から足を洗ひたい。でなければ、現にまた、明日か明後日、飯代の工夫に出掛けねばならないこ思ふこ、私はもう目も眩んできて、行く手も分らなくなつてしまつた。

二

それから私は、白山へ出て、其處から電車に乘つたのだ。するこ今度は、石崎の在不在が氣になつてきた。云はば病軀を押しての訪問も、彼が不在の場合には、全然無意味なものになつてしまふ道理だから、何よりも此の場合、それが氣になつてならなかつた。だから其の時は、ただ一念彼が在宅であれかしこ、それのみ祈念させられた。こころで行つてみて、幸こ彼が在宅してゐてくれるのは好いが、萬一切りだしてみて、素氣なく拒絶されるやうなこがあつたらごうしようこ思ふこ、溜らなく不安になつてきた。丁度それは、自分が看守してゐる囚人に逃走された後の、其の看守の心持ちにも似た不安さだつた。

石崎の家こいふのは、牛込の矢來だつた。矢來は神樂坂郵便局の先の、同じ側の横丁を入つていつて、ずつこ左の方へ曲つていつた、右手の土手の上だつた。で、私はまだ其の頃は、電車は大久保新宿行きがなかつた時分だつたから、神樂坂下で電車をおりるこ、其處の坂を上つていつた。そして、神樂坂郵便局の前までくる間に、また溜らなく寂しい思

ひをさせられた。何故と云へば、それは兩側に建てつらなる呉服屋、履物屋、洋服屋、鳥屋、洋品屋などの店頭を見ると、私はまた其處に、しみじみと自分の無能さ貧乏さを考へねばならなかつたからだ。

それに、坂を上りつめたところから、看町の四つ角までの間は、別して人通りが多かつた。恐らくはそれらの人達は、食後の散歩をかねて、其處いらを往來してゐるのであらう。其の人達の容貌や體格を目にすると　其處にまたまた、私は深く自分の不健康さを思はねばならなかつた。若しさう云ふ願望が叶へるものなら、半年や一年遲く生れても好い私はもつと健康な體に生れつきたかつた。私が今のやうな病身でなかつたら、日常の起居座臥にもこんな苦勞はしなかつただらう。よし貧乏はしてゐても、健康でさへあつたら、もつと樂しく、心安らかに其の日其の日を送ることが出來ただらう。砥のやうな平地をゆくにも、なほ跛を引きながら足を運ばねばならぬと云ふ、そんな不便さ醜さがあるだらうか。それを思ふと私は、只管に呪はれたやうな自分の體が恨めしくなつてきた。

だがしかし、これは身の不運で、今更どうすることも出來ないことだと云ふなら、私も

潔くそれは諦めもしよう。其の代り私には、此處に一つの條件がある。それはなんだと云へば、私は其の賠償として、一生貧苦の何物たるかを知らない程度の、富裕な身分にして貰ひたい。そしたらたとへ一方に不治の疾患がついて廻らうとも、其の時は金に飽かしてそれぞれの手當ても講ぜられるだらう。また其の他の慾望も、有りあまる金に依つて、過半は達することが出來るであらう。早い話が、若し此の私が、さう云ふ身分だつたら、少くとも今日今夜、病軀を押してまで、此の通りを徒歩するやうな悲慘さから免かれることが出來たであらう。さう思ふと、私は不意に頭から激浪を浴びたやうに、全身の動搖するのを覺えた。同時に、其の時ばかりは、生の尊さも重さも、一切否定したくなつてきたどころか、其の時は寧ろ死の悲しさいたましさに就くことの安きを思ふの念で胸が一杯になつてしまつた。だから私は、私の少年時代に、今はもう亡くなつてしまつた姉に手を引かれて通つたことのある、寺院の後堂を獨り通つてゐるやうに、凝と目を伏せて歩いてきた。

やがて、郵便局の前も通りすぎて、右手の横丁へ曲る入口のところへくると、今度は凡

べての考へがまた元へ返つて、石崎の在不在が氣になつてきた。それと在宅してゐるとしてからが、私の無心を快諾してくれるかどうか、それが新に疑問になつてきた。

石崎は、何方かと云へば、善良な人間には相違ない。其の證據には、彼は私達友人間では、名うての我がまま者であり、短慮一徹な人間だ。例へば、氣に入ることは、命にも換へて果たす代りに、反對に氣にそまない場合には、些の顧慮もなく、凡べて足蹴にしなければやまなかつた。其處に彼が、私などと違つて、飽くまで富裕な家の子弟らしい長所短所を持つてゐた。それが其の時、殊に私に氣遣かはれてきた。だか私は其處までくると、一切ことの成否を、彼と對談の上で決することにしようと思ひながらも、心の中では、彼か齒痛を起してゐないやうに、また金を浪費した後などでないやうにと思つて、そればかりを祈念させられた。

三

石崎のところへきてみると、案じるよりは生みやすいと云ふ譬ごとく、丁度彼は、今外から歸つたばかりだと云ふところだつた。私が彼の書齋になつてゐる、二階の六疊間へ通つていくと、石崎は陶器の丸火鉢に片手を翳しながら、片手に敷島を持つてぼんやりしてゐた。

「どうだい。變つたこともないか。」

私は石崎の勸めてくれる座蒲團の上に胡床をかくと、例に依つて、煩つてゐる左脚を右へ持つてきて、膝關節から足首のところまでひと擦りさすりながら、かう云つて相手の方を見た。すると石崎は、

「ああ。」と無愛想な調子で云つて、彼もまた私の顔をみた。

「どうしたんだい。冷めてい顔をしてるぢやないか。——下痢でもしてるんぢやないか。」

私はかう云ひながら見てみると、彼は茶地へ赤い縞の入つた意氣なセル地を着てゐたがそれが下に着てゐる、薄鼠の襦袢の襟のあたりを、如何にも美しく見せてゐた。石崎は何

時も口癖のやうに、「俺が醫者掛かりをするのは、黴毒か淋病になつた時だけさ。」と云つてゐるから、それを通して想像される彼の體格は、牛か豚のやうに肥滿してゐて、見るからに憎く憎くしい者のやうに思はれるが、事實はと云へば丁度それと反對だ。そして、石崎の容貌は、何方かと云へば瓜核顔の方だ。少くとも圓顔ではない。彼が一等の缺點は鼻梁のやや低いことで、細いながらも其の眼には、遺憾なく彼の特色を讀むことが出來る。それが彼の專攻してゐる法律書や、つれづれの餘に讀む小說類の入つてゐる楢材で造つた大型の本箱、それに少し小型ではあるが、紫壇の机などを背景にして坐してゐるのを目にすると、私は妙に寂しくなつてきた。今し方、神樂坂を通つてくる間に思つてみた考へが、また此處へきて蘇つてきた。私は自分の不健康さと、自分の貧しさとを思ふと、それがやがて石崎に對する羨望の情に變つてきた。そして、自然に目の中が熱くなつてくるのを覺えた。

「ううん。さうぢやないよ。今朝から少し頭が痛いんだ。」

石崎は此の時かう云つて、ちよつと額へ持つて行つた右手でもつて、口のあたりを二三

度ばかり上下させながら、

「昨夜はやけに呷つたもんだから、天罰覿面と云ふやつでもつて、すつかり祟つてきやがつたんだ。」

云ひをはると彼はまた、額へ右手を持つていつて、押へてみた。

「何處へ行つたんだい。昨夜はまた。」

かう私が聞くと、石崎はこともなげに、

「なあに。」と云ふから、

「例のところか。――『折ます』先生に逢つてきたのかい。」と云つたものだ。

「まあ、さうだ。」

石崎は氣のなささうな返事をして、敷島の灰を落した。

私は石崎が燒け酒を呷つたと云ふのを聞くと、直ぐと「折ます先生」を連想した。――「折ます先生」と云ふのは、神樂坂の藝妓なのだ。彼は此の春から其の藝妓と馴染んで、近頃では隨分深い仲だぜとばかりにのろけてゐるのだ。昨夜は屹度其の藝妓と逢つて、何か

氣に障つたことがあつたところから、また持病を起したのだらう。それから、「折ます先生」と云ふのは、其の藝妓が曾て、石崎のところへ寄越した呼出し狀に、「私待つて折ますわ。」とあつたところから、私達はそれ以來、小夏と云ふ其の藝妓を、「折ります先生」と云ふ名に變へてしまつたのだ。

「どうしたんだい。喧嘩かい。」

「さうよ。餘り嘗めたことをしやがるから、蹴飛ばしてやつたんだ、後は酒だ。どうして寢たか。どうして起きたか。今朝までまるで知らないんだ。」

石崎はそれを口にしながら、少し眼色を變へてきた。恐らくは彼は、また昨夜のことを思ひだして、餘憤に堪へられなくなつたのだらう。正直に云ふと私は、特に其の夜は、こんな話にはなんらの興味も持てなかつた。反對に私は、さう云つた風に待合ひ入りをして善かれ悪かれ一個の藝妓を相手に、喧嘩口論をしてくることの出來る石崎の身分のほどが羨しくなつた。だから、出來るものならこんな話は、もう此處いらで打ちきりたいと思つたが、しかし、行きがかり上さうもならなかつた。其處で仕方なく、

「どうしたんだい。相手に好い野郎でも出來たことでも云ふのかい。」と云つて、私はのみ差しのバットを深く吸つてみた。

「さうぢやないんだ。一層さうなら、此方にも覺悟があらうと云ふもんだが、そんな氣の利いたんぢやないんだ。なあに、ことあ詰らないことなんだ。」

「ぢや、掛けても掛けてもこないでゐて、漸くやつてくると、欝ぎこんでゐて、一向に口も利かない。さう云つた譯なのかい……」

石崎は、輕く首を振つて默つてゐた。

「ぢやどうしたんだい。君が昨夜泊らうとすると、『お歸りなさいよ。お宅の首尾もあつてよ。』とでも云つたので、怒つちやつたのかい。」

私はかう云ひながら、ふと前夜の光景を想像した時には、溜らなく嫉妬の情に驅られてきた。其の上、性の衝動さへも感じてきた。

「ううん。さうぢやないんだ。昨夜僕は、半襟を買つて行つてやつたんだ。——半襟を欲しい欲しいと云ふから、ぢや買つたら好いだらうと云ふと、『あなた、買つてくれない』

と云やがるんだ。好からう。そいぢや此の次買つてきてやらうと云つて約束したそれを、買つて行つてやつたんだ……」と石崎が云ふのだ。私は彼の平生を思ひみて、つい可笑しくなつたところから、聲に出さずに笑つてしまつたのだ。すると石崎はそれを見咎めて、

「何が可笑しいんだい。半襟を買つて行つてやつたから、買つて行つてやつたと云つてるんだい。それが可笑しいのかい。」と云つて、敷島を灰に突きさしながら、少し調子を尖らかしてきた。

「別に笑やしないぢやないか。——それからどうしたんだい。」

私はあわてて、苦笑を打ちけして、態と其の言葉に力を入れてみせた。

「笑つたぢやないか。今。」

石崎は、もう一度それを繰返へしたが、一方には、乗りかかつた船だと云ふ氣持ちがあつたせいだらう。

「ちつたあ、神妙にしてるんだなあ。」これは獨語のやうに云ひながら、間もなく其の後をつづけた。

「で、僕は半襟を買つて行つてやつたんだ。すると折ますめ、それを手に取つてみて、地色が氣に入るの入らないのと、さんざん御托を並べた揚句に、『なんだか此の模様は、安つぽいわね。』と云やがるんだ。だがそれも好いんだ。——自分がさう感ずるんだから仕方がない。ところへ丁度入つてきた其處の女中が、『まあ、素的だこと。』とかなんとか云ひながら、それを手に取りあげて、自分の胸のところへ當ててみてると、折ますのやつめ、『姐さん、あなた入らない。』とかう云やがるんだ。さう云はれれば誰だつて、『私入らないわ。』と云ふやつがあるもんか。型の如く女中のやつは、『私欲しいわ。』と云つたもんだ。すると折ますめ、『ぢやおかけなさいましな。不斷でも。安物ですが。』と云つて、云はばまあ、まだ俺の物を、其の女中にくれてやるんだ。俺たる者、怒らずに居れないぢやないか。俺は、『さうごうも濟みませんわね、頂いて好いこと。』と云つて、かたみに折ますと俺とを見ながら、それを兩手で持ちそへて、押しいただくのを見ると同時に、俺は折ますのやつを蹴飛ばしてやつたんだ。折ますのやつめ、なんとか云つたつけ、『何するのよ。甚いわ。』とかなんとか云つたつけ。それが餘計と俺の氣を煽つてきたから、獣と云ふほど蹴つて蹴つ

て、蹴飛ばしてやつたんだ。それから後は酒だ。今度は酒を杯盤でもつて、ぐいぐい開けたんだ。それから後は、今朝まで前後不覺なんだ。呼びおこされて起きてみると、前の晩暴れた部屋に、俺は寢てゐると云ふ始末なんだ。目が覺めると、また酒にしようと云つたんだが、待合ひのやつらは、なんだかんだと云つて、一向に取りあはないんだ。そして、

『小夏姐さんも小夏姐さんだけれど、いいさんもいいさんですわ。若し小夏姐さんに傷でもついたら、それこそ大變ぢやありませんか。』てなことを云やがるんだ。小癪に觸るから俺は、其處の鳴も女中も、みんな蹴殺してやらうかと思つたんだが、さうなるともう、白面の法學生位情けない者はないや。直ぐ頭へ浮んでくるのは、刑法と云ふやつだからいけねえや。口惜しかつたが俺は、其のまま口も利かずに飛びだしてきたんだ。」

「そいつあ騷ぎだなあ。だが君も利口ぢやないなあ。」

私は少し莫迦莫迦しくなつたので、つい云ふことも冷やかだつた。私はもう此處へくると、其の夜の目的がふいになつたことを覺つた。よし、私が話の隙をみて、切りだしたところで、石崎がそれを快諾してくれる筈のないことは、彼の性格、彼の平生から見て、微

塵疑ふ餘地のないことだ。それと私は、喧嘩の起りと云ふのが、彼が女に買つて持つて行つた半襟からだと知ると、もうさう云ふことを切りだす氣力はなくなつてしまつた。ただ私には、寂しい味氣ない氣持ちばかりが殘つてきた。一つはそれも手傳つて、私をしてさう云つた言葉を吐かしたのかも知れない。

四

「さうよ。利口ぢやないさ。」

石崎は忌忌しさうではあつたが、一應は私の云つた言葉を肯定したかと思ふと、直ぐ其の後へ、

「だが其處にはまた、莫迦なだけでは分らない意氣があらあなあ。」と云ふのだ。其の言葉の中には、當の相手たる私を、冷笑侮蔑するの分子を多分に含んでゐた。少くとも私にはさう感じられた。だから私も、其處で一矢を酬ひなければならないやうな氣持ちになつ

てきた。

「ぢや何かい。君は其の莫迦には分らない、言ひかへると、利口な者でなければ分らない心意氣の爲に、見事莫迦になつて退けたのかい。」

私は胸中の不愉快さを、態と笑顔に隱してかう云つたが、それがこうこう短慮な石崎を怒らしてしまつた。

「さうよ。俺は莫迦だよ。ああ、俺は莫迦だよ。」

石崎は同じことを二度重ねて、さも無念さうに云ふと同時に、つけたばかりの敷島を火鉢の中へ投げすてて、目を見張り堅く口を結んでしまつた。殊に其の口付は、韮でも嚙みしめたやうな風だつた。私はまた、始まつたなあと思つた。

昨夜彼が、小夏を相手に喧嘩をしたと云ふのも、畢竟するところは、丁度此の場合と同じやうに、心持ちの問題であり、氣分の問題から始まつたことなのだらう。つまり、彼の蟲のゐごころ如何から起つたことなのだらう。さう思ふと、私は本當に莫迦莫迦しくなつてきた。私は、短慮無比な彼を憫れむと云ふよりは、寧ろ彼を憎惡するの念が先立つてき

た。だから其の時私は、其のまま歸つてこようかとさへ思つたくらゐだ。だが事實は決してさうはせずに、私はやはり石崎と對座してゐた。と云ふのは、私には私の誇りがあつたからだ。——私は此の場合、追はれる者のやうに石崎の前を退いて、重ねて彼が侮蔑の目でもつて、見送らるるのを惜しむの念に堪へられなかつた。其處で私は、もう一度自分の煩つてゐる脚を撫しながら、坐りなほした。

「だつてさうぢやないか。君はちと短氣過ぎるよ。何も足蹴にしなくたつて、どうにか話がつきさうなものぢやないか。結局は相手の氣持ちを惡くさせるばかりか、延いては、自分自身の氣持ちまで、どんなに惡くしたか知れないぢやないか。」と云つてやつた。此の言葉の意味は、耳目にする通りの意味しか持つてゐないのだが、ただ私は、それを如何にも靜に、如何にも優しく口にしたのだ。例へば、手管者の口から洩れる口說のやうに云つて、私は凝と石崎の方をみた。石崎はやはり默つてゐた。ただ目だけは、彼の方から見て右の方になる、障子の棧の上に遊んでゐた。

「さうぢやないか。折ます先生だつて、何も惡氣があつて、さうした譯ぢやなかからうぢ

やないか……」と云つてゐると、石崎はまた敷島へ火をつけて、

「惡氣あつてのことかごうか、それは僕には分らないが、とにかく僕には、さう取れたんだ。」と云つて、今度は敷島を貪るやうに口にし出した。こころで何處をみても、彼の顏面には、依然として微塵優しい表情はみられなかつた。私は彼の顏と、彼の言葉とを見聞きすると、いよいよ彼を輕蔑したくなつてきた。殊に彼のエゴイステックな點が、どう考へても、憫れでもあれば、また憎くて憎くて溜らなくなつてきた。

「それは少し無理だよ。我がまま過ぎるよ。」

私は此の言葉を、彼の言葉に、おつ冠せるやうにして云つたものだ。そして、直ぐ後をつづけて、

「さうぢやないか。そりや君の身になれば、君の立場からすればだ、相手の仕打ちなるものが、有ゆる殘忍酷薄な手段でもつて、虐殺して退けても、なほ飽きたらなかつたかも知れないさ。だがしかし、さう考へ、さうしちやつちや、僕達に何らの思慮も、何らの批判も入らなくなるぢやないか。さうだ。これは僕達の少年時代に覺えのあることだ。僕達

が母に能く物ねだりをすると、多くの場合母は、僕達の望んでゐる物よりは、ずつとつまらない物ばかりくれたもんだ。すると、僕なんぞは、矢庭にそれを其處へ投げだしたもんだ。それが壞れものででもあつて見たまへ、無慘にも其の場で、原形も止めず粉微塵になつちまあなあ。若しさう云ふ時に、僕の母がだ、此の僕の態度を憎んで、君が折ますに對して取つたと同樣の態度で臨むとしたら、僕はもう今夜此處で、君とかうして話なんぞしちや居れなかつたに相違ない。だから僕は、其の時の母の寬仁さを思ふよ。そして、それが人間の取るべき一等いい本當の態度だと思ふよ。」と云つてみた。此の言葉には、殊に結末の方の、「母の寬仁さ云云。」のこころへくると、石崎よりも、先づ私自身が感激せずには居れなかつた。同時に、私は此處へくると、私がそれまで、石崎に對して取つてきた、私自身の態度に就いて、深く恥ぢなければならなかつた。さう思ふと、この是非善惡は暫く措くとして、石崎が前夜小夏に對して取つた態度も、また其の心持ちも、丁度晴れゆく朝靄の中から見る遠近の山山の姿のやうに、若しくは、合せかけてゐる兩眼鏡の度が、ぴたりと合つた時のやうに、私にはつきりしてきた。少くとも私には、其の際石崎が小夏に加

へた仕打ちが、幾くら苛酷残忍を極めてゐても、それは決して、單なる憎悪から發したものではないことがはつきり分つてきた。それどころか、石崎のは謂ふところの可愛さあまつて憎さ百倍したそれだつたに相違ない。さう思ひかへして、私が石崎の方をみた時にはいきなり私は彼を抱きしめて、彼の額に口付してやりたくなつた。

五

「それは違ふよ。第一母の愛と、僕の愛とは違ふよ。僕は人から侮辱されることは、死ぬよりも嫌ひなんだからな。」

私の言葉が切れると、石崎はかう云つて、私のそれもこれも、みな足蹴にでもするやうな調子でもつて反對してきた。

「それやさうさ。違ふと云へば違ふさ。だがしかし、君は全然憎くてさうした譯ぢやないんだらうぢやないか。それを君は……」と私が云つてゐると、石崎は、能くも私の云ふ

ことを聞かずに、

「いや僕は、憎くて憎くて溜らなくなつたから、蹴飛ばしてやつたんだ。外に理由があるもんかい。」と云つて、彼は無闇と私に突つかかつてきた。

「だがしかし。」と、私も其處へくると、少し急きこんで口を切ると、

「だがしかしも、然り而してもないぢやないか。僕はさうなんだ。小癪に觸つて溜らないから、蹴飛ばしてやつたんだ。若しさうしたつて構はないものなら、僕は生かしちや置かなかつたかも知れない。」と云つて、石崎は私の言葉を叩きをつてしまつた。叩きをられた私は、ますます不愉快になつた。其の刹那には、私はまた凡べてを忘れて、溜らなく憤りさへ感じた。それが幾分頽れていつてからも、私はもう口を利く氣にはなれなかつたので、それから暫く默つてゐた。

すると石崎は石崎で、彼も私とは形影其のもののやうに、默つてしまつた。そして、これは私の心なしか知れないが、彼は其の時、如何にも勝利者らしい表情をみせて、さもうまさうに敷島を吸つてゐた。それが、――其の不愉快な、息塞りさうな沈默が、丁度私が

半分くらゐになつてゐるバットを吸ひつくすと同時に破れてしまつた。私は其の場合、簇りおこる不快感を征服して、少しでも石崎よりは人格者らしく振舞ひたいと云ふ希望が胸へ湧きあがつてきた。で、私は、

「まあ、さう云へばさうだ……」と云つて、ちよつと間を持つてから「だが、出來るだけ喧嘩は止すんだな。詰らないぢやないか。喧嘩なんぞしたつて。それよか、思いきり面白く、樂しくやるんだなあ。」と云つたものだ。云ふまでもなく、それは愛兒を勞はる慈母のやうな調子で云つたのだ。

「さうさ。出來るだけさうするんだな。」

石崎は輕くそれに應じたが、其の言葉の中には、微塵眞實らしいものは働いてゐなかつた。それがまた私を不愉快にしたが、しかし私は、彼が表面では、飽くまで強者らしく振舞つてゐても、衷心は愛の飢渇と、爭鬪後の寂寞さに堪へられないものがあるのだらうと思ふと、一味の愛憐さを覺えてきた。

「今夜は、君は行かないのかい。」

私は其の時、少し其の場につかぬことだと思ひながらも、かう云つて聞いてみた。

「何處へ。」

「分つてらあなあ。折ます先生のところへさ。」

「行く譯がないぢやないか。蹴殺し損つた尼のところへ、行く際なんぞがあるもんかい。僕はそんな際があれば、××××××××××××、寢らあな。」

「ぢや、折ます先生のところが厭なら、何處か他處へいつて、第二の種蒔きをしたつて好いぢやないか。でなきや、酒を飲みにいくことかさ。」

「さうだ。酒なら好いなあ。一杯迎へ酒と出掛けたいや。」

「そして、醉つたところで「小夏善吉、逢引の場」とくりや、文句がなからうぢやないか。」

「ふうんだ。冷やかしちやいけないぜ。誰がああ云ふ畜生なんぞと逢ふもんか。ただ僕は酒を飲みてえや。」

「ぢや、飲みに行つたらどうだい。」

『ところで、生憎くと今夜は、其の飲み代がないので、弱つてるのよ。」
石崎は、煙草で薄く汚れてゐる前齒をみせたと思ふと、
「それとも君は、親切があるなら、僕にそれを貸すかい。」と云つて、一つ顎をしやくつて置いて、また前齒を出してみせた。
「常談云つちやいけない。其の點は、僕の方が色男だぜ。」
「ごうしてよ。何が色男なんだい。」
「だつて、さう云ふぢやないか。『色男、金と力はなかりけり』つて。」
「なんだい。古い洒落だな。」
石崎は、仕方ないやうに苦笑した。
私も、ついそれに引つこまれて苦笑した。そして、いよいよ私の無心が、駄目だと觀察してゐたそれを確めたと思ふと、一時に髪を殘らず引抜かれたやうに、甚く寂しくなつてきた。また、私の脚の痛みは、それを劃して、一段と烈しくなつてきたやうに覺えた。
ところで、微塵さう云ふことを知らない石崎は、それから二三友達の噂さをしだした。

また彼は、英譯で讀んだのだとか云ふ、佛蘭西の小說、——書名はなんとか云つたが、それの梗概を話したりした。——其の小說の主人公が、遺產數十萬圓を、酒と女とに費消してしまつて、最後は乞食になつて果ててしまつたと云ふそれを談じて、自分も其の男のやうに振舞ひたいものだと云ひもした。だがしかし、私はそれにも、なんらの興味も持てなかつた。ただ其の話が、私に加ふるものがあつたとすれば、それはいやが上にも、私に人生の悲痛索莫さを思はしめたに過ぎなかつた。——私には、幾くら費消したくとも、先づ費消する金がない。費消する金がなければ、幾くら酒や女に親しみたくとも、到底其の望みは達せらるべくもない。さう思ふと私と云ふ者の一生は、遺失したこともない物を、夢中になつて探求しつつ終る者のやうに感じられてきた。私には、嘘にもさう云ふ希望を持つことの出來る石崎のことが、今更に羨ましくて溜らなくなつた。だが私は、石崎から、
「好いぢやないか君、ごうで使へばなくなる金なんぞを儲ける爲に、汗水を流すより、出來るなら僕は、もうちやんと貯蓄されてる金を、使ひはたす方に汗水ながして終りたいよ。」と、かう云はれた時には、

「そりや僕も同感だよ。出來るものなら、僕もさうしたいよ。」と云つてゐる中に、私の胸はひとりでに、冷めたくなつてきた。同時に雙の眼からは、今にも涙が溢れおちさうになつてきたので、私は態と顔をそ向けた。其の時机の上の置時計の短針が、もう十一時近くへ、這ひよつてゐるのが、ちらりと私の眼についたので、

「ぢや、僕は歸へるよ。」と云つて、吸ひさしのバットを、火鉢の中へ突きさしたが、其の時また、谷底へでも落ちこんだやうな周圍の靜寂さが、一時に身に迫つてくるのを感じた。と同時に、外は雨になつてゐるやうなけはいを直覺した。

「好いぢやないか。話していきたまへな。」

石崎がかう云ふのを耳にしながら、

「もう十一時だよ。それに、雨ぢやないか。」と云つて、私は立つて、其處の障子を開けてみると、もう雨は通つた後らしかつたが、軒先へ間遠うに落ちてくる雫が、内の電氣を受けて、きらりと光るのが私の目へついてきた。

「降つてきた。」

石崎は私の言葉の後から、半ば獨語のやうにかう云つて、「ぢや、傘を持つていきたまへな。それに、悪いんだけれど、足駄もあるよ。」と附けくはへてくれた。

「いや、雨はもうあがつたらしいよ。まださうたいして、路は濡れてやしまいから、足駄は入らないよ。――また脚が痛みくさつて弱つてるんだ。だから、結局僕には、下駄の方が勝手なんだ。」と云つてから、また言葉をついで、「ぢや濟まないが、傘を一本貸してくんないか。もう大抵大丈夫だらうけれど、用意に持つてくから……」と云ふのを、引つたくるやうにして、

「あゝ好いとも、持つてきたまへな。」と云ひながら彼も立ちあがつて、「そいつあいけねえな。大事にしたまへ。悪くしちやつちやこだせ。」と見舞ひを云つたりして、私の後から跟ひてきた。

「ありがたう。なあに、大丈夫だよ、悪くなつちやつたら、今度は首諸共に、打ちきつちまふんだ。――それやさうと、君も何だぜ、そんな心にもない喧嘩沙汰は、もう止すんだなあ。そんな際があつたら、それこそ君の言ひぐさぢやないが、××××××××××

×××、おとなしく寢るんだなあ。」と云ふと、

「よし、よし。精精さうしようよ。どうでつまらないことだからなあ。」と、石崎は何だかかう少し曖昧なもの云ひをして、下へおりてきた。それから、女中に云ひつけて、蛇の目の傘を出してくれた。

「君もちとやつてこないか。」

別れぎはに私がかう云ふと、

「ああ、行くよ。大事にしたまへ。」と云つて、石崎は私を送りだしてくれた。

六

外へ出てみると、雨はもうあがつてゐた。私は其處の横丁を抜けて、大通りへ出てみると、一つは雨の降つたせいからでもあらうが、兩側のそこもここも、皆店をしまつてゐた。そして、通りには如何にも秋の夜らしい靜寂さと、哀愁さとが漂ひながれてゐた。私は思

はず左の手で、單衣の襟をかきあはせた。そして、窃つと空を仰いでみると、空は一面に薄墨を流したやうに曇つてゐた。

通りは斷はるまでもなく、時雨の爲に濡れてゐたが、それへ兩側の軒燈が反射して、まるで金泥へ赤銅でも加味したやうに、それが如何にも美しく照りかがやいてゐた。其の上を私はとぼとぼと、それこそ屠所の羊のやうな足取りで歩いてくると、しつとりと濡れた土が履きふるした私の駒下駄の底に吸ひついてくるのだ。それが此の場合、私に妙に寂しい不安な感じを起させてきた。そして、それまでは忘れたやうになつてゐた食慾が、一時に此の時起つてきた。同時に、一段と冷え冷えした夜氣が、私の體へ感じられてきた。それがやがて、宿疾に對する氣苦勞を增してきた。私は其處で思はず、輕く頭を左右へ振つてみたが、しかし、寂しい不安な思ひは、少しも薄らぎはしなかつた。

私は暫くすると、ああ、さうだ。彼處の毘沙門のところへ出てゐる、屋臺鮨を食べていかうと思つた。さう思ふと、今度は出てゐてくれれば好いがと、そればかりを念じながら藥店の近くへくると、其處へ藝妓が一人歩いていつた。初めは、私の後方から歩いてきた

のだが、それがもう私を追ひぬいて先へいくのだ。

すると、向うの方からまた若い藝妓か、左の手に褄を持つて、人の若い男と連立つてくるのに出會つた。男と云ふのは、茶のソフトを冠つて、インバネスを身に纏つた、中肉中背の男だつたが、二人は何か今までの話のつづきでもしてゐるのだらう。ぴたりと寄りそつて、頻りと何か小聲に呼きあつてくるのだ。それらを目にすると、私はまた、それでなくとも好い加減冷えきつてゐる胸へ、氷でも當てられたやうになつてきた。私には獨りそればかりでなく、世の中の凡べてのものと云ふものは、皆私に見せつけてゐるやうに思はれてきた。またも私は、しみじみと金が欲しくなつてきた。金さへあれば、私も今から此の邊の待合ひへいつて、一人の若い女を買つて、其處に暖い夢を結ぶであらう。食慾だつてさうだ。待合ひへいつた上で、自分の好むものを通して、十二分に食慾を滿たすことも出來よう。ただ出來ないのは、自分が貧しいからだと思ふと、もう歩く氣力さへもなくなつてしまつた。そして、私は其の時、竊盜若しくは强盜を働く者の心理を思ひみた。私だけには、それがはつきり分るやうに思へた。其の中にもう、嵐に打たれた蝸牛のやうな

足取りで歩いてきた私も、何時か毘沙門の傍へきてゐた。

目をあげてみると、不斷は毎夜出てゐる筈の鮨屋の影も形もなかつた。おでん屋でもと思つて見廻したが、これもやはり同樣だつた。私は、觸るとひやりとする程、手垢で塗られてゐる蝦蟇口を、單衣の上から押へてみて、泣きたくなつてきた。同時に、一段と空腹を覺えて溜らなくなつてきた。試しに過つてゐるのだと云へばそれまでだが、しかし、それにしても、餘りに悲しい試しだからだ。

其の時ふと、私の胸へ一人の女の影が映つてきた。それは四月ばかり前に、切れてしまつたと云へば體裁は好いが、本當は向うの方から姿を隱してしまつたのだが、其の女のことが心に浮んできた。女は千束町の酩酒屋にゐたのだが、私がそれと馴染んでゐた期間はと云へば、それはそんなに長くはなかつた。せいぜい長くて二月ぐらゐのものだつた。しかし其の間に、私達は生涯を賭して變るまい、變らないと云ふ堅い約束もした。私は其の女故に、ある時は友達を欺いて、借りてきた本を質屋へ持つていつたこともあつた。また知人先輩と云ふやうなところへは、それぞれに尤らしい口實を設けていつて、幾くらかづ

つかの借金もしたものだ。其の中に女は、私へは微塵斷りもなしに、もう行衛も知れずなつてしまつたのだ。私がある夜女に逢ひにいつて、それと知つた時には、私は曾て知らない程のさびしさ悲しさ、また憤りを感じた。私は暫く、死んだ者のやうになつて、其處に凝としてゐたのを覺えてゐる。其の時の其の女が、偶然私の胸へ返つてきたのだ。そして矣迦な話だが、切れてからの時間が、私が其の女に對する、凡べての惡感を洗ひさつてくれたもののやうになつて、後に殘つてゐるのは、皆戀しい、なつかしい女の言葉や仕打ちばかりなのだ。

女は必ずしも、私に愛想をつかして切れたものではあるまい。其處には、云ふに云はれない事情があつて、私の目から姿を消してしまつたのだらう。私はさうも思つてみた。無論これは、戀を失つて、寂しさに泣く男が、一時の負けおしみから云ふ自惚れだと云へばさうも云へるが、とにかく私は、無理にもさう信じたかつた。さう思へば思ふ程、また私には、どうかして今一度、其の女に逢ひたくなつてきた。あの女が、引きつづいて私と同じ關係を繼いでゐてくれたら、私の心は、どんな貧しい中にも、どんなに華やかだつたか

知れない。なるほど其の一面には、また泣くにも泣かれないやうな、悲哀や苦痛はあつただらうが、しかし、それもこれも、相手が女なるが故に、私が現在想像してゐるよりももつと能く緩和されて、一面には花咲く春の野にもたとへたいやうな、うれしさ喜ばしさがあつたに相違ない。だがしかし、それもこれも、皆今になると、思ふて返へらぬ遠い夢になつてしまつたのだ。

忘れもしない私は、其の女のこころへ通つてゐる間は、女の方の熱と情とが、共に增してくれればくゐる程、私はそれを喜びたのしみながらも、また一面には怖れかなしんだものだ。と云ふのは、其の到着點、歸結點は同棲であつて、當時の私には、迚もさう云ふことは、出來ない相談だつたからだ。——自分のみか、女の生活をも保證し維持していくと云ふやうな、そんな働きが、當時の私にはなかつたからだ。だから私は、只管に胸を開けて女の接近してくるのを待望しながらも、同時に心の中では、女が私から遠ざかつていくのを、どんなに熱望してゐたか知れない。そして、それが自分の祈願通りに成つていくのをみると、今度は悲憤と懊惱とに泣かねばならなかつたのだ。思へば私には、凡べての場合

に、私の貧しさが手をだして、根こそぎこゝを誤つてしまふのだ。

私が女と馴染んでゐる間に、私が定つた遊興費以外に費消した金はと云へば、それは後にも前にもたつた一度、かの女が私の宿へやつてきた時に、一緒に肉屋へ夕飯を食べにいつた時に支拂つた、三圓位のものに過ぎなかつた。だから其の點から云へば、今逢つたところで、此の私は、女に對して恨みつらみなぐは、ただの一言だつて云はれた義理ではないのだ。それにつけても、痛恨止みがたいものは、自分の無能さ、貧乏さだ。かうなればもう仕方がない。私は永久に殘るなつかしい其の女の面影を胸に抱きしめて、寂しい夜夜を慕ひあかすよりほかはない。

其處へ嵐のやうな音が聞えてきた。はつと思つてみると、それは飯田橋の方からきた電車の音だつた。私は何時の間にか、其處の坂もおりつくして、電車通りの近くへきてゐたのだ。間もなく私は、其處へくる駿河臺行きの電車に乗りこんだ。

七

其の電車には、五六人しか乗客がゐなかつた。皆雨に降られたらしい連中ばかりだつた。それらが皆、賣られて行く鷄のただずまひでも見るやうに、哀れに寂しさうな樣子をしてゐた。

私は其處で、それらの人達の拵へと、自分のそれとを比較してみたりした。だが私は、それに依つて少しも慰められはしなかつた。それと云ふのは、皆私のやうに、自分の身分とか、自分の職業とか云つたものに、全然不調和な、そんな慘めな風をしてゐる者は、ただの一人だつてゐなかつたからだ。私はひとりでに首を垂れ目を伏せて、凍へたやうになつてゐた。其の中電車は水道橋へきたので、私はまた其處で乗りかへることにした。

八

白山巢鴨行きの電車は、かなり込んでゐた。私が其處の腰掛けに腰をおろすのには、二

人の乘客に、左右へ少しづつ辷かつて貰はねばならなかつた。

見ると、此の電車の乘客の多數は、今乘りすててきた駿河臺行きのそれよりは、一體に好景氣な者ばかりだつた。例へば、洋服を着けた者、若しくは和服の者は、セルやネルの上へ、給羽織を重ねてゐた。中にはインバネスを引掛けてゐる者もゐた。私はそれをみてゐると、また寂しい思ひに攻められてきた。それは外出してから、何か忘れものをしたやうな氣がするので、考へ考へして歩いてきて、丁度其處へ來合せた電車に飛びのりして、いざ切符を買はうとして、蝦蟇口を忘れてきたのに氣づいた時の心持ちだつた。かうなると獨り私の胸の中のみに、しとと秋雨が降りそそぐもののやうに思はれてならなかつた。そして、痛む足を引きずつて、わざわざ牛込あたりまで出掛けていつた袷の無心も、時のはずみからだとは云へ、碌碌それを切りだしもせずに、今かうして、自分とは比較を絶した身なりの人達の間に圍まれて、寂しく歸つていかなければならないのかと思ふと、身の哀れさ味氣なさが、一時に込み上げてきた。其の中にも氣になるのは脚だつた。此の上脚を惡くしては、それこそ泣きつ面に蜂だと思ふと、心はただ一筋に、左脚へ向つて集つてき

た。堪へがたい不安に驅られて、集まつてきた心は、涙ぐましい目に瞬き一つしないで、凝とそれを見詰めてゐた。

やがて、電車が春日町へきて止まると、幾人かの人がおりて、幾人かの人が入つてきた。見ると、それらの人達は、皆川の中からでも這ひあがつてきた犬のやうになつてゐた。でなければ、手に手に、濡れそぼつた傘を持つてゐた。それに依ると、外はまた雨になつたらしい。

私は何氣なく、目を運轉手臺の方へ向けると、向う側の端寄りに、二十歳前後の女が一人掛けてゐるのが目についてきた。髪は銀杏返しに結つてゐるらしかつた。生えぎはは扁平にみえて良くはなかつたが、しかし、ふくよかな其の前髪と鬢とが、ざんなに顔の陰影を濃く深くしてゐたか知れない。それと特色は目だつた。細い目だが、それだけにまた切れの長い目だつた。それが私には、あのエメラルドのやうに思はれた。あの磁石のやうにも思はれた。また、あの燐のやうにも思はれた。何故と云つて、其の目は男の胸へ、少くとも私の心を火のやうにし、私の心を吸收して、うれしく喜ばしてくれたからだ。

で、私は盗むやうにして、凝とそれを見てゐると、其の時また私の胸へ、四月ばかり前に別れてしまつた千束町の女、其の女の名はさきと云つたが、それの面差しがはつきりと浮んできた。殊に其の女の目つきを見てゐると、顔の生えぎはから鼻の形、それから、口つきまでが、あのさきをまのあたり見てゐるやうに思はれてきた。それは外でもない。其の目つきが不思議なくらゐ、さきのそれに似てゐたからだ。それが今し方、神樂坂を通つてくる間に、一心に思ひつめ、考へつくした心持ちを、此處でまた、新に深く思ひかへさせてきた。そして、これから私は、しとしと降りだしてきた雨に打ち濡れて、豚小屋にもたとへたい自分の部屋へ歸へると、垢と汗とに塗りかたまつてゐる破れ蒲團にくるまつて、寂しく獨り寢しなければならないのだと思ふと、私は一層のこと、此の儘電車が顚覆してくれれば好いとも思つた。そして、私も電車の下敷きになつて、殺されてしまへば好いと思つた。が無心の電車は私の心持ちなどを察してくれよう筈がない。それはただ先へ先へと駈けるのみだ。其の中私は溜らなくなつてきて、凝と目を閉ぢてゐた。

やがてのこと、

「白山、白山上。」と呼ぶ車掌の聲が聞えてきた。其の時私ははつと思つて、漸く我れに返つてきた。そして、電車の止まるのを待つて、靜に車掌臺の方から下りてきた。無論私は、其の時は後方を振返へらうともしなかつた。しかし私は、これが不斷なら、何を忍んでも、私がそれまで目をつけてゐた女の前を通ると云ふだけの、果敢ない機會をつくる爲に、幾くら足に無駄をしても、私は敢へて運轉手臺の方からおりたに相違ない。だが其の時に限つては、不斷よりは一段と其の希望に燃えてはゐたが、さうだ、一段と其の希望に燃えてゐただけに、私は態と其の反對の側からおりてきたのだ。

下へおりたつと、雨は横しぶきに降りしきつてゐた。私は石崎から、用意の爲に借りてきてゐた、破れ蛇の目にそれを凌ぎながら　肴町の方へ歩きだした。

すると、其處へまた、深い穴でも穿たれたやうに、一時に食慾を感じてきた。もうさうなると、足を運ぶ勇氣もなくなつてしまつた。で、どうしたものかと思つて、まるで拾ふやうにして歩いてくる中に、ふと私は、大觀音手前に、一軒の鮨屋があつたのを思ひだしてきた。すると僅にそれに勵まされて、不自由な足を引きずりながら、其處の店頭へきて

みると、もう表戸が締つてゐた。それを見た時には私は、多年粒粒辛苦して建築した住居を、一夜の留守の中に、悉皆烏有に歸してしまつたのを目にするやうな氣持ちがした。私は低徊去るに忍びないもののやうになつて、暫く其處に立つてゐた。そして、見るともなくみてみると、丁度戸の隙間から、かすかに燈火が洩れてゐた。其處で私は、何も試しだと思ふところから、其處の耳門になつてゐるところの戸を押してみたのだ。すると、造作なくそれが内の方へ軋みこむ拍子に、内から、

「誰方。」と云ふ聲がしてきた。

「鮨を少し頂きたいんですが、願へませうか。」

私は、相手の聲を耳にした時には、途中で遺失して、思ひあきらめてゐたものを、偶然手にした時のやうなうれしさを感じた。

「いかほど。少しなら出來ますが。」

内からは私の聲に應じて、かう云ふ挨拶が聞えてきた。

「濟みませんが、二十錢だけ、いや、二十五錢だけ願ひます。」と云つてから、直ぐ後を

つづけて、「海苔卷を二三本拵へてください。」と云ひをはると、私は其處へぴたりと跪坐して、合掌したくなつてきた。

「はあ。」

また内からは、私の言葉が切れると、簡單にかう云ふのが聞えてきた。

そつと中を覗いてみると、其處に一人の若い者がゐて、それが私の爲に、鮨を握つてゐた。やがて、

「お待ちどうさま。」と云ふ聲とともに差出す新聞紙包みを、金と引換へに受取ると、私はもう咽喉が鳴つてきた。私は、十足ばかりも歩いてきて、其處で先づ新聞紙を解くと、今度はもう一重經木でもつて包んであつた。其の包みの横つ腹から、一つ抓みだして、口へ入れることにした。本當は下地をつけて食べなければならないのだが、私にはちよつとそれを手にする當てはなかつたところからも、もうさう云ふことは忘れたやうになつて、無我夢中で頬張つてしまつたのだ。

鮨は、鮪に小鰭、烏賊に玉子燒の握りと、其の外に、海苔卷が六つはひつてゐた。私は

順順にそれを口にしながら、またしみじみと金が欲しくなつてきた。金さへあれば、こんなさもしい思ひをして、雨中を歩きながら、わづか二十五錢の鮨を貪り食はなくとも好いのだ。それにつけても金の入る方法はないものか。さうだ。私に金さへ持たしてくれるなら、私は失ひかけてゐる健康も、回復することが出來るのだ。そして、それに依つて、完全とはいかないまでも、少くとも現在よりはも少し確實に、生活の保證を得ることが出來るのだとは思ふが、しかし、其の金を得る方法は、悲しいかな現在の自分には惠まれてゐない。惠まれてゐないとすれば、所詮は盜み騙りをする外には仕方がない。こころで私には、それを斷行する意志がない。——さう云ふことは、私の良心が許さない。さう思ひつめてきて、兩側に建てつらなる家家を見た時には、堪へがたい嫉妬の情に驅られもした。そして、鮨を食べつくして、地上へ經木を打ちすてた時には、其の夜の出來ごとと云ふ出來ごとが、凡べて悔恨の種となつて身に迫つてきた。

「ああ、何時までかうした生活を續けねばならないのか。」

愚痴なやうだが、またかう思ふと、はらはらと兩眼から、熱い涙が落ちてきた。其の涙

を拂つてみると、其處はもう團子坂の下り口になる。私は其處へかかつた時には、それこそ、一生浮びあがることの出來ない、深い穴の中へでも入つていくやうな、寂しいと云ふよりも不安な、不安なと云ふよりは寧ろ恐ろしい思ひに驅られてきた。其處を、ひと足ごとに足元を氣にして、靜にしづかにおりてきたのだ。だから坂の途中にある、錢湯の樣子も、また其の隣家の鰻屋の樣子も、——鰻屋の二階では、毎夜遲くまで、新内を教へてゐるのだが、それらの樣子には耳目も振らずに、まるで聾の馬車馬のやうにして下ろしてきたのだ。

九

私がやうやく宿へ辿りついて、破れ蛇の目を窄めると、其處の戸足の惡い硝子戸を、半ばやけに押し開け叩きしめて、土間へ立つた時には、それでも幽ながら、一種の安意さを覺えた。と同時に、雨のしぶきに霑んでゐる單衣の裾のあたりが氣になつた。で、傘を其

處へ立てかけて、突つかけの破れかかつてゐるスリッパを突つかけて、板敷へあがると、其處の左手の茶の間から、

「お歸へりなさいまし。」と云つて、珍らしく宿のおかみが迎へてくれた。こころで、氣も心も、石のやうに堅く結ぼれてゐる私は、それには答へもせずに、其處を通りぬけやうとすると、障子の間から、しどけない寢卷着姿をみせてゐたおかみが、

「さつき、岡田さんて方が、お見えになりましたが……」と云ふのだ。

「ああ、さう。」

私は、それを深く意にもとめずに、かう生返事をして、自分の部屋の方へ行きかけると、

「そして、お歸りになつたら、これをおあげして頂きたいつて、これを置いてゐらつしやいました。」と云つて、一葉の白紙を差出したから、私は振り返つて、それを受取ると、おかみは追つかけて、

「外にお連れがお二人ゐらつしやいました。」と云つて、ちよつと息をついて、「お一人はお髯をはやした方で、今お一人は、肥つた方でした。」と、問はず語りをして聞かしてく

れた。私はそれを聞くと、其の連れと云ふのは誰だらうと思つた。

「肥つた男。」

かう云ひながら私は、其處の五燭光の電氣の蔭で、透しながら其の書置きに目を注いだ。それには、

「德次郎が死亡致し候。直ぐに、御出で下され度候。」と鉛筆で走りがきした横へ、「岡田作太郎。」としてあつた。私がそれを讀みをはると、丁度おかみは、

「なんとかおつしやつたやうでしたが……」と云ふそれが切れるこころだつた。私は、

「幾時頃きたんです。餘程前でしたか。」と云つて聞いてみたが、其の時私の聲が、恐ろしい者の前にでも、立たされてゐる時のやうに、怪しく顫へてゐたのは、自分にもはつきり感じられた。

「さあ、あなたがお出掛けになると、間もなくでした……」とおかみの云ふのが、如何にも氣のなささうな調子なのだ。かうして、文字に書いたのでは分らないが、國は岡山だとか云ふだけあつて、何處かに變な訛があつた。それが如何にもゆつくりと、押しのすや

うな風に云ふのだから、それが此の場合、甚く私の氣を煽つてきた。で、私は危く其の場で、おかみを蹴飛してやらうかとも思つたが、同時に私には、

「やつこさん、こうこうやつつけたなあ。」と思ふと、もう其處へ岡田が、鮮血と云つては感じが現はれない。私には、どす黑い、墨のやうな血汐にまみれて、あの持ちまへの出目を思ひきり見開き、にきびの痕で固つてゐる頰の神經を引つつらして、倒れてゐる彼の死にざまが、はつきり見えてきた。と思ふと、私はもう彼の手に繰られてでもゐるやうに、下駄箱から爪皮と云ふのも名ばかりで、緒もゆるく、其の上に、自分の足癖として、變に歪めて履きへらした、これも桐とは名のみの古足駄を抓みだすと、それへ足を突つこんで、片手に石崎から借りてきた傘を摑むと、おかみの方へは口も利かずに外へ出てしまつた。

全く、一枚の半紙を讀んだ時の、私の驚きと云ふものはなかつた。それは私にはそれまでに曾て感じたことのない驚きだつた。

私は曾て、母の危篤を電報で知つたことがある。だが其の時の驚きも、此の時のそれに

比べると、物の數ではなかつた。何しろ其の時は、幾月か前から、私は母が病臥してゐることを承知してゐた上に、丁度私は其の頃、其の日其の日の飲食にさへ追はれて、哀れにも餓死するのを待たねばならないやうな破目に陷つてゐた矢先だつただけに、まことにまをし譯のない話だが、私はさうあるやうにと思つて、衷心窃に母の死なるものを願望してゐたのだ。と云ふのは、一度其の報知を手にするが最後、私は其の當時出入りを差止められてゐた姉のところへ馳けつけていつて、旅費をはじめ歸國後の生活の保證まで、一切姉に待つことにしようと云ふ考へがあつたからだ。――當時私の母は　郷里にただ一人、他家で間借りをして、自から稼いで生きてゐたのだ。だから其の時の私は、驚きはあつても一面にはそれが、私の爲には救ひ主ともなつてくれる關係上、反つて喜びの方が先立つてゐたくらゐのものだ。だから今此の時の驚きに近いものを求めると、それは今から四月ばかり前にあつた出來ごとで、さきの行衞不明になつたことを知つた刹那くらゐのものだつた。事實私は、其の時は他に何にも考へずに、夢中に彼のゐる下宿を差して急いだものだ。

凄慘と云はうか、そればかりか醜惡と云はうか、ここにかく彼の死骸のある下宿を差して私は、

蹴を引きながら一心に先きを急いだのだ。

一〇

其の頃岡田は、追分にゐたのだ。追分は、高等學校の寄宿舍近くの、松風館と云ふ下宿屋にゐたのだ。

私は夜更けではあり、それに雨が降つてゐたので、少し廻り道ではあつたが、根津の大通りへ出て、それから根津の權現裏から上へあがることにしたのだ。

丁度私が、夢中になつて、根津の權現裏へきた時だつた。私の意識は、此處で幾分はつきり自分に返つてきた。すると私は、不意に釘づけされたやうになつて、其處に立ちごまつてしまはなければならなかつた。

——はつきり意識が自分に返ると、私は其の時、現在岡田のゐる下宿のことが、はつきり自分の頭へ浮びでてきた。つまり、岡田のゐる下宿と、私との關係が、今更のやうに自

分の心に結びついてゐて、離れないのに氣づいたのだ。そして、しみじみと私に、岡田の死に場所が悲しまれてきた。彼さへ其の下宿へいかなければ、何も私がこんな厭な、苦しい思ひをしなくとも好かつたのだと思ふと、幾くら同情して考へても、其の時ばかりは、岡田の仕打が恨まれてきてならなかつた。

これは、それより二箇年足らずも前の出來ごとだつたが、私は其の下宿屋に、九十幾圓ちよつと百圓足らずの借りを殘して出てきたのだ。そして、此のことは、岡田も能く知つてゐることなのだ。

そもそも私が此の下宿へ行つたと云ふものは、岡田がもう私より先に、其處にゐたからなのだ。私は母を失つて上京した時に、云はば私は彼に誘はれて、彼の紹介で其處にゐることにしたのだ。そして、其の時も私は、特にこれと云ふ職業も持つてゐなかつたところから、これも彼に勸められて、彼が其の頃やつてゐた青年雜誌や、教育雜誌の訪問をして、其の原稿を彼に買つて貰つてゐたのだが、それから得る收入と云ふものは、せいぜい十四五圓前後のものだつた。だから、下宿料の方は、支拂つたり支拂はなかつたりして、

一箇年餘りゐた間の滯りが、百圓足らずになつたのだ。其處でいろいろと下宿の主人と交渉して、最後に、それを月賦にして返濟しようと云ふ條件づきでもつて、私は其處を出てきたのだ。ところで彼は、私よりはずつと前に、もう其處を出てゐたのだ。

で、其の下宿屋を出てくると私は、團子坂下の俥屋の二階へ移つてきたが、それからは時時ではあるが、友達と一緒に本郷通りを歩いてゐると、其處で下宿の主人に出會して、目から火の出るほど、嚴しく督促されたものだ。終ひには、下宿の主人が、印刷した借用證書を持つて私のところへ尋ねてきて、私に金額や署名をさせた上に、捺印まで取つていつたことがある。だから私には、其の下宿屋と、もう一軒、其の下宿屋にゐて拵へた、三十二圓と云ふセルの洋服代金の滯つてゐる神田の洋服屋とは、私には此の世に於ける鬼門だつた。

ところで、其の中の下宿屋、――私の爲には、最も責任あり、義務あるだけに、それを辨濟しなければ、私は其處の閾をまたげない義理あるところへ、敢へていかねばならないのだから、一面には火をつけられたやうに焦燥しながらも、他の一面には、深淵に臨んだ

時のやうに、自然と氣怯くれがして、足もひとりでに立ちすくんできたのだ。

私には其の時また、岡田の死骸とともに、細くて近視ではあるが、蛇のやうに光る目をして、色氣も輪廓も、丁度一個の水瓜のやうに見える下宿屋の主人の顏が、まざまざと見えてきた。そして、水飴でも頰張りながら、口を利くやうな彼の調子が耳についてきて溜らなくなつた。彼は屹度私の顏を目にすると、今度岡田が成した迷惑さに對する、恨みと憤りとを一緒にして、それを私の頭上へ投げかけてくることだらう。さう思ふと、私にはただ其處には、一圖に岡田の自殺を祝福してやりたい氣持ちばかりがあつて、微塵彼を憐惜し、悲歎してやらうなどと云ふ念がなくなつてきた。

「ざまあ見ろい。だから云はねえこつちやない。僕の爲には、無間地獄みたいなところへ行くのが、そもそも間違つてるんだ。そんなところへ行きやがるから、ことのつまりがてめえでてめえの命を縮めなきやならなくなるのよ。」と、私は今なほ彼に通ずるものならがう云つて彼を怒鳴りつけてやりたかつた。なるほど彼は、私がかう云つて喰つてかかれば、彼は彼で、屹度ここの此處に至つた所以を、こと新しく說明し辯解することだらう。

さうだ。さうしたら彼は屹度、

「だつて君も分らないぢやないか、僕が此處へきたのは、何も自分から、好きこのんできた譯ぢやないんだ。僕は君も知つてる通り、はな君と一緒に、よそを探しまはつたんだ。一軒、二軒と、さうだ。都合五軒だ。當つてみたんだ。だが間取りの好いことは宿料が高いし、さうかと云つて、安いところは、それこそ穴倉みたいに、一日日のめも見れないやうな間ばかりなんだ。すると君は、『俺はこれから高木博士のところへ行かなきやならないんだ。』と云つて、途中から消えてなくなつたぢやないか。僕は君と別れてから、獨りで東西の片町、それから、森川町邊を殘らず探してみたんだが、思ふやうなところが見つからないんだ。其の中日は暮れかかつてくる、心は急くが、仕方がないから、歸へらうと思つて歩いてくる途中で思ひだしたのが此處なんだ。で、きてみると、幸か不幸か知らないが丁度三階の一室が明いてゐるんだ。ところで、其の間も本當は僕の氣に入らなかつたんだが、場合が場合だけに觀念して、十日か十五日、次の宿の見つかるまでゐることにしようと思つて、つまり、一時凌ぎにと思つて、今のところへ越しちやつたんだ。そりや僕だつ

て、君が僕のゐるところへき辛いことは、百も承知してゐるさ。だから僕は、其の翌日、君のところへ行つて、殘らず其の譯を云つて、あやまつて置ひたぢやないか。」と云ふことだらう。だがしかし、私の云つてゐるのは、さう云ことではないから、若しさうなつたら私は、

「いや、そりや分つてる。ただ僕に分らないのは、ごうしたら君は、さうまで性急に、引越さなきやならなかつたんだい。あの場合もう一日か二日ぐらゐ、延ばすことが出來なかつたのかい。君に云はせると、『其の中に日は暮れかゝつてくる　氣は急ぐが。』と云ふ。なんのことはない。臥薪嘗膽だ。一日千秋の思ひでもつて、不倶戴天の敵でも探す爲に、諸國遊歴する者の口にするやうなことを云ふが、僕にはそれが分らないんだ。ごうしたら君は、さうまで性急に、それを探さなきやならなかつたんだい。僕にはそれが分らないんだ。」と云つてやりたい。すると彼はまた、探偵犬のやうに、フンフンと鼻で呼吸をしながら、またそれからそれと、其の云はれ因緣を說明することだらう。だが、其の云はれ因緣ならば、何も私は、今更彼の口から聞くには當らないのだ。と云ふのは、彼の口にすると

ころは、私が殘らず知つてゐることだからだ。つまりそれは、彼がふさの目から脫れたいこころからきてゐたに過ぎないからだ。私は彼が、眞底から聲を顫はし、目を潤して、なほもこれを縷說しようとするなら、其時は私は、

「もう澤山だ。澤山だよ。」と、かう云つてやりたい。そして、私は、「それはそれで好いとして、僕が次に聞きたいのは、さう云つた風に君が一瞬間をも爭つて、其の女から脫れようとする、つまり飽くまで女を捨てて顧みようともしまいとする。そんな女を、君はどうしたら見つけたんだ。僕の知つてる限り君は極端なる、さうだ、敢へて極端なると云つても好いくらゐ君は女性尊重論者だつた。君の言葉を借りて云へば、男が女を戀する時は、其の女と結婚することを、第一條件にしなきやならない。勿論、既に結婚を第一條件としてゐるんだから、結婚同棲もせずに、女と離別するやうなことは、許すべからざることだと云つて、力說大に努めてゐた君が、どうしたら今度のやうな事件に座したんだ。言行不一致と云はうか、君の行爲は、みごと平生の君が言說を裏切つて、餘すところがないぢやないか。」と云つて、我れながら少しうるさいが、私は何處までも彼を追窮してやりたかつ

た。

恐らくは彼とても、此の質問には明答することが出來なからう。今では彼は、力說した其の理論を、根本から破壞して退けたのだから。だがしかし、彼もなかなか聞かぬ氣だつたから、私が幾くら追窮しても、彼は柔順に降服しないだらう。よし岡田は、私の云ふところを是認し、肯定するとしてからが、彼は其の前に、屹度ここの此處に至つた理由なり、また其の經過なりを說くに相違ない。蓋しこれは、獨り彼のみに限らず、人間と云ふ人間が、殊に善良な人間が、本能的にさうしなければ、氣の濟まないものだから、彼一人がそれに洩れやうとは思へない。

ところで、困るのは其の辯解も其の說明も、皆殘らず私が知つてゐることだからだ。だから、私はさうなると、もう一度追つかけて、

「いや、其のことなら、折角だが斷はらうか。いや、もう澤山だよ。それとも君が是が非でも、一應說かなきや氣が濟まないと云ふなら、かくまをす僕が、敢へて、君に代つて說いても好い。」とかう云つてやりたかつた。さうしたら彼は、屹度幾くら拷問されても

一向に自白しようともしない強盗殺人罪の被告が、動かしがたい證人と證據品とを突きつけられた時のやうな表情をすることだらう。――其の時彼は、不意に頭へかかつた蜘蛛の巣でも拂ひのけるやうに、眼を閉ぢ頭を振りうごかすことだらう。そして、其の面上には、臍を嚙んでもなほ及ばない後悔の念にでも、攻められる時のやうな表れを見せることだらう。だがしかし、それもこれも仕方がない。凡べてこれ皆事實なのだから。――若し讀者諸君の中に、ただの一人でも、私の云ふところを疑ぐる人があるなら、私はそれを證しする爲に、殘らずそれを此處で語つても好い。と云ふのは、岡田對ふさのいきさつは、序幕から大詰まで、云はば私が皆、舞臺監督のやうな位置に立つてゐたからだ。

一一

さうだ。岡田がふさを知つてから、二月餘りになる。彼は其の期間において、初めて女と云ふものを知つたのだ。女のありがたさと云ふものを知つたのだ。生れて始めて、五分

五分に女と相對することが出來たのだ。其處に彼は、戀と云ふもののうれしさ樂しさとともに、また苦しさ痛ましさを知つたのだ。

岡田は此のふた月の間に、ふさと十五六回は逢つてゐたらしい。私は今はつきり其の回數は覺えてゐないが、なんでも彼は、ふさと逢つた次の日には、屹度私のところへやつてきて、

「昨夜三日月へいつてきたよ。」とか、また「うるさくふさのやつがやつてきて弱つちやつたよ。昨日も正午過ぎからやつてきて、日暮れまでぐづぐづして行きやがつた。」とか云つた風に報告していつたものだ。

ところで、私の知つてゐる限り、岡田には、此のふさ以外には、これと云つて數へるほどの戀愛事件なるものは、殆んどなかつたと云つても好いくらゐだつた。少くとも、それらしく形造つたものは、一つもなかつたと云つても好い。其の點では、彼はまさしく、戀に見放された人間の一人だつた。と云ふのに語弊があるなら、彼は、戀に緣遠い人間の一人だつた。

岡田がふさを知るまでに、彼は自分の對照として、想ひをかけてゐた女は、それまでに二三人はゐた。さうだ確に三人はゐた。一人は千束町の淫賣だつた。一人は、私達友人の戀人だつた。そして、今一人は、彼が暫く下宿をしてゐたことのある家の長女だつた。だがこれは、三人が三人とも、皆飽の片思ひで、千束町の淫賣を外にしては、同衾などはおろか、それらしい言葉も交さなければ、手紙一通の往復さへもないと云つた風な、果敢ない間柄に過ぎなかつた。云つてみれば、それは皆放火の目的をもつて、トタン塀へ燐寸を擦りつけてゐるのにも譬たいやうな、哀れにも果敢ない、一場の夢に過ぎなかつた。

それと云ふのも外ではない。彼は貧乏人であり、大の臆病者だつた上に、また一個の理想家だつたからだ。

早い話が、岡田が千束町の淫賣のところへ通つたのは、せいぜい五六回くらゐのものだつた。これを時間に就いて云へば、もののひと月もすると、もう彼自身其の淫賣のことは忘れたやうになつてゐた。何故と云へば、彼は幾くら其の淫賣が自分の氣に入つてゐようとも、もうそれ以上に通ひつめる資力がなかつたからだ。そして、其處にはまた、彼一流

の理想主義が働いてゐたからだ。

これは嚢にもちよつと云つたが、彼は戀愛至上主義者であるとともに、また結婚尊重論者だつた。つまり彼は、常に、戀愛の後にくる結婚こそ眞の結婚であると力説し、從つて結婚を目的としない戀愛は、一大罪惡でなければならないと云ふのが其の持論だつた。それが、引きつづき買ひ馴染む資力さへなくなつた彼の胸に、今更火のやうになつて、燃えあがつてきたのだ。其處で彼は、無論蓮糸のやうに、引けごも引けごも、なほ脈脈として盡きない未練はあつただらうが、とにかく其の淫賣との戀を斷念してしまつたのだ。此處でなほ私の憶測を附けくはへて置けば、男と云ふ男は、其の相手が素人の場合には、絶えず姙娠と云ふことが氣になつて廻るやうに、彼は此の場合、淫賣と云ふ淫賣が、必ずと云つても好いくらゐに持つてゐる病毒を思ひ、それを恐れる心が、やがて此の戀の斷念に、かなり與つて力あつたものかも知れない。だが、それはとにかく、其の他の二人の女の中一人は彼の友人であり、且つ當の相手たる女の情人だつたそれに妨げられて、彼は胸の思ひを、其の相手に傳へる暇も與へられずに、空しく其の戀も闇から闇に葬られてしまつた

のだ。そして、残りの一人は、これも彼の貧しさ、乏しさから滞らした宿料のこゝからして、一夜の語らひさへも經ない中に、其處を追はれるやうにして出てしまつて、もう二人は、それ限り永久に離れてしまはなければならなくなつたのだ。だから云つてみれば、飢えきつてゐる彼の心へ、偶然結びついてきたのがふさだつたのだ。それは丁度、照りつづく日光の下に、喘ぎ喘ぎ、纔に餘命を保つてゐる草や木へ、盆を覆へすやうになつて降りそそいでくる、驟雨のそれにも比すべきものだつたのだ。そして、岡田がふさを知つたそもそもの動機は、こある晩に、私達がふさのゐた三日月こ云ふしる粉屋へ飲みにいつた時からはじまるのだ。

二

其の晩は暑い晩だつた。こ云つては少し氣が早すぎる。其の日は「炎熱熾くが如し。」こ云ふ字義通りに暑い日だつた。そして、私の起きたのは、其の日もやはり正午近くだつた。

起きるこ私はもう、飯を食ひに出掛ける元氣もないほゞ暑さにあてられてゐた。だから、私は終日臥たり起きたりして、只管に夜のくるのを待ちこがれてゐた。それに其の日は、吉川から借りてきた讀賣新聞の第一面に出てゐた、義手足の廣告から、私は自分の宿疾のこゝを考へさせられて、寂しい思ひに攻められてゐたのだ。

其の中に、四邊の木立から聞えてゐた蟬の聲もやゝに薄れてきた。同時に私は、靜に押しよせてくる、あの悪製な硝子板の斷面を見るやうな黄昏時の空氣の中に身を浸しながら、死んだ者のやうになつて、ぼんやりこ横になつてゐた。其處へ岡田がやつてきたのだ。

「なんだ。寝てゐるのかい。」

これは岡田が、私の部屋へ入つてきて、最初に云つた言葉だ。私はそれには答へずに默つてゐた。

「何處か外へ行かっぢやないか。暑くてやりきれない。」

これは、彼が第二の言葉だ。察するこころ彼は、私を散歩しに誘ひにきたものらしい樣子だつた。

「まあ、其處へ坐りたまへ。外はまた暑いだらう。行くにしても、も少し後にしようぢやないか。」

私はかう云つて、起きようともせずに、やはり横になつてゐた。

「此の部屋も暑いぢやないか。なんのことはない、火に掛けられてる釜みたいぢやないか。」

岡田は無闇と外へ行かうと云ふのだ。しかし私は、其の時はちよつと持ちあがる氣持ちがしなかつたので、それからものの半時ばかりは、岡田がなんと云つても聞かずに、其のまま凝としてゐた。二人の間には、例に依つて、賴まれもしない無駄話が交換されたことは云ふまでもない。

やがて私達は外へでた。

やはり外も、日中の餘熱を受けて暑かつた。私の宿を出た直ぐ近所では、其處の堀井戸の水を汲んで通りへ撒いてゐたが、それが撒く後から後からと、いきり立つ地中へ吸收されて、跡形もなく乾いてしまふのを見てゐると、自然に私は頭へ眩暈を覺えてきた。そし

て、其の時私は、出しなに忘れてきた扇子を思ひだしたが、と云つて、取りに引きかへすのは臆劫だしするから、それは止したものの、それからは餘計と暑さが苦になつてきた。

岡田は通りへ出ると、

「おい、中橋のところへ寄つてみようぢやないか。」と云ふのだ。「中橋も誘はうぢやないか。」と云ふのだ。

私は餘り氣が進まなかつた。がしかし、深く爭ひもせずに、それから彼と一緒に中橋のところへ行つてみた。私は、遠くへ行かない限り、せめて歩くことに依つて、嚙みついてくるやうな暑熱を紛かさうと思つたのだ。――其の頃中橋は、谷中清水町にゐたのだ。

岡田は中橋のところへ行くと、直ぐと彼を外へ連れだしてきた。私達は三人になると、あかぢ坂と云ふ、元警官學校のあつたところの坂をおりて、根津の大通りへ出てきた。すると岡田は、何から思ひついたのか知らないが、

「ああ、酒が飲みたいなあ。」と、出しぬけにかう云ふのだ。

「おい、履きちがへちやいけないぜ。僕は氷が欲しいな。」

丁度來かかつたこころが、氷屋の前だつたしするから、私は私でかう云つた。だが岡田は、

「氷なんぞはつまらないや。僕は酒を飲みたいなあ。」と云つて、此の時はごうしたのか容易に私の發議に同じやうともしないのだ。それからは、歩調を取る爲のかけ聲のやうに一歩一歩するに從つて、うるさく酒のことを云つて聞かないのだ。

「飲みたいなあ。キュッと一杯……」

彼は一つことばかり繰返へしてゐた。

こころで、私は固よりさう云ふ餘裕はなかつた。岡田とても同樣だつた。これはさつき彼がまだ私の部屋にゐる時に、ふと何かのことからして、金の話になると彼は、

「明日なら僕は少し金が入るんだがなあ。今日は此處に、二三十錢しかないよ。」と云つてゐたからだ。だから私は、彼の云ふことなごは齒牙にも掛けなかつた。終ひに彼は、中橋に向つて、

「ねえ中橋君、何處かかう一杯、飲ましてくれるところはないだらうか。金は月末に拂

ふことにするから……」と云つて、幾くらか調子を沈めて、相談を持ちかけたものだ。持ちかけられると、中橋はすつかり岡田の意中を見透したのだらう。

「ぢや、行かうぢやないか。三日月へいつて飲まうよ。」

中橋は直ぐとそれに應じた。

「ぢや、濟まないが、君の顏を借してくれたまへ。」

それは、如何にもまをし譯なささうな調子なのだ。それでゐて彼は、もうさうと定まると自分は一足さきに歩みだすのだから、可笑しくなつた。

「現金なやつだなあ。」

私はそれを見ると、かう云つてやつたが、全く私は、岡田の心理を思ひみた時には、本當に可笑しくて溜らなかつた。

それから、私達は直ぐ其のさきの、逢初橋手前の、路次裏の三日月へ出掛けていつた。

——此の三日月と云ふのは、中橋が現在同棲してゐる細君の實家なのだ。

一三

私達は其の晩そこで、ものの三時間ばかり飲食してきた。

私は不斷から、餘り酒がいけない上に、殊に其の日其の晩は、釜中に蒸されてゐるやうだつたから、殆んど盃は重ねなかつたと云つても好いくらゐだつた。――それに私はまだ飯は、前夜食つたきりなので、一つは其の空腹を恐れてゐたせいもあつた。

一人飲んだのは岡田だつた。彼はまたどうしたのか、飢えた者が食を得た時のやうな風なのだ。でなければ彼は、胸中悶悶の情に堪へられないものがあつて、それは繩に酒にやるより外に道がないと云つた風なのだ。で、私が見てゐる中に、もう幾本かのビールと、幾本かの銚子とを開けてしまつた。其の上、驚いたのは彼の態度だつた。彼は醉つたせいもあらうが、其の席にゐた一人の女中を捉へて、思ひきり惡巫山戯に巫山戯るのだ。

「おい、どうしてくれるんだい。僕は君に惚れたんだ。」

彼は自分の膝の傍へ引きよせた女中に、かう云ふことを云ふのだ。さうかと思ふと、自

分の顔を、其の女中の膝へ伏せたりしながら、

「遊びにこない。えゝ、君、僕のところへさ。」などとも云ふのだ。それを受けて女中は、

「お門違ひでせう。お氣の毒さま。」と云ふと、

「厭なのかい、えゝ、君、好いぢやないか。僕は君に惚れたんだ。」

かう云つて彼は、今度はまたやけに、其の女中を引きよせて、頭の髪に口づけをすると云ふ風なのだ。流石に私も少し、度胸をぬかれた形だつた。

「おい、好加減にしろよ。君はそれで好いだらうが、此の俺をどうしてくれるんだい。」

終ひに私も、少し莫迦莫迦しくなつてきたので、かう云つて野次つてやつた。しかし彼は、私の云ふことなどは、耳にも入らないやうな風だつた。自分以外の者は、神妙に傍觀してゐれば好いのだと云ふ風なのだ。其の證據には、彼は私などには言葉も返さないで、ますます巫山戯ちらすのだ。私は少し情けなくなつてきた。

私は、岡田の愛酒家だと云ふことは、能く知つてゐた。彼は常に、僕の酒は親譲りなのだと云つてゐるだけあつて、能く盃を手にしたものだ。例へば、彼は私達と一緒に、蕎麥

屋へ入つたとする。すると彼は、何時もさう云ふ時には、

「僕に一本つけてくれたまへな。其の代り僕は蕎麥は止すよ。」と云つた風なのだ。其の癖彼はまた、私などよりは、ずつと蕎麥黨なのだ。

で、私はそれまでに、彼とは隨分一緒に飲食したものだ。だから私は、また能く彼の酒癖を知つてゐた。不斷の彼は、私などと違つて、何方かと云へば、寡言沈默と云ふ方だつたが、しかし、一旦酒を口にすると、私などよりは、もつと饒舌になつたものだ。そしてこもすると彼は、惡く人に突つかかつてくる癖があつた。しかし彼は、それまでには幾くら飲んで、動けなくなるやうなことがあつても、決して其の晩のやうに、女中を捉へて、さう云つた風な厭味なことをしたり、また齒の浮くやうなきざなことを云ふやうなことは絶えてなかつた。

一體に彼は、神經質だつた。また彼は、極端なる理想主義者だつた。從つて彼は、凡べての場合に、凡べての事物に就いて、峻烈嚴正な態度を持するのを常としてゐた。例へば今これを男女間の問題に就いて云ふなら、何時如何なる場合にも、男は女を侮辱してはな

らない。此の意味において、男は女の前に、猥褻なる言語を口にしてはならないと云ふのが、彼の持論だつた。だから流石に彼は、身を持することもまた謹嚴な方だつた。それがどうしたと云ふのだらう。其の晩に限つて彼は、車夫馬丁の徒にも劣るやうな醜態を敢へてして、恬として愧づる色のないのは。全く私には、其の時の彼の態度は、一種の驚異だつた。

歸りしなにもなほ彼は、其の女中を擁して、容易に立たうともしなかつたから、

「おい、そんなに君が執心なのなら仕方がない。折へ詰めて貰つて、持つて歸らうよ。」と云つて、私が揶揄してやつたが、それにも彼は、少しも愧づる色がなかつた。

「常談云つちやいけないぜ。人を食べのこりだと思つてゐやがる。」

これが、其の時云つた彼の言葉だつた。

一四

それから、四五日してからだ。私は上野の圖書館へ、何か調べものに行つた歸りに、中橋のところへ寄つてみたことがある。

時節柄開けつぱなしになつてゐる中橋の家へ入つて行くと、中橋は茶の間に引つくり返つてゐたから、私は、

「先夜は失敬した。」と云ふと、彼は私のくるのを待ちまうけてゐたやうに、

「ところで大變だ。——君はもう知つてゐるかも知れないが……」と云ふのだ。

「なんだい。大變だと云ふのは。」

私もちよつと面食らつた形で、かう云ふと、

「鼻とふさとのことさ。」と云ふのだ。

「鼻とふさとと云ふと……」

私は、鼻は岡田を差して云ふのだと云ふことは分つてゐたが、一方ふさと云ふのは誰だつたか分らなかつた。だから私は、さう云つて聞きかへしたのだが、彼の返答を待つてゐる間に、私の頭の中へ、幾人かの女が通つていつた。それは、誰と云ふ譯でもないのだが

とにかく幾人かの女が走りぬけていつた。其の中私は、それらの女を、出來るだけ醜い者にして見ようと思つてゐた。ところへ中橋が、

「ほら、此の間の晩、鼻と巫山戯てゐた女中がゐただらう。あれなんだよ。」とかう云ふのだ。それと分ると、私は幽かながらに、一種の落着きを感じてきた。だから今度は、氣もかるがると、

「それがどうしたんだい。」と云つて、無意味に笑つてみた。

「君は知らないのかい。なんでも二人は、あれから大變なんださうだ。——鼻が毎晩押しかけていつちや、ふさの局を攻めさいなんでゐるんださうだ。」

「好いことを云やがるな。ふさの局たあ。で、どうして君はそれを知つてゐんだい。」

「そいつや、かうなんだ。——昨日だつたか一昨日だつたか、僕のところのやつが聞いてきたんだ。それに今日だ。今日正午前に、ほら、もう一人肥つた女中がゐただらう。あれがやつてきて、殘らずしやべつてゐたよ。——昨日の正午過ぎには、根津權現の裏で、逢引をしたことかしないことか云ふんだ。」

「そいつや初耳だ。驚いたな。其の癖やつこさんは、毎日僕のこころへきてるんだがなあ。」

「きてゐたつて、君や僕には、なんぼなんでも、ちよつときやつの口から、云ひだし悪いやな。」

「そりやさうかも知れないが、こにかく號外もんだなあ。やつこさんが、三日月へ日参するなんてことは。」

「『戀は思案の外なりけり』だ。」

「こ云ふ臺詞も拙いが、やつこさんもやつこさんだなあ。」

「屹度、魔が差したこでも云ふんだらう。」

私達は相顧みて笑つた。そして、私は間もなく中橋から出てきた。私は路路歩きながら岡田のこを考へてみた。しかし私には、どうしてもそれを、其のまま信ずる氣にはなれなかつた。私はそれを、何かの間違ひだらうこ思つた。また岡田の爲に、さうあつてくれるやうにこも思つた。

宿へ歸つてくるこ、私は懐中のノートを取りだして、これから汗を流しに錢湯へでも行つてこようかこ思つてゐるこころへ、ひよつこり岡田がやつてきた。私は彼の顔をみるこ、直ぐこ其のこを聞いてみたのだ。はな岡田は、

「嘘だ。嘘だ。」こばかりで、てんで問題にしないのだ。それを私が、前後左右から突つついて、聞きだしてやつたのだ。

「嘘なもんか。此の上にも君は、存ぜぬ知らぬこ云ふなら仕方がない。拷問にかけるがそれでもなほ君は、存ぜぬ知らぬで押しこほさうこ云ふのかい。」

終ひに私も少しじれつたくなつてきたので、常談半分にかう云つたりした。

「君は何處から聞いてきたんだい。そんなこを……」

今度は岡田は、其の出處を問題にし出した。私は其の時、確に心證を得こしまつた。こ云ふのは、これが全然無根のこなら、何にもそんなこを問題にする必要がないからだ。だが私は、もう一歩進んで、それを彼の口を通して、確めたいこ思つたので、

「誰から聞くものか。僕はふさの局から、直かに聞いてきたのよ。」こ云つてやつた。

だが彼は、それでもなほ容易に、それを認めようとはしないのだ。それを私は、なほ追ひつめ追ひつめして聞きだすと、彼も仕方がないと思つたのだらう。例へば、袋に入れ、箱に入れ、最後に風呂敷にくるんで、押しかくしてゐた風呂敷の手が切れたやうに、

「なあに、二三度きやいかないんだ。」と云つて、とうぢう泥を吐いてしまつた。しかし流石に彼も其の時は、丁度下戸が盃の二つ三つも口にしたやうに、心持ち顔を染めてゐた。

其の翌日のことだ。

其の日も私は上野の圖書館へ行つてきたのだが、歸ると直ぐに、近所の錢湯へ出掛けていつた。其の歸りに私は、ふと岡田のところへ寄つてみる氣になつたので、其處の坂をのぼつていつた。

岡田は其の坂上の、左の横丁にゐたのだ。角から左側三軒目の家がそれだつた。私は其處へ入つていゝと、顔馴染の女中が出てきた。

「岡田君、ゐますか。」

私がかう云ふと、女中は、

「はあ。」と云つたが、直ぐと、「ちよつとお待ちくださいまし。」と云つて、奥の方へ消えていつた。

私は、女中の云つた、「はあ。」と云ふ感動詞が、何か知ら氣になつてきた。それと云ふのは、ついぞ今までに、ただの一度だつて、此の私を土間へ立たせて、待たしたことなぞはなかつたからだ。さう思ふとまた、壓せられた咽喉の隙から押しだすやうな調子でもつて、「はあ。」と云つた感動詞が氣になつてきた。すると、其處へ女中が歸つてきて、

「どうぞ、おあがりくださいまし。」と云つて、心持ち頭をさげたりした。其の口邊には苦笑に似て苦笑でもない一種の微笑が漂つてゐた。私はなんだらう。どうしたんだらうと思ひながら、其處の廊下を通つて、岡田の部屋の前へきた時だつた。其の部屋の中にゐた中の一人が、足音荒く逃げだしていくのが、はつきり私の耳についてきた。と同時に、私の心へ女の影が映つてきた。私は、

「ああ、あの女だなあ。」と思つた。さう思ひながら、私は其處の障子を開けると、岡田は私の方へ顔を向けて、

「おい、おい、何處へ行くんだよ。おい、出ておいでよ。」と云つて、大きな聲をしたものだ。

「どうしたんだい。邪魔になるなら、僕は歸つても好いぜ。」

私はかう云つて、濡れ手拭に石鹸箱をくるんだのを片手に持つたまま、其處へ突つたつてゐた。

「なあに、好いんだよ。」

岡田はかう云つてから、

「おい、知らない人ぢやあるまいし、何も隱れるには當らないぢやないか。出ておいでよ。」と云つて、今度は、怒鳴りつけるやうな物云ひをした。

それから、また私に、

「まあ、坐りたまへ。」と云つて、其處にあつた座蒲團を引きよせてくれたりした。

見ると、煙草盆の火皿は、敷島の吹殼でもつて埋つてゐる。煙草盆の傍には、食べさしの鹽煎餅が散らかつてゐた。私は座蒲團へ腰をおろすと、机の上へ目をやりながら、

『早稲田文學』が明いてゐたら、ちよつと貸してくんないか。」と云つたものだ。本當は、そんな心にもない野暮用などを頼むよりは、思ひきり洒落か皮肉でも連發して、少しは彼等の腹の中を、抉つてやらうかとも思つたが、しかし、其の時ばかりは、流石に此の私にも、さう云ふ悪戯は出來なかつた。なんだか私には、假りにも自分の友人が、其の情人と逢引してゐる場へ臨んで、さう云ふことを敢へてするのは、相手に對しては固より、自分自身に對しても、恥づべきことだと思つたからだ。だから私は、机の上へ目をやると丁度其處に「早稲田文學」が乘つてゐたから、態態それを借りにでもきたやうに云つて、跡をあはしたのだ。

「ああ、好いとも、持つていきたまへ。明いてるんだから。」

岡田は、人間が不意に眼前へ突きつけられた太刀さきに驚きながらも、なほ其の心持ちの動搖を押しかくす時にするやうな目つきでもつて、私の方をみながら、如何にも快く承諾してくれた。と丁度其處へ、女が入つてきた。見るとそれは、私の直覺通りふさたつた。

ふさは、其處へ入つてきて坐ると、

「入らつしやいまし。先夜は失禮いたしました。」と云つて、落入るやうに頭をさげた。そして、今度はあげた頭、いや頭ではない、顔を心持ちそ向けてしまつた。其の樣子には何處か驚に覘らはれた小雀のやうなところがあつた。私はそれを見た時には、いぢらしくなつた。私は輕く低頭してそれを受けて、かの女を偸みみた時には泣きたくなつてきた。押しつぶされたやうな鼻の形、叩きつけられて、腫れあがつたやうな顴骨、それに、驚くほど巧妙に、蜥蜴の口を摸したやうな其の口つきを見てゐると、私には、圓らなかの女の雙の目から、あの瀧のやうに、口惜し涙の流れないのが不思議に思はれてならなかつた。

それに、可笑しいのは其の拵へだ。――白地へ荒く麻の葉つなぎを置いた浴衣を着て、帶は、紫紺地のメリンスへ、白牡丹の花を染めだしたのへ、黑繻子を合したものなのだ。私はかの女の顏と、殊に束髮に結つた髮と、其の浴衣との對照を目にした時には、まさに憫殺してやりたくなつた。私は、なほかう云ふ女にも、男を戀する熱情が保有されてゐるのかと思ふと、人生の皮肉、人生の醜惡さが思はれてならなかつた。で、私は直ぐに其處を出ようと思つた。すると岡田が、

「お湯へ行つてきたのかい。」と云つて、私の方をみたが、其の目の視線と、私が立ちあがらうと思つて、ふさを見てゐた目を、自分の方へ引きもどさうとするのとが、偶然其處でぱつたり出會すことになつた。其の時また私は、溜らなくなつてきた。と云ふのは、彼の雙の目は、逃けゆく鼬鼠のそれを見るやうな風なのだ。なんのことはない。彼の目の奥底に疊まれてゐる心の表情は、突風を受けて、今にもちぎれさうに回轉する、あの風車のやうに動搖してゐるのだ。で、私は、

「ああ、僕が入つてると、直ぐ後から入つてきた、倶利伽羅紋紋の野郎が、一つ浪花節を、繰返し繰返し怒鳴りやがるんで、すつかり參つちやつた。何しろ、これ以上拙いのがあつたら、お耳に掛からないと云つた風なんだからなあ。」と、ついつかぬことを云つてしまつた。そして、いよいよ歸らうと思つた。

此の浪花節のことなども、半ば以上は嘘なのだ。だが私は此の時、意識してさう云ふ誇張をしなければならないやうに思はれた。それからまた私は、靜に目を移して、ふさの方を見た。ふさは、何處か寂しく、不安さうにしてゐた。例へば、自己の犯した罪の前に、

衷心からの懺悔をして、最後の宣告を待つもののやうな風があつた。そして、かかる場合に、人間は誰でも、必ず神佛に向つて祈禱するものだとするなら、かの女もやはりそれに洩れず、此の場合かの女の神佛たる岡田の方へ向つて、只管に救ひを求めてゐるらしかつた。それは私が、さうしてかの女に目を注いでゐる時に、かの女は、かの女の視線を、岡田の方へ注いでゐるのを見たからだ。それは、重い石の下からするやうに、若しくは、目隱しの隙間からでも、敢へてさうするやうな風だつた。だから私は、其の時はやにはに起ちあがつて、いきなり彼等二人を裸體にした上、ふさの締めてゐる晝夜帶でもつて、堅く堅く縛りあげてやりたくなつた。そして、私は遺り場に困つた目をあげて、其處から遠く見渡すことの出來る上野の方を見てみた。すると、墨繪のやうな上野の森が、幾つか、若しくは幾十、幾百かの燈火の影から、靜に夜に入つていかうとしてゐた。それが岡田の部屋の前に突つたつてゐる、三本の椎の木の枝葉を通して、半ば夢のやうに私の目へ映つてきた。それに目を放つてゐた時間はと云へば、ほんの僅だつたけれど、それを見てゐる中に、私の胸へ、此の世の悲哀と云ふ悲哀、寂寞と云ふ寂寞が、嵐のやうになつて集つてき

た。私は其の時、明かに二人に對して嫉妬を感じた。もう女の容貌や教養如何などは問題ではなかつた。とにかく一個の女の魂と、肉體の凡べてを委ねられてゐる岡田のことを思ふと、あさましい話だが、炎炎たる嫉妬の焔が、私の身を心を取り圍んで、燃えさかつてくるのを覺えた。私はもう何を考へる暇もなく、直ぐ逃げかへらうと思つた。すると其處へ岡田が、

「君は、今日宿にゐたのかい。」と云ひかけた。

「ああ、おひるから、また圖書館へいつてきたんだ。」

私はかう云ふと同時に起ちあがつて、机の上の「早稻田文學」を取りあげた。そして、

「ぢや、これを借りてくよ。」と云ふと、

「好いぢやないか。話していきたまへな。」と云つて、岡田が引きとめてくれた。だが私は、

「今夜友達がやつてくる約束になつてゐるんだ。失敬するよ。」と、また此處で、私は出まかせの嘘を云つてしまつた。

「ぢや、僕は此處で失敬するよ。」
これは岡田だ。
「そいぢや、御免くださいまし。」
これはふさだ。
私は、
「御免。」と、ふさの方へ挨拶して、土間のところへ出てきて、下駄へ足を乗せた時に、またはつきりと私の胸へ、私の影が消えてしまふと、二人はいきなり相擁して、窒息するまで口づけをしてゐるのが感じられてきた。
私は、其處の格子戸を開けて、表へ出た時には、それでもほつとした。だがしかし、寂しさ、悲しさに取り圍まれて、喘いでゐる私の心は、なかなかに慰められなかつた。私も夢中になつて、ある救ひ主を追ひもとめた。すると其處へ、さきの面影が蘇つてきた。夢中に救ひ主を追ひもとめてゐた私は、また夢中になつて、さきの面影を搔きいだき搔きいだきして抱きしめた。だがしかし、それも間もなく、夢のやうに私から消えていつてしまつた。

私は其のはずみを食つて、今度は雙の手でもつて、自分の胸を壓しつぶすやうに抱きしめてゐると、其處へ音もなく、空から降つてきたやうにおりてきたエレベーターが、私の心の前へきて止つてしまつた。そして、私を崩れる灰のやうにしてそれへ抱きのせると、直ぐまた下の方へ向つて動きだした。私はそれと氣づくと、はつとして自分に返つたが、しかしエレベーターは、ずんずん音もなく、下へ下へとおりていくのだ。

一五

これはまた其の翌日のことだ。
私は何處からか人聲がしたと思つたので、其の時目が覺めた。すると、
「おい、起きないか。」と云ふ聲が、はつきり私の耳についてきた。見ると、それは岡田なのだ。岡田は、私の部屋の入口のところに突つたつてゐるのだ。
「うるさいなあ。なんだよ。」

私はかう云つて、また掻巻きを引つかけて、床返りをした。

私は昨夜岡田のところから歸へると、先づ夕飯を食つてきて、それから、彼から借りてきた「早稲田文學」を繰つてみた。だが皆つまらないものばかりだつた。これと云つて、讀んで見ようと思ふやうなものは、殆んど一つもなかつたと云つても好いくらゐだつた。それから、私はまた、讀みさしてゐたシエンキーウヰッの「二人畫工」を取つて讀んでみた。

私は其の時は、第十一章から讀みだしたのだが、それを讀んでゐると、私には累累たる墓石ばかりが見えてきて、心は無闇と冷くなつてきた。私には、ウラデックの贏ちえたやうな幸福は、夢想だにすることが出來なかつた。性の狷介さ、趣味の偏狹さ、そして、容易に他人を信ずることの出來ない點では、私は飽くまでアンテックに似てゐる。さう思つて私は自分をかへりみた時には、泣くにも泣かれないやうな氣持ちになつてきた。

また私は、其の夜は不思議と、自分の脚のことが氣になつてならなかつた。私の過去二十四年間は、貧苦と病苦とに織りなされた上を、血と涙とで塗りかためられてゐた。だか

ら私には、教育らしい教育も與へられてゐなかつた。と云つても好かつた。反對に私には貧しき者が當然負はなければならない、猜疑、嫉妬のみが、多分に加へられてゐた。恐らくは今後も、それがいやが上にも加へられて行くことだらう。そして、それらから生れる不義不德の爲に、終ひに私は、肉を割かれ骨を刻まれて、果敢なくなつて行かなければならないかも知れない。しかしそれまでは、私は微塵自分自身を害つてはならない。最後の最後まで、私は自分の手で自分を守つて行かなければならない。それにしても必要なのは健康だ。四肢五體の中、この一點をもおろそかにしてはならない。かう思へば思ふほど、私は呪はれたやうな脚のことが氣になつてならなかつた。其の一點では、アンテックの不遇な生活も、なほ私には羨ましかつた。だから私は「二人畫工」の第十三章を讀みをへた時には、沼津へ轉地して、肺患を療養してゐる大野木を思ひだした。そして、彼のこころへ私は私の寂しさを訴へて、手紙を書いたりした。がしかし、私の心はそれに依つて、少しも慰められはしなかつた。反對に私は、とにかく彼は不治の疾患に惱まされながらも、轉地療養の出來る身分だと思ふと、其處にまたかなりの嫉妬を覺えた。

すると今度は、其處へ押しよせてくる蚊の群の煩はしさに堪へられなくなつてきた。それから私は、損料蚊帳をつるして、其の中へ電氣を引つこんで、次の第十四章から讀みはじめた。そして、其の次の第十五章の終りから、第十六章全部を讀んでゐる中に、私はまた、ごんなに寂しく味氣ない思ひに攻められたか知れない。それが期せずして、私の心を岡田の方へ引いていつた。さうだ、今頃は屹度岡田は、それこそ身に一物を蔽ふなくして同樣の姿態をしたかの女を搔きいだきながら、明けやすき此の夜の果敢なさを歎いてゐるだらうと思ふと、私は燃ゆるやうな性の衝動を覺えた。そして、それを滿たす手段として幾度か不自然な方法を强ひられたか知れない。其の時若し私に、私の持ちえた誇りがなかつたなら、私は安んじて、其の卑しい方法を採つたに相違ない。

私は其處で、一旦伏せた目を開けて、再び「二人畵工」の頁の上へ注いだ。私は第十七章から、終りの第二十三章までの七章を讀んだが、卷を掩ふた時には、私の胸は索莫其のもののやうになつてきた。と云ふのは外でもない。人生の幸福者たるウラデックの友人たるオストリンスキイが、多年の戀成つて、其の相手たるヘレナ夫人と結婚したばかりか、

私はそれまでは、不幸不遇な點において、私の分身のやうに思つてゐたアンテックまで、以前ウラデックの戀人だつた女を得て、これも結婚してしまつたからだ。

私はそれを讀みをへた時には、もう外では雀の聲が聞えてゐた。其の聲がまた私に、遠い昔を思ひださせてきた。それは、私が夜毎夜毎、骨髓炎が化膿するの苦痛に堪へられなくなつて、ある時は、寧ろ絶息するの安きを思ひながら、只管に時の經過をのみ待つてゐた當時のことだ。それを思ひだした時には、とにかく私は、其の苦痛から脫れてゐることを思つて、それに依つて僅に自分を慰めることが出來た。だから私は、岡田に起されるまでには、まだ幾時間も寢てはゐなかつた。其處を不意に起されたので、私はうれしくなかつたのだ。

一六

「起きたまへ君、もう幾時だと思つてゐるんだい。」

私が床返りをうつと、岡田がかう云つて、また言葉をかけた。

「もう幾時だい。」

私は眠くて、もう口を利く氣にもなれなかつた。それと、一旦起きたが最後、岡田からは屹度、債務者が債權者に會つた時のやうに、夜前から今朝までのことを、殘らず聞かされねばならないと思ふと、思つただけでもう私は、無理にも起きるのが厭だつた。

「もうお正午近くだぜ。起きたまへなあ。」

私はさう云はれると、頭の中で「嘘をつけ」と思つた。第一これが正午近くなら、かうまで私の頭は重くない筈だ。なんのことはない、私の頭は、まるで五月雨に降りこめられてでもゐるやうな風なのだ。よしまた、それが岡田の云ふ通り、丁度時間が正午近くであり、若しくは正午過ぎであるとしてからが、何も服裝競爭をするやうな思ひまでして、起きるには當らない譯だ。だから私は、

「勘忍してくれ。僕は眠いんだよ。」と云つて、やはり蚊帳の中で凝としてゐた。だが岡田は、さう云つたからと云つて、柔順に歸らうとはしないのだ。

「君は今日、圖書館へ行かないのかい。」と云ふのだ。私は、それにはなんとも云はずに默つてゐた。すると岡田がまた、

「木村博士が洋行するさうだなあ。今日の讀賣を見ると……」と云ひかけた。

「それがどうかしたのかい。」

私は少しうるさくなつてきたので、少し調子を尖らかして、かう云つてやつた。

「いや、別にどうもしないさ。」

岡田は少し不意を食つて、驚いたらしかつたが、彼はかう云つてちよつと言葉を切ると直ぐそれに重ねて、

「とにかく君、起きたまへな。」と云つて、私の方へのしかかつてきた。

私は起きるものかと思つた。だがしかし、其の時ふと、かうして自分の我を押しとほすとして、それが何程自分を強めるだらうかと思ふと、私は恥しくなつてきた。其處で私はそれもこれも忍んで起きようと思つた。

「ぢや濟まないが、蚊帳を外してくんないか。」

私はかう云つて、また床返りして、岡田の方をみた。岡田は、
「なんだい……」と云ひながら、手に持つてゐた、濡れ手拭と石鹸箱とを、窯際にある机の上に置いて、私の蚊帳の吊り手を外してくれた。私は、向う側の二本が取れてしまふと、蚊帳から出て、机の前へきて腰を下ししなに、
「おい、何か、今日は僕を湯に入れない積りなのかい。」と云つてやつた。岡田はそれを受けて、
「湯へ入れない積りかつて、なんだい。」と云つて、私の方へ目を持つてきた。
「だつて、さうぢやないか。すつかり××××××きたんだらう。」
「常談云つてらあ。××××××してくるもんけえ。」
「君は××××氣はなくとも、××××××××、湯の方だつて、ひとりでに××××××。」
「つまらないことを云つてらあ。」
「全く、つまらないことをしてきてくれたもんだ。誰も頼みはしないのに。」

私達は、つい可笑しくなつて、苦笑し合つた。
「それはさうと、もう葛の葉子別れの場も出ちやつて、ふさの局は、――ふさの局は少し變だなあ。瀬川房之亟としようか。もう歸つちやつたのかい。」
「ああ、歸つちやつたよ。今朝早く。」
「さぞお疲れでござんしたでせう。」
「つまらないことばつかり云つてらあ。やくなよ。」
「折角の御仰せだが、僕はやくよ。眞黑黑に。それこそ守宮の黑燒きみたいに。それが厭だと云ふなら、餘りやかすなよ。」
「別にやかせやしないぢやないか。」
「特別念入りにやかさなくたつて、普通以上にやかせられちや溜らないや。それに房之亟は、君の座へ出勤しても好いのかい。三日月だつて夜興行だのに。」
「なんだい。つまらない。すつかり芝居がかりだなあ。」
かう云つて彼は、敷島へ火をつけた。それから、

「だつて仕方がないぢやないか。用が出來れば。」と云ふのだ。
「そりやさうだが、其の用が用だから、ちよつと氣に病んでみたやつさ。とかく獨り者は、苦勞性で困るよ。」
「それこそ、大きなお世話だ。」
「なんだと。とうごう僕は、傘屋の小僧かい。時にごうだい。一つ聞かうか。ぼつぼつ始めないか。」
「何をさ。」
「さう物體をつけなくたつて好いぢやないか。昨夜からの一件をさ。」
「つまらないことばかり云つてらあ。」
かう云ふと彼は、いきなり石にでも降られた時のやうに、差俯向いてしまつた。私は私で、此處でまた、二本目のバットをつけねばならなかつた。——それへ火をつけて、口に咿へてゐると、いきなり彼は、
「だが驚い　よ。あいつは大變な代物だぜ。」と云ふのだ。

此處二頁（第百一頁第百二頁）削除

「だから、僕があやまつてるぢやないか。」

一七

其の翌日も岡田がやつてきた。

また其の翌翌日も同様だつた。

それからも私達は、殆んど毎日缺かさずに逢つてゐたゞ云つても好い位だつた。無論其の間には、私の方から出掛けていつたことのあるのは、云ふまでもない。

ところでこれは、其のことがあつてから、たしか二三日してからだつたと思ふ。があるひは四五日してからだつたかも知れない。岡田が私のこころへきて、

「君、無知な女ほど、憫れな者はないなあ。」と云ふのだ。私は、それが何を意味するものか分らなかつたから、

「それがどうしだんだい。」と云ふと、彼は、私の云つた言葉などは、耳にも入らないや

うに、

「全く、無知な女ほど、憫れな者はないよ。」と、同しやうなことを繰返すのだ。

「そんなことは、云はなくたつて、分つてらあなあ。どうしたんだい。」と云ふと、

「いや、昨夜僕が、三日月へ行つたと思ひたまへ……」と云ふから、

「ああ、それで分つた。ふさの局が、螢を捉へて、『どうして、螢は啼かないんでせうね。』と、かうおつしやつたと云ふんだらう」と、私は途中から、自分の方へ話を引きこつて、かう云ふと、

「ううん、さうぢやないんだ。昨夜やつこさんが、一つ二つ話をしてゐる中に、早く一緒になりたいと云ふんだ。此の頃此處にゐるのが、つまらなくてならないと云ふんだ。僕はそんな出來ない相談相手になつてゐたつて始まらないから、口から出放題なことを云つて、好加減に跋を合してゐると、終ひにやつこさんは、『私、砲兵工廠の女工になつても好いわ。そしたら、なんとかならないことはないでせう。』と云ふんだ。それ聞いて僕は、なさけなくなつちやつた。」と云ふのだ。其處にはもう、絶息し切つた戀人の顔面を見守つて

ゐるやうな調子があつた。さうだ。信頼し切つてゐた者の手で、見事に裏を掻かれた時のやうな、悔恨と、悲痛さと云ふやうなものがあつた。

「好いぢやないか。向うの云ひ分には、少しも不思議がないぢやないか。僕に云はせると、さう云はれて、氣を悪くしてゐる君の方が、よつぽどごうかしてゐぜ。僕なら、涙を流して喜ぶなあ。」

「と云ふのは、どう云ふ意味なんだえ。考へてみてくれたまへ。假りにも此の僕がだ。自分のワイフを女工に出して置いてさ、毎日毎日、其の歸りを待つて居れるかどうか。僕は厭だ。死んでもさう云ふことはいやだ。」

彼は、敵から屈けてきた、勸降狀を手にした時のやうな風なのだ。そして、さう云ふことを敢へてするくらゐなら、寧ろ當初の覺悟通り、城を枕に討死してしまひたいと云つたやうな切迫感が、言外に溢れてゐるのだ。私は、彼が感情家であることは能く知つてゐた。だから、自分自身のことを他に向つて說く場合には、こもすると其處に幾分の誇張の伴ふことも分つてゐた。それだけに此の時も、また彼は其の病癖を起してゐるのだと思ふと、

私は全然それと同感だつたこしてからが、それを其のまま、直截に發表する氣になれなかつた。と同時に、私はそれを耳にすると、私一人が何時までも、あの俊寛のやうに孤獨遠流の悲哀をし續けねばならぬ者のやうに思はれてくる他の一面には、私は飽くまで私の好まぬ女と彼とを同棲させて、それに依つて生れてくる不幸の前に、彼を泣かしめてやりたいと云ふ、卑しい心持ちに制せられたところから、私は半ば意識して、無理にもそれに反對しなければならなかつた。で、私は彼の言葉が切れると、

「僕には分らないなあ。君の心持ちは。だつてさうぢやないか。當然愛の歸結は、其處までこなければならないぢやないか。だから、僕は寧ろ君は、此の際女に感謝して、其の希望を容れてやるこそ、君の採るべき最善の道だと思ふなあ。」と云つてやつた。

「君はまるで、僕の心持ちが分らないんだ。そんな篦棒なことが出來るもんか。」

「出來るもんかつて、僕ならするなあ。それが一等本當な道だらうぢやないか。何も君のやうに、さうがみがみと、當りちらすがものはないと思ふなあ。」

「何も僕は、當りちらしやしないぢやないか。ただ僕は不愉快だから、不愉快だと云ふ

んだ。」

「左樣でございますかよだ。」と云つて、私はちよつと、熱しかかつてきた話の腰を折つて置いて、「ぢやそれで好いぢやないか。とにかく此の暑さだ。もうさう云ふ話は、またの日にしようぢやないか。僕はもう此の間の火傷でもつて、體中がひりひりして困つてるんだから……」と云つて、私は、流れていくバットの煙の後をみてゐた。すると岡田は、捩子の切れた時計の振子のやうな目つきをしてきた。そして、

「何も、さうまで云はなくたつて好いぢやないか。」と云つた彼の舌端には、針を啣んでゐるやうな鋭さがあつた。私は此の時、獨り自分の檻へ引つこんで、寂しい呪はれたやうな自分を勞はつてゐたのだ。丁度其處へ、彼がかう云つてきたので、私は不意を食つて踊りあがつたが、それがまた一層私の反感を煽つてきた。そして、私は、顫へあがる胸を抱きしめながら、なほも凝と押しだまつて、バットを吸つてゐた。

「何も僕は、君の反感を買はうと思つて、かう云ふことを云ふんぢやないんだ。今日僕は、此のことを君に話して、君の意見を聞きたいと思つてやつてきたんだ。だから僕は眞

劍なんだ。それを君は、何か僕が、面白おかしく、惚氣でも云ひちらしにきたやうに取つて、頭から茶化して掛かるたあ、ちと甚からうぢやないか。これは君一人に云ふんぢやないが、一體に世間の奴らは、女の話とさへ云へば、頭から莫迦にして掛かるが、それが僕には分らないんだ。其の癖世辭や追從なら、仕事の手を休めても聞きたがるんだから、可笑しくなるぢやないか。と云ふと君は、今度は僕を攻めてくるだらう。そりや今までは僕も悪かつた。だから僕はあやまる。僕も何時か君が、淺草の女と戀しあつてゐた時は、少しも厚意らしい厚意さへも見せなかつた。ある場合には僕は、好んで自分自身を低くするやうなことばかり云つてゐたが、あれは僕がまだ至らなかつたせいだ。で、君が今あの時の復讐をするのだと云ふなら別だが、しかし君は、そんなけちな人間ぢやあるまい。それに、君はもう其の經驗者なんだから、此の上何も好んで、そんなくだらない眞似をしなくたつて好いぢやないか。」

彼はかう云つて、其處の壞れ火鉢へ、靜に彼の手にしてゐた敷島の灰をはたいた。そして、またそれを口にしてからも、目はやはり下の方へ向けてゐた。

こころで私は、彼からさう云はれると、將に百斗の冷水を浴びせられたやうな氣持ちがした。私ははつと思ふと同時に、今まで抱いてゐた反感も皮肉も、立ちごころに一掃されてしまつた。そして、後には慚愧と悔恨のみが殘されてきた。

「だつて、何もこれが喧嘩ぢやあるまいし、君は何も僕のことを、いや僕だつて、何も君のことを悪く云つてる譯ぢやないぢやないか。君はいけないよ。人がちよつと晝寢をしてると、其の寢込みを襲つてきて、大身の槍を突きつけて置いて、勝負呼ばはりをするんだからなあ。悪いことは、僕だつてあやまるよ。」

私の云ひぐさは、慘めなほどしどろもどろだつた。かなしいかな私には、其の時はさう云ふより外はなかつた。それから、意識がはつきり自分のものになつてから、私は幾分調子を改めて、

「で、君はどうしようと云ふんだ。それが何より先決問題ぢやないか。」と云つて、恐る恐る彼の方へ目をやつた。彼の面上には、まだ餘憤の片影が漂つてゐた。

「それが僕にははつきりしないんだ。それで實は迷つてるんだ。」

「僕に云はすれば、何も迷ふがものはないぢやないか。それこそ外の問題と違つて、此のことばかりは、君の料見一つに依つて定まることぢやないか。つまり君が、あの女に凡べてを許しうるかどうか。言ひかへると、君はあの女の凡べてを容れうるかどうかと云ふ問題だ。それさへつけば、あとは易易たる問題ぢやないか。」

「こころで、それが分らないんだ。」

「困るなあ、君のやうでも。僕に云はすれば、かう云ふ問題は、相手の女に就いて、それ相當の智識がなければ駄目だと思ふ。こころで君は、女の身分、教養如何、性格などに就いて、多分の有識者だらうぢやないか。少くとも、僕なんぞよりは、君の方が遙に有識者なんだ。だからそれに依つて、君は能く考へてみるのが何よりぢやないか。さうだ。それに今のこころ、他人には全然分らない點まで、君一人が攫んでゐるんだから……」と云つてゐると、其處へ岡田が不意に飛びこんできて、

「なんだい、それは。僕一人が攫んでゐつて云ふのは。」と云つて、凝と私の顔をみた。それを受けて私は、

「それはなんだよ。君はまた、かう云ふと怒るかも知れないが、君はあの女の、肉體の凡べてを知つてゐるぢやないか。……」と云つてくると、案の定彼は、

「君は、直ぐそんな下等なことを云ふから困るよ。」とばかりに、火のやうになつて憤つてきた。

「なにも下等なことはないぢやないか。よしまた、今百歩を譲つて、これを下等なことだとしても好い。それが僕達からみて、女の第一條件だとすれば、それを口にすることは、此の場合止むをえないぢやないか。僕はさう思ふんだ。其の女が如何に身分あり、教養ある上に、最も良き性格及び最も好き容貌の所有者であるとしてからが、其の女の肉體に缺點があつて、僕達が性慾上の對照とするに足りない者だつたら、瓦にも均しいものだらうぢやないか。こころで、君の女は、其の正反對だと云ふぢやないか。だから僕は、此の問題は僕なんぞに計るよりも、一に君の獨斷に俟つて然るべきだと思ふよ。」

「そりやさうも云へるさ。いや、そりやたしかに眞理だ。だがしかし、僕はさう云ふことはどうでも好いんだ。——早い話が、あの女は、學校教育などは、四五年しか受けたこ

こはないらしいんだ。それにあの女の家は、松戸の荒物屋なんださうだよ。しかし、さう云ふことは、僕にはどうでも好いんだ。僕はあの女が、凡べてを僕に委ねてさへくれれば僕は凡べてをはなからやり直してやる積りだから。ただ僕は君に聞きたいのは、あの女の容貌なんだよ。どうだらう君、あの面つきの女と、僕は結婚して好いだらうか。」

「そいつあ困つたなあ。」

「どうしてさ。少しも困る譯がないぢやないか。僕はそれを忌憚なく君に云つて貰ひたいんだ。」

「だつて君、それこそ能く云ふやつぢやないか。ええ、縞と女房は好き好きだつて。だから、其の點に就いてなら、僕にはなんとも云へないなあ。」

「そりやさうだらうさ。だが、若し君が僕として、僕の立ち場になつて、これを取扱ふ場合にはどうする。」

岡田は、私の返答如何に依つて、最後の勝負を決しようとするもののやうに、滿身の力を籠めてかう云ふのだ。だから其の刹那には、私はどうしようかと思つた。が要は、自分

の内に信ずるところを、卒直に云ふより外には仕方がないと思つたので、

「さあ、其の場合はだなあ。君怒つちやいけないぜ。僕は直截に云ふんだから。——これが僕なら、僕ははなから、ああ云ふ女は問題にはしないなあ。」と云つて、私は彼の方を見た。彼は滿身の力を籠めて質問しただけに、此の私の返事は、彼に取つては、丁度出端を叩かれたもののやうに思へたことだらう。其の證據には彼は、

「さうかなあ。」と云つて、青菜に鹽でも振られたやうになつてきた。私はそれを見ると可哀さうだとは思つたが、しかしさうかと云つて、他にこれと云ふ方法も見つからないので弱つてしまつた。仕方のないところから私は、

「さうだ。僕なら問題にはしないが、君の場合は、今問題にしつつあるのだから、君はもつともつと、考へてみる必要があると思ふなあ。——君の目から見て、好ければそれで文句はないんだからなあ。斷つて置くが、ただ僕は厭なんだ。」と云つて、口を噤んでしまつた。すると岡田は、

「だから僕も考へてゐるんだ。」と云つて、目を伏せてしまつた。それからも私は暫く押

しだまつてゐたが、しかし、何時までさうしてゐても始まらないから、

「これは君も知つてゐてくれるだらうが、僕には丁度、君が戀愛至上主義者であり、また結婚尊重論者であるやうに、僕は容貌至上主義者なんだ。僕から云へば、女の凡べては其の女の容貌に現はれてゐるものなんだ。つまり、容貌は、女其のものの象徴なんだ。だから、それが氣に入らない場合には、僕はもう其の女は問題ぢやないんだ。此處でちよつと斷つて置かなきやならないのは、僕の好きな容貌なるものは、飽くまで僕一個の好きな容貌で、他人から見て、それがどんなに醜く、またどんなに卑しく見えやうが、そんなことは、僕にば問題ぢやないんだ。僕は今までの經驗に就いても、多くの場合、少くとも僕の友人は、僕の好む女を、卑しみ憎む場合の方が多かつたんだからなあ。で、今これを僕から云へば、君にはまことにまをし譯がないが、君の女のやうな女は、幾くら聰明であり、善良であつても、僕なら問題にしないんだ。と云ふのは、僕は君の女のやうな容貌の女は決して聰明であり、從つて、善良な者だとは信じられないんだ。だから、僕に若しかの女が、巨萬の持參金づきでくると云ふなら、隨分と我がままな言ひぐさだが、其の場合

は、僕は其の持參金だけを貰つて、あとは、一昨日お出でと云つてやりたいんだ。だがしかし、誤解してくれちや困るよ。これは飽くまで、僕一個の趣味であり、僕一個の見解なんだからなあ。」と云つてやつた。そして、此の上はもう、此の問題に就いては、一切容喙しまいと思つた。

「そりや分つてるよ。さうかなあ。」

私の言葉が切れると、岡田がかう云つて歎息した。

「まあ君は、もう少し落着いて、其の上でもう一度、ゆつくり考へてみるんだなあ。それに限るよ。」

もう私は、これで口を利くまいと思つた。

「まあ、さうだなあ。」

岡田は、同じやうなことを云つて歎息した。

一八

其の話が一段落つくと、私達は期せずして金の話をし合つた。飽くまで貧乏人に生れついてゐる私達は、何時も最後は、さう云つた風な愚痴になり勝ちだつた。

私はそれにつけても、金が欲しいと云ふと、これには岡田も同感だつた。私は金があつたら、女を買ひに行きたいと云ふと、岡田は女より先きに書籍を買ひたいと云ふのだ。そして、其の上で遊びに行けるなら行つても好いと云ふのだ。私は飽くまでそれには反對だつた。恐らくは彼も、此處に幾らかの金があるなら、屹度ふさのこころへ出掛けるに相違ない。そして、書籍に對するのは其處から歸つてきてからに相違ない。私はさう思つたので、それを岡田に云ふと、彼は、

「ううん、僕は君とは違ふよ。」と云つて、見事これを反撥するのだ。だが私は、飽くまでさう云ふことは信じられなかつた。

「ぢや君は、此の上もうふさの局に逢はない積りなのかい。それとも、逢ふのには別に元は入らないのかい。」と云ふと、彼は、即座に頭を横に振つてみせた。

「そりや入るものは入るさ。お蔭で僕は、持つてゐた本と云ふ本は、片つ端からなくなしてしまつた。中には、人から借りてゐた物もあるんだが、それもみんな、一緒に他處へ預けてしまつた。」と云ふのだ。

「ぢや君は、現在の經驗からしたつて、何も僕の說に異を樹てるがものはないぢやないか。ええ、君も宜しく金を持つたら、それでもつてふさの局に逢ふんだなあ。ふさの局が厭だと云ふなら、新規に見つけても好いぢやないか。とにかく女を得て、其の女の爲に使つてしまふのだなあ。本も机も、それはみんな其の上でのことだ。」

「ううん、僕は君とは反對だ。」

金を欲しい點では、極力同感の彼も、其の支途に就いては、なんとしても私に反對なのだ。こころで私は、今此處に幾らかの金があるとしたら、先だ第一に反物を買つてくる。それを着物に仕立る。それから、帶や襦袢、帽子などを買つてきて、一通り身なりを整へた上で女を買ひに行きたいのだ。其の上になほ餘裕があれば、其の時は私も書籍を買ひたい。そして、怠つてゐる英語をやり始めても好い。それは私だつて、爲なければならないこと

は幾らもある。だが私は、其の何れを始めるよりも先にしたいのは、女を買ふことだ。私は女に依つて、自分の所持してゐる精力を消耗してみたい。そして、若し餘燼があれば今度はそれを守立つて、再び精力を回復することが出來れば、其の時こそは眞劍に他の仕事に掛かりたい。でなければ私は、あの蓋をも押しこばしてまで、たぎりにたぎり切つてゐる土瓶を見るやうな性慾の衝動に驅られながら、なほ冷然と他の仕事に就くなどと云ふことは到底出來ない。だから私は、何を措いても先づ、性慾問題の解決に走らねばならないのだ。出來ることなら、私は一人の女を得て、それと結婚しても好い。若し此の私に、それ相當の資産があつたなら、今のやうな寂しい思ひはしなかつただらう。其の時は私はもう、あのさきと一緒になつてゐたに相違ない。さう思ふと、私は自分の命に賭けても、なほ自說を固守しなければならなかつた。

で、私達は其のことに就いて、暫時爭つてゐたが、しかしそれは直ぐと立ちぎえになつてしまつた。と云ふのは、私達が問題にしてゐるやうな金は、何時になつたら私達の手に攝まれるものか分らないからだ。つまり、私達が現在取扱つてゐるのは、

「若し此處に幾らかの金があつたら、どうしてそれを處分するか。」と云ふ假定問題だと云ふことに氣づひたからだ。だがしかし、私達は其處へきても、なほ金の話は止めなかつた。相次いで起つてきた問題は、では、私達が金を手にするには、如何なる方法に依つたら好いかと云ふ問題だつた。ところで、問題が此處へくると、私達の頭は、あの龜の甲羅のやうに固くなつてしまつた。そして、私達の口は、まるであの魚のやうになつてしまつた。

なるほど金を得る方法は幾らもあるが、しかしそれは皆、それ相當の資本を要することばかりだ。ところで私達は、資本のことは固より、それに代る勞力らしい勞力さへも持つてゐないから、有ゆる方法と云ふ方法は皆絕望だつた。それをなほ考へると云ふことは、海上を徒步でもつて渡らうとするも同樣だつた。

其處でまた私が問題にしたのは、私達が唯一の資本にしなければならない、自己の能力を養ふには、如何なる方法を取つて好いかと云ふことだつた。だがこれは、「要は勉强にあり。」と云ふ一言に盡きてゐたが、其の勉强をするにも、やはり先立つものは金だつた。早

い話が、一册の書籍を買ふにも、一頁の英語讀本を敎はるのにも、金を持たないことには、どうすることも出來ない。だから、いよいよ此處までくると、私達は敵の重圍に陷つたやうになつてしまはなければならなかつた。丁度それは、枯涸しかかつてゐる樹木を、赫赫たる烈日の下に曝しながら、なほ蘇生の日を待たうとするやうなものだつた。私は此の時、「金がないばつかりに、市長にも成られず。」と云つて歎息した明治の詩人齋藤緑雨の言葉が思ひだされもしてきた。そして、愚痴なやうだが、貧しく私を生んでくれた父母のことが思はれてきた。恐らくはこれは、岡田も私同樣だつただらう。――富みたる者は與へられたる餘裕に依つて、父母の名を思ふの念をも奪はれがちなのと反對に、貧しい者の持てる苦痛は、しばしば其の心情に父母の面影を宿して、其處に無限の憤怒や怨恨を强ひられるものだからだ。

「可哀さうなは此の子でございだ』。どうで呪はれてゐるんだから仕方がないや。まあ、地球のお荷物になつてやるんだなあ。そして、いよいよとなつたら、强盜殺人でも働くのよ。外に仕樣がないや。」

終ひに私はかう云つて、手にしてゐたバットを吸ふと、それを火鉢の中へ投げこんだ。そして、坐りなほすはずみに、ちよつと捲くれた浴衣の上前を、脚へ乘せてゐると、

「そりやさうと、君の脚はどうだい。痛まないかい。」と岡田が云ふのだ。――彼は、私が浴衣の捲くれたのを直すひまに、私の手術を受けた痕が、左側の上一面に、烙印でもしたやうになつてゐるのを見たのだらう。私はさう云はれると、またいきなり、氷の中へ漬けられたやうな氣持ちになつてきた。

一九

「ああ、此の頃は別に痛まないが、しかし變なんだ。日に依ると、中へ一杯、瓦斯でも詰められたやうな風になつてきて、氣になつて溜らないんだ。君はどうだい。好いのかい。」

私は、右手でもつて左の脚をひと擦りさすりながら、かう云つたものだ。

「なんだかかういけないんだ。毎日鉛でもつめ込んだやうに、頭が重くて弱つてるんだ。」

岡田は心持ち顔を顰めてみせた。

「さうだ。體のことを考へると、なほと金が欲しいや。金が手に入れば、何を措いても僕は脚の治療に掛かるんだがなあ、酒も女も、其の上のことだ。」

「全くだ。僕も金を欲しい。此の儘に打つちやつといちや、終ひにはごんな目に遇ふかも知れない。」

「君のはごうなんだい。やつぱり僕のみたいに、だんだん腐つてくるのかい。」

「さあ、腐つてくると云ふのかなあ。何しろ僕のは、日が經つに從つて、鼻の中が塞がつてくるんだ。そして、時時くさいくさい膿が出てくるんだ。一等困るのは、さうなると まるで、鍋でも冠つたやうに、頭が重く、鬱陶しくなつてきて、何を爲る氣にもなれなくなつてくるんだ。朝なごは、起きあがる氣にさへなれないんだからなあ。」と云つて、頭を左右へ振りながら、「それに此の頃、白井から頼まれて、心理學の飜譯をやつてるんだが、

それやこれやで、少しも捗らないんだ。すつかり、氣を腐らしちやつた。」と云ひをはると 恐ろしい者にでも迫られたやうに、目を閉ぢてしまつた。

「そいつあいけねえなあ。君のはごうすれば好いんだ。また手術をしなきやいけないのかい。」

「さうらしいんだ。ところで、僕のは今度したからつて、屹度直るとは定つてるないんだから弱るんだ。」

「そいつあ困るなあ。丁度僕と同じちやないか。僕のはごう惡くなつたつて、命に係はるやうなことはないだらうが、しかし、片脚取られたが最後、强盜も出來なくなつちまうからなあ。第一いけなくなつてくると、手術したいにも、入るものは金なんだから、それを考へると、穴の中へでも入るやうな氣持ちがしてくるよ。」

「全く金が欲しい。神よ。我れに金を與へよ。然らずんば死を與へよだ。」

岡田はかう云つて、其の時は如何にも快活さうにうち笑つた。だが私には、それは泣くよりも悲しく、哀れに思はれてならなかつた。

「で、段段いけなくなつてくると、また失くなした短刀や大黒が欲しくなりやしないか。」

「だつて、幾ら欲しくたつて、今になつちや仕様がないぢやないか。それよか僕は、なまで欲しいよ。」

私が脚のことを考へると、水の中へうち沈められて行くやうな心持ちがするやうに、岡田も鼻のことを思ふと、何時も火の中に坐してゐるやうな氣持ちがするのだらう。なんでも彼の云ふところに依ると、それはもう彼が物心づく頃からなのださうだ。右の鼻から時時濃汁が出てくる。其の上、不斷に鼻がつまつてきて、呼吸するのが苦しくなるのださうだ。それが日を追ふてだんだん烈しくなつてきたのださうだ。さう聞くと、私が彼を知つたのは、十二三の頃からだが、彼は其の頃からして、不斷に鼻を搔むばかりか、不斷に面前へ集つてくる、目に見えない物でも吹きはらはうとする時のやうに、ふんふん云つて鼻を鳴らしてゐた。で、私達が彼に「鼻」と云ふ異名をつけたのは、主として彼がさうした習癖からきてゐるのだ。

ところでこれが、二十二三になると、口を閉ぢてゐては、自然に呼吸がし辛くなつてきたのださうだ。そして、頭は絶えず眩暈に惱まされ通しになつてきたのださうだ。終ひに堪へられなくなつてきたところから、知人に賴んで紹介して貰つた赤十字病院へ行つて診てもらつたのださうだ。其の頃彼は、私が芝の辯護士の玄關番をしてゐたやうに、彼もまた日本橋の植松と云ふ辯護士の事務所に書生をしてゐたのだが、赤十字病院の診察に依ると、それは蓄膿症と、慢性肥厚鼻炎だと云ふことが分つて、其の結果は雙方とも、手術をすることになつたのだ。

何でもそれは、鼻孔の中の肥厚した部分を、鋏でもつて切除して置いて、一方蓄膿の方は、同樣に鼻孔の中から、鑿と云はんよりは、寧ろ錐と云つた方が適切らしい物でもつて、右の上顎竇の方へ穴を穿つて、今度は何か藥液をもつて、其の穴から中を、洗滌したのださうだ。そして、それからは毎日、病院通ひをして、ガーゼの取りかへと同時に、一方蓄膿症の方を洗滌するのださうだ。

私が今でも覺えてゐるのは、手術前はさうでもなかつたが、手術後彼に逢つてゐると、

彼の患部から發散する惡臭が、鼻を衝いてくるので閉口したことだ。今强ひて、其の惡臭を形容して云へば、惡性な病毒の爲に腐爛し切つてゐる××××を、火に掛けてゐる時のそれを思はしめるやうなのだ。全くもつて溜らない匂ひだつた。

赤十字の方へは、彼はものの一箇月ばかりも通つてゐただらうか、其の中もう止してしまつた。と云ふのは、金と時間との關係上、さうしなければならなくなつてきたのだ。――ごう工夫し、ごう差繰つてみても、日本橋から麻布まで通ふには、殆んど午前中は潰ぶれてしまふのだ。ところで彼は、一日中最も必要な時間はと云へば、それは午前中に限られてゐると云つても好い辯護士の女關にゐて、かたはら其處へ日參しなければならないのだから、主人の手前や、朋輩の手前、直ぐと故障が起つてくるのだ。

それはよし主人や朋輩の方では、事情が事情だから、一切それを承認してゐてくれるとしてからが、一個雇人としての彼の身になると、三度に一度は氣がさしてくると云ふものだ。それと、治療費は幾らも掛からなかつたとしても、病院までは、遠く隔つてゐるだけに、毎日往復の電車賃が入るわけだ。尤もそれも、半月ばかりもすると、隔日に通へば好

いことになつたやうだけれども、とにかく、それやこれやで、其の方は止してしまつたのだ。そして、今度は本石町で、耳鼻咽喉を專門にやつてゐる醫者のところへ通ひだしたのだ。其處ならば、當時彼のゐた伊勢町から、毎日歩いて通へるからだ。それに、其處なら患者の數から云つても、殆んど待つ間を要しないと云つても好いくらゐで、行けば直ぐと歸つてこられたからだ。彼は其處では、どうしたものか主として、鼻の中を電氣でもつて燒灼してゐたらしかつた。

二〇

此の間に、――赤十字病院で手術を受けてから、本石町の醫者へ通つてゐる間に、彼は隨分と金のことで苦勞をしたものだ。何分其の頃の、私達の貰つてゐた給金なるものは、僅二圓だつたから、家鄕から送金でも仰げる者は別だが、此の給金だけで凌いでゐる者が一旦病氣になつたが最後、目に見て金の爲に泣かされなければならなかつた。そして、彼

や私は、まさに後者の方だつた。

中には事務所に依つて、例へば訴狀だとか、登記の申請書などに貼付する、印紙を買ふ場合には、其の賣捌所から幾分の割增金が取れもするが、しかしそれは、餘程事務繁忙なところでなければ見られないことだつた。よしまた、其處が爾く繁忙を極めて、副收入が多いところには、屹度幾人かの書生が使はれてゐるから、それを各自の頭へ割當てする日になると、一人の手取り幾らにもならなくなるのだ。ところで、岡田のゐた事務所は、何方かと云へば事務多忙の方だつたが、しかし其の結果は、勞働時間のみが多くて、其の割りには副收入の乏しい組だつた。だから彼は、其の頃夜間通學してゐた、正則英語學校の月謝にさへ追はれがちな有樣で、さんざん貧苦に攻めぬかれてゐるところへ、今度はさう云つた疾病が祟つてきたのだから、彼は其の上にもまた、貧苦に泣かなければならなくなつてきたのだ。

で、彼は赤十字病院へ通ふやうになると同時に、正則英語學校を休むのは固より、一枚も持つてゐた着替へをはじめ、書籍と云ふ書籍は、悉く他へ典じたりまたは賣却してしま

つたのだ。また友人と云ふ友人、知人と云ふ知人からも、それぞれに、借りられるだけの物は借りてしまつたのだ。最後に彼は、四五年前に亡くした父の形見だつた一振りの短刀と、一個の大黑像まで賣りはらつて、治療費に代へねばならなくなつたのだ。

其の中短刀を賣つたのは、彼がまだ赤十字病院へ通つてゐる頃の出來ごとだつた。――短刀と云ふのは、誰の作になつたものか覺えてゐないが、それは朱鞘拵へのもので、古く汚れてはゐたが、青糸で梅鉢を模樣した、赤地綿の袋へ納められてゐた。それを彼は、とある古道具屋へ持つていつて、見せたのださうだ。すると甚く安價で、迚も話にならないのださうだ。それからまた通りがけに見て覺えのある、古道具屋と云ふ古道具屋を、片つ端から當つてみたのだが、皆云ひあはしたやうに安價なのださうだ。終ひには彼も、仕方なくなつたところから、それを三圓五十錢に賣つてきてしまつたのださうだ。

「全く莫迦莫迦しいや。とにかく僕の爲には、またと手にすることの出來ない短刀なんだ。それを僅三圓五十錢の金に換へなきやならないんだからなあ。」

彼は後で、私のところへきた時に、しみじみとさう云つて、愁歎してゐた。恐らくは彼

の身に取つては、それは自分の肉を割いて賣るにも均しいものだつただらう。だから其處には、泣くにも泣かれないやうな悲痛さがあつことだらう。そして、それから間もなく、令度は大黒の番がきたのだ。なんでもそれは、本石町の醫者へ通ふやうになつてから間もなしだつた。

二

岡田は其の大黒だけは、恩があればあるだけに、また、恨みがあればあるだけに、命に變へても、終生秘藏して置かうと思つてゐたそれも、萬止むを得ない事情から、今度はそれを持つて、以前一度歩いたことのある、古道具屋へ見せて廻つたのださうだ。するとこれはまた、短刀よりも一層下直なのださだ。一等の高直と云ふのは、二圓ほつきりなのださうだ。

「ああ、泣きたくなつちやつた。ごう考へたつて、僅二圓位の端た金と換へられるもんか。よくせき困ればこそ、假りにも大黒を賣らうと云ふのだ。それが二圓だと云ふんだからなあ。」

其の時彼は、かう云つて慨歎してゐた。

「僕はこんな思ひをする位なら、——こんな情けない、厭な思ひをする位なら、一層のこと、賣つた短刀でもつて、腹を切つて死んぢやつた方が增しだつた。」と云つてからまた考へて、「だがしかし、まだ死ぬ氣にはなれないし……」と云つて、深い溜息をしてゐた。

——血を吐くやうな深い溜息をしてゐた。

岡田は、二圓だと云ふ大黒には、まだまだ未練があつて、手放す氣にはなれなかつたのだ。と云ふのは外でもない。それは靑銅で出來た、一握位の大きさの物だつたが、これを手にしてみると、其の形體の割りには、ごう賴まれたところで、迚も信じられない程の重量があるのだ。で、彼はそれを何處から聞いてきたのか知らないが、これはひよつとすると、腹中に黃金を呑んでゐるせいではなからうかと云はれてゐたので、かたがたもつて、二圓や三圓の金と換へる氣はなかつたものらしい。

だがしかし、一方にはそれとともに、金の必要が迫つてくる。幾くら考へても、他にはこれと云つて、取るべき策がない。仕方ないところから、今度は賴みにならないそれを賴みにして、彼の主人に事情をあかして哀願してみたのださうだ。すると主人は、それを五圓に換へてやらうと云ふのださうだ。そして、若しこれが入用の時には、五圓の金と引換へに何時でも返してやらうと云ふ條件づきでもつて、それを金にしてくれたのださうだ。

私のところへ、岡田は其の話を齎してきて、

「金高は不足だが、しかしこれは賣つたのではないから安心だ。父の形見を、みんな失くなしてしまつちやつちや、なんだかまをし譯のないやうな氣がするからなあ。」と云つて、此の時ばかりは、さもうれしさうにしてゐた。しかし、其の金も、日ならずしてなくなつてしまつたことは云までもない。

で、これは單に私一個の想像なのだが、其の間に彼は、今更のやうに父のことを思ひだして、其處に深く自分のことを考へさせられたことだらう。——若し自分にも、遺產らしい遺產があつたら、かうまで寂しい、辛苦な思ひはしなかつただらう。それに、第一は病

氣のことだ。自分に持つて生れたやうな此の病氣さへなかつたなら、こんな悲しい思ひはしないのだ。病氣故に治療する費用を得るにも、幾多人の知らない苦勞をしなければならないのだ。父が唯一の遺產とも云ふべき短刀と大黑とは、金に換へてみたところで、僅に八圓五十錢にしかならないのだ。そして、一方病氣の方はと云へば、それは今後なほどれだけの費用を要するか分らない。そればかりか、自分の志してゐる學業が、其の爲に、どんなに妨げられるか知れない。かう思ふと、もう此の世に生を享けたことからして、恨めしくなつてきたことだらう。幼にして母を失つた彼には、母の思ひでなどは、幾くら持たうと願つたところで、それは許されないのが當然だが、寂しさの餘にふと母を求めて、其の面影も得られないもどかしさに煽られた心は、自然に父の方へ歸つて行つたことだらう。そして、其處にはまた、時時私にも話したことのある、父の疎暴さや亂行さを思ひだしたことだらう。ある時は、彼に與ふる食を惜しみ、ある時は、汚れた一枚の着物を奪ひ、またある時は、餘りの悲しさ恐ろしさに、歔欷嗚咽しながら、罐器粟のやうに打ちふるへてゐる彼を捉へて、怒れるままに、降りしきる雪の巷へ突きだして、なほも酒杯を手から離さ

うこもしなかつた父のことが、それかそれと、あの影燈籠を見るやうに、彼の心へ映つてきたことだらう。そして、自分と同じ憂き目をみた兄や姉のことを考へて、それらと現在の自分との關係に思ひおよぶと、さらにさらに、我が身の果敢なさに泣かされたことだらう。それも其の筈である。一人の姉は、薄給な巡査の妻であり、一人の兄は、貧しい荒物屋を營んでゐるのだからだ。そして、此の兄は早くから家出をしてゐただけに、今では彼や彼の姉とは、兄弟とは名のみで、まるで他人のやうな關係になつてゐるのだ。私は屹度さうだと思ふ。彼は一面には、父の遺して行つてくれた短刀や大黒に對して、かなりの執着を感じながらも、他の一面には、現在に於ける兄弟の不和なる所以も、皆根ざすところは父の憫れな性格からきてゐるのだと思ふと、其處に綿綿として盡きない恨みを覺えたことだらう。少くとも私はさう思ふ。それは曩にも云つたやうに、富みたる者は、與へられたる餘裕に依つて、父母の名を思ふの念をも奪はれがちなのとは反對に、貧しい者の持てる苦痛は、しばしば其の心情に父母の面影を宿して、其處に憤怒や怨恨を強ひられるものだからだ。

其の後も彼は、百方工夫して、醫者へだけは通つてゐたが、しかし、それもさう長くは續かなかつた。幸せと其の中には、患部の方も幾分怠つてきたので、彼も醫者通ひを一時中止してしまつた。それからざつと三年と云ふ時間が經つてゐるのだから、惡くなつてくるのは、寧ろ當然かも知れない。そして、それは當然なだけに、彼はまた其の治療を講ずる用意をしなければならないのだ。彼はそれを思ひ、今なほ舊の如く貧しい自分のことを考へると、丁度針のついてゐない釣竿を渡されて、釣魚方を命ぜられたやうな氣持ちがすることだらう。そして、此の點は私とても同樣だ。私も自分の脚のことを思ふと、雪中裸體の儘で、千里の路を徒歩させられるやうな氣持ちがする。だから此の日も、私達は話が一度互の宿疾のことに及ぶと、もうすつかり氣も心も失つてしまつて、語るところは悲しい愚痴ばかりだつた。そして、岡田の歸つていつたのは、もうかれこれ四時を廻つてからだつた。外はまだ、燒きつくやうな太陽の光りで、樹木も屋根瓦も、また庭も路も、皆苦しさうに喘ぎあへぎしてゐた。其の間を蟬の聲のみが、誇りがに鳴きしきつてゐた。

三

其の次に語らねばならないのは、此のことがあつてから、約一箇月ばかりしてから起つてきた。其の日も日中は、風通しの悪い私の部屋に坐つてゐると、幾分汗を覺えるやうな日だつた。私は例に依り、正午近くに起きて、漸く近所の飯屋へ行つて飯を食つてきて、吉川から借りてきた、讀賣新聞へ目を通してゐるところへ岡田がやつてきた。

見ると岡田は、何處か寂しさうな風をしてゐるのだ。夜つぴて、悪夢にでも襲はれ通して、目覺めた時に見るやうな疲勞が殘つてみえるのだ。一つは、藻のやうに垂れさがつてゐる髪の毛が、餘計にさう思はせたのかも知れない。――其の髪の爲に、右の眉は見えないくらゐだつた。それが暈のやうに、顏一面を曇らして見えるのだ。

「どうしたんだい。寢不足なのかい。」

私がかう云ふと、

「ううん、さうぢやないが、すつかり草臥ちやつた。」と云ふのだ。

「どうして草臥たんだい。」

「今日はね、ずつと田端を歩いてきたんだよ。……」

「田端を。またどうしてさ。」

私は田端と聞くと、ちよつと不思議に思つた。其處には友人らしい友人もゐなければ、別にこれと云つて、さう用事のあるところではないからだ。

「なあに、ただずつと歩きまはつてきたんだ。」

「のんきだなあ。此の暑いのに。」

「ところで、のんきぢやないんだ。苦勞で苦勞で溜らないんだ。」

岡田は眉を寄せて、口を歪めてみせた。だが私には、此の時にはまだはつきり、それがどうしたら苦勞なのか、さう云ふことは無論分らなかつた。で、私は、

「何が苦勞なんだい。用もないのに、田端なんぞをほつつき廻つてきて、草臥たのが苦勞だと云ふのかい。」と云つて、凝と彼の顏を見てゐた。

「いや、さうぢやないんだよ。今朝また女がやつてきたんだよ。九時頃に……」と云ふ

のを私が奪ひとつて

「ああさうか。それで分つた。」と云ふと、ちよつと私の方をみた。

「何が分つたんだい。」と岡田が苦笑しながら、お歩きあそばしたからなんだらう。」

「いやさ、今日は二人で、戀の重荷を背負ひこんで、

「つまらないことを云つてらあ。」

岡田はまた、から痙攣するやうに眉のあたりを動かし、口を尖らした。

「ああさうか。ぢや何だなあ。途中で喧嘩したんだなあ。」

私はてつきりさうだと思つた。ところで岡田は、それにはなんとも云はなかつた。彼も私の方を見返して置いて、それから横を向いてしまつた。其の時彼のつく溜息が、はつきり私の耳についてきた。私はまた其の時、ふと姙娠と云ふことを考へた。——女が見るものを見ないので、それを今日歩いてゐる途中に、岡田に話したのではなからうかと思つてみた。がしかし、それにしては、少し時期が早過ぎると云ふものだ。だから直ぐ其の後で

「そんなことがあるものか。」と思つた。そしたら今度は、岡田の云ふ苦勞とは、それは一體何をさして云ふのか分らなくなつてきた。そして、分らないだけに、餘計とそれが氣になつてきた。

「一つ當ててみようか。君の苦勞なるものを。」

私は思はずかう云つて、また彼の方を見直した。けれども彼は、やはり横を向いたきり默つてゐた。それが妙に私の氣を苛立たせてきた。

「屹度あれだ。金のことだ。君は金を欲しいと云ふのだらう。そして、女と一緒にならうと云ふんだらう。」

かう云つた時に私は、恐らくは彼は、一種狼狽の色を見せるだらうと思つた。それは丁度、地中深く隱して置いたものを、他人に發かれた時のやうに、悲痛と云ふのか、悔恨と云ふのか、それとも憤怒と云ふのか知らないが、とにかくそれらの一つ若しくは二つのものを内に含んだ、狼狽の色を見せることだらうと思つてゐた。ところで岡田は、微塵それらしい表情も見せずに、やはり默つてゐるのだ。若し其の時、少しでも變つたものがあつ

たとすれば、それは横向きの首を眞直ぐにして、目を伏せたくらゐのものだ。それがまた何か知ら私の氣を煽つてきた。

「さうだ。それに相違ない。第一君の顔に『金が欲しい』と、はつきり出てゐぢやないか。」

私はやけに、押しつけるやうにかう云つて、今度は私が濟ましてゐた。すると岡田が、今度は俺の番だと云つた風に、

「常談云つちやいけない。」と云つて、目をあげて私の方をみた。そして、直ぐと其の後へつづけし、「まるで話が違つてゐる。」と云つたかと思ふと、また凝と目を伏せてしまつた。其の樣子が、私の見たところ、例に依つて彼は、態と意識して、私をぢらさうとしてゐるもののやうにさへ思はれるのだ。だから私はなほと癪にさはつてきた。

「ぢやごうしたんだい。まさかに喧嘩した揚句に、蹴殺しちやつた譯でもあるまい。」

私はもう此處へくると、後は勝手にしやがれと思つた。だから私は、また讀賣新聞を取りあげて、雜報欄へ目をおとしてゐた。すると、暫くしてから、岡田は思ひきはめたやうに、

「僕はあの女と、別れようと思ふんだ。」と云ふのだ。そして、幽かながらにちよつと吐息をして、また俯向いてしまつた。私もちよつと、それと聞くとおどろいた。

「それこそ、君の言ひぐさぢやないが、常談ぢやないぜ。――ごうしたら、今になつて別れようと云ふんだい。」

私は新聞を其處へ投げだして、バットに火をつけた。

「なあに、別に譯と云ふほどの譯もないんだが、今日十時頃から、女と一緒に何處か其處いらをぶらつかうと云ふのでもつて、實は今まで田端を歩いてきたんだ。ところで愛想が盡きたんだ。」

岡田は此處へくると、また默つてしまつた。

「で、ごうしたんだよ。」

私が促がすと、漸く其の後をつづけだした。まるでそれは、下手な辯護士が、徒らにことを虛構して、異議の申立てでもしてゐるやうな風なのだ。

「――歩いてゐる中にね、僕はふと其の氣になつて、女をさきに歩かせたんだ。するとごうだらう。其の歩きやうと云つたらないんだ。それに後姿だな。其の後姿と云つたらないんだ。僕は全く泣きたくなつちやつた。そりやね。着物の着こなしなんぞはごうでも好いさ。着せやう一つで、ごうでもならうと云ふもんだから。ところで、まるで地べたを蹴るやうにしてさ、外輪に歩く足取りつたらないんだ。それに肩つきだ。――肩から脚までの形と云つたらないんだ。なんのことはない。駱駝の背中か、若しくは桑の木の化物みたいぢやないか。僕はすつかり厭になつちやつた。」

かう云ひながらも岡田は、其のなり形がまた目についてきたのだらう。それを打ちけす爲に、凝と目を閉ぢて、首を二三度左右に振りうごかした。私は其の話を聞きながら、ふと馬市に於ける伯樂を思ひだした。すると、ひとりでに可笑しさが込みあげてきた。がしかし其の時は聲に出して笑ふ氣にはなれなかつた。反對に其の時の心持ちの一面には、一種嚴肅さと云つても好いやうな感じがしてきた。だがしかし、それもこれも、一旦口を利く段になると、みごとに裏切られてしまつた。

「なんだい。そんなことかい。」

これは、私が其の時云つた言葉だが、獨りこれは、私が持つてゐる性格のいたすところか、それともこれは、ともすれば、他人の凶事を見て喜ぶ、人間通有の病弊からきてゐるのか知らないが、とにかく私はかう云つたのだ。其の癖私は、かう云つてからも、彼が途中にふさの後姿を見ようと思ひたつた心持ちや、それを見てから後、彼が蛇蝎の如くそれを憎んできた氣持ちは、私にもなほ火を見るやうにはつきり分つてきた。同時に私には、彼もまた私同樣、女から離れて、ただ一人になるのだと思ふと、私の胸が開けていくやうな安意さを感じた。ところで彼は、其の女を、それはたとへ一夜でも、愛し愛されてゐた者を、其の底には如何なる事情があるにもせよ、我れと我が手で、一刀兩斷し去らうとするのだと思ふと、今度はまた、自分の胸を釘づけされるやうな切なさを覺えてきた。しかし、これは飽くまで私自身の心持ちである。さう云ふ他人の内にあるものは、此の際岡田には、察すべくもなかつたのだらう。彼は私の云つた言葉を其の儘に受取ると、それからくる不愉快さとともに、一方ふさに對する嫌厭さをほき出すやうに、

「ああ、厭だ。厭だ。もう生れかはるんだ。そして、勉强するんだ。」と、如何にも思ひこんだらしい調子でもつてかう云ふのだ。私はそれを聞くと、私一人が、深い谷間へ迷ひこんだやうな氣持ちになつてきた。

「厭だと云ふなら、さうするんだなあ。丁度好きなところから一緒になつたやうに、厭になつたら別れるんだなあ。」と、其の時かう云つて、如何にも冷靜さを失ふまいと努めてみた。がしかし、それが口を衝ひて出た時には、何處かかう怪しく顫へを帶びてゐるのが私にもはつきり感じられた。

「まあ、さうだ。」

「僕はさう思ふよ。――せめて、僕達が外に求める者に對してだけは、極度に自由でありたいと思ふよ。」

「まあ、さうだ。」

彼はかう云つてから、

「君は何時も、醜いものは一種の罪惡だと云つたが、僕は今それを、痛切にするよ。」と

そんなつかぬことまで云つたりした。

それから、私達はそれに因んで、また私達が生涯の對照になる女のことに就いて、いろいろと話を新にした。しかしそれは、亡びていく者の末路を見るやうに、飽くまで悲しいことばかりだつた。殊に岡田の云ふことは、消えゆく燈火の影をみるやうに、哀れにも寂しかつた。一つは私の心なしか知らないが、其の調子には、破れた器物の破片を手にしてそれを繼ぎあはしてゐる時のやうなかなしさがあつた。

三

これは、それから四五日してからだ。私は正午過ぎに、岡田のところへ、袴を借りに寄つたのだ。――其の日私は、例の雜誌用で、小石川にゐる高木博士を訪問しなければならなかつたのだ。これも今までに一二度會つて居れば、着流しで行つても好いのだが、其の日訪問するのが初めてだつたから、世間の慣例に從つて、せめて袴だけなりと附けていか

こと思つたのだ。こころで、私が友達から貰つて持つてゐたセルの袴は、何時の間にか質に入れてなくなしてゐたから、これも例に依つて、岡田のこころから借りようと思つて、出掛けに寄つたのだ。

岡田の部屋へ通つていくと、彼は部屋中一杯に、古雑誌や古新聞を取りちらし、引きちらしてゐた。私はそれを見た時には、彼はいよいよ金に窮してきたこころから、今度はこれらの物を屑屋へ賣りはらはうとするのだなあと思つた。で、私は、

「どうしたんだよ。今度はこれを拂つちやをうと云ふのかい。」と云ふと、

「ああ、面倒臭いから、入らない物は、みんな屑屋へやらうと思ふんだ。」と云ふ挨拶だ。私は私で、「何が面倒臭いからだ。」だと思つて可笑しくなつた。

「こころで、折角の思ひつきだが、幾くらにもならないなあ。まあ、せいぜい高く見積つて、敷島三つだなあ。」

「そんなやつがあるもんか。もつと高いよ。」

「さうさ。高いのは不二の山で、これだけぢや敷島だなあ。それを三つッてこころは好

いこころさ。それが厭だと云ふなら、旦那、もつと外に、何かございませんかだ。」

「つまらないことを云つてらあ。それはさうと、僕は今日越さうと思ふんだが、君は忙しいの。」と岡田が云ふのだ。なんでも彼の調子に依ると、如何にもそれは、急を要してゐるらしいのだ。だから彼が私に向つて云つた「つまらないことを云つてらあ。」と云ふのは單に私の云つた古新聞や古雑誌の賣價如何に就いて云つたのではなくて、彼は、微塵彼の焦燥さを知らずに、私がさう云ふ無駄を云つてゐるのに對して云つたものらしいのだ。だから彼は、さう云ふ閑談を弄してゐるよりは、彼は彼に取つて、もつと重大な轉居問題なるものを說きたくてならなかつたらしいのだ。こころで、それを聞く身になると、ここが餘りに急なので、ちよつと聞いただけでは、本當だとは思はれなかつた。

「また、どうして越すのさ。今日ッて、これからか。」

「ああ、これからさ。で、君が忙しくなければ、僕と一緒にきて、ちよつと間をみて貰ひたいんだ。」

「なんだい。これから間をみつけるのかい。」

「さうさ。」
「で、どうして越さうと云ふんだい。僕は今日これから、小石川へ行かなきやならないんだが……」
「小石川へ何しに行くの。」
「高木博士のところへ、話を聞きに行かなきやならないんだ。で、ちよつと、君の袴を借りたいんだ。」
「ああ好いとも、持つていきたまへ。直ぐに行くの。」
「ああ。なあに、直ぐでなくつたつて好いんだけれど、それよか、どうして君は越さうと云ふんだい。足元から鳥が立つやうにさ。」
「なあにね、あの女がうるさいからさ。」
「うるさいからつて、引越すのか。いよいよ切れる氣なのか。」
「さうなんだ。もうすつかり愛想が盡きちやつた。何しろ此の頃はね、向うから毎日のやうにやつてくるんだからね。そしちや、愚にもつかないことばかり云つてるんだ。」

『早く、一緒になつて頂戴な』つてやつかい。」
「さうなんだよ。何處をどうして抜けてきたもんか、昨夜もやつてきてね、君が今云つた通り、何てんだい、『早く一緒になつて頂戴な』つて云やがるやうな始末なんだ。何でもくる路に見てきたらしいんだ。好い茶簞笥が出てゐたとか、長火鉢もあつたとか云ふんだ。またそんなことを、どうして知つたのか知らないが、『みんな安いのよ。』とか何とか云つて、これから買ひだしにでも行きさうな風なんだから驚いたよ。驚くよりも、情けなくなつちやつたよ。で、もうかうなつちやつちや、服藥や注射だけぢや迚も駄目だから、一層のことメスでもつて、切斷しちまをうと思ふんだ。でなきやこれからも、相變らずやつてきちや、愚圖愚圖せつかれた分にや助からないからなあ。」
「ぢや何か、君は本當に、厭になつちやつたのかい。」
「さうさ。厭になつちやつたのに、嘘も本當もないぢやないか。まあ、譯と云ふのは、さう云ふ譯なんだ。で、僕はさう定めると、此の儘一時も凝としちや居られないんだ。だから、今の中に越したいんだ。」

「君が本當に厭になつたと云ふなら、まあさうするんだなあ。ただ悔ひをのこさないやうにするんだなあ。僕に云はせると、厭になつたからと云つて、何も今日や明日に引越しするには當らないと思ふが……」

「いや、僕は後悔なんぞしないよ。もう今日からは、すつかり生れかはつたんだ。それにしちや、此處にかうしてゐちや駄目なんだ。何處かへ越さなくつちや。此處にゐちや、幾くら逢ふまいと思つたつて、向うから押しかけてこられちや、三度に一度は逢はなきやならなくなる虞があるからなあ。」

「君が其の決心なら、さうするんだなあ。で、何かい。引越しの用意は好いのかい。つまり金の問題だ。此處へ拂ふのと、新規にいく家へ拂ふ金があるのかい。」

「ああ、そりや何とかする積りだ。此處には持つてゐないが、何處かへ行つて、都合してくる積りだ。それにしても、早くこれから、間を見つけなきやいけないんだ。」

「まあ、さうだなあ。で、どの方面にするんだ。何方路、此の界隈ぢやいけないんだらうから。」

「さうなんだ。で、いろいろ考へたんだが、さうかと云つて、神田や牛込では、餘りに馴染みがなさ過ぎるしするから、僕は追分邊にしようかと思ふんだ。追分か西片町、でなきや森川町邊でも好いんだ。何處か其の邊の下宿屋へいきたいと思ふんだ。いろいろの關係上、しもた屋は厭なんだ。もう飽きちやつた。」

「ぢやさうするさ。ではごうたい。出ようか。僕に袴をちよつと出してくんないか。」と云ふと、彼は立つて、押しいれへ納つてあつた、小倉の袴を取りだしてくれた。私はそれをつけて、岡田と一緒に外へでた。

二四

路路私達は、いろいろ話をした。無論其處には女の話もあつた。また、例に依つて例の如く、金の話もあつた。それから、早く下宿や間借りなどを止して、小さくとも好いから一軒の家へ入つて、女中の一人も雇ふやうにしたいと云ふことをも話合つた。そして、結局

は暫時も怠らずに勉強して、只管に能力を養はねばならないと云ふことに落ちていつた。無論此處でも、勉強するには學費が入る。ところで其の學費も持つてゐない互の身の上に就いて嗟歎し合つたが、しかし今は徒らにそれをのみ歎息してゐる時ではない。此の上は幾分でも與へられてゐる自分の素質へ下されてゐる希望の種を、不斷の努力と云ふ肥料に依つて養育して、寸時も早く花を咲かせるやうにしなければならないと云ふことを、丁度散りうせて行くある粉末でも搔きあつめるやうな風に、語りあつたりした。

私の想像するところ、彼はかう云ふ話をしながらも、絶えず自分を追つてくるやうな、女の足音を耳にしたことだらう。そして、それが遠近する毎に、心は安堵と不安とが、互に相交錯してきたことだらう。また、目も遙なる曠野へきたかと思へば、直ぐと身動ぎもならないやうな、狹溢な一室に監禁されてゐるやうな感じが、彼の胸中へ往來したことだらう。更に彼は、一歩でも先に逃走しようと願ひながらも、他の一面には、今か今かと追手のかかるのを待ちまうけるやうな思ひに攻められもしたことだらう。私はそれを、まるで秋の空のやうに、晴曇計りがたひ彼の目の中に見ることができた。

また私は、それらのことを思ふにつけて、悲喜こもごも至るのを覺えた。——嬉しいと思つたのは、とにかく彼が、いよいよふさと離れるのを確にした點からだ。それは丁度、打ち斃した敵手の喉喉へ、止めの刃を差した時のやうだつた。そして、悲しいと云ふのは一面にさう云ふ心持ちがありながらも、なほ彼に繋がる私の友情が、失はれる戀から得る今後の彼が寂寞さ、それに伴ふ辛苦さを思ふ點にかかつてあつたのだ。さうだ。前の心持ちを、敵手に止めを差した時の快感にたとへるなら、これは其の後に迫りくる一種愛惜の情に似てゐた。そして、彼と云ひ私と云ひ、ともに今後何時になつたら、滿足なる戀と云はなくとも好い、幾分心を安じて、一人の女に對することが出來るやうになるのかと思ふと、私は石炭の中へでも、埋められて行やうな氣持ちになつてきた。

「まあ仕方がないや。なんのことはない。あの沙河の大會戰の報告でも待つつもりでやつてみるんだなあ。微塵勝算はなくとも、此の上は、行けるところまで行つてみるんだなあ。」

私はこんなことも云つてみた。そして、私達は先づ蓬萊町と、追分の下宿屋を四五軒見

てまはつた。しかし、これと云つて、定めるに足るほどの部屋は、一つも見當らなかつた。それからまた、一二軒見てみたが、やはり前同樣だつた。たまに、此處なら好からうと思ふ部屋に出會して聞いてみると、料金の多額なのに驚かされて、空しく引きあげてこなければならなかつた。其の中もう時間は三時を廻つてきたので、私は岡田に附合つてゐることが出來なくなつてきた。で、私は、

「もう一日延ばさうぢやないか。君はさつき、服藥だの注射だのと云つて、ふさとの關係を病氣にたとへたけれども、何もそれが、寸時を爭つてまで、手術をしなきやならないやうな、そんな急性なものでもなからうぢやないか。何しろ僕はこれから、高木博士のところへ行かなきやならないんだから、ごうだい。明日もう一度ゆつくり探さうぢやないか。」と云ふと、岡田はなかなか承知しないのだ。

「君から云へばさうかも知れないさ。だが僕の身にすれば、そんなのんきなことを云つちや居れないんだ。僕は丁度今、盲腸炎を病みだしてゐるやうなものなんだ。だから、何を措いても、今日の中に手術をしてしまはなきや、命にも係はらうと云ふもんだ。君は行

くなら行つてくれたまへな。僕は獨りで見つけるから。」と云つて聞かないのだ。なるほど私は、さうと思ひたつた岡田の心持ちを推しはかつてみると、彼がさう云ふのも無理はないことは思つたものの、同時にそれを彼のやうに、盲腸炎にたとへて、一日半夜の時間を爭つてまで、轉居しなければならないほど、さう緊急な問題だとは思はれなかつた。ただ私は、彼のことは、彼の好むに委せて置けと思つた。

「ぢやさうしたまへ。僕は失敬するよ。」と云つて、別れてきたのは高等學校の正門前だつた。それから私は、三丁目までこなければまだ電車のなかつた時分だつたから、其處まで歩いてきて、電車に乘ることにしたが、考へてみると、これから先のことは、一切此處まで語る必要のないことだ。いや本當は、此處までも話す必要はなかつたのだ。ただ私は、彼がふさを知り、ふさと別れて、松風館に越すことになつたまでの經過を述べれば、それでもう好かつたのだ。それから先のことは、さつき岡田自身が云つ通りなのだから、もう私は、屋上屋を架するがものはないのだ。

二五

こにかく岡田が、町名を云へば千駄木になる、以前ゐた團子坂上の寓居を出て、今度は追分の松風館へ越したのは、さう云つた事情からなのだ。なるほど其處には、私達の想像を絶した、幾多の微妙にして且つ復雑な意圖の存じたものかも知れないが、しかしそれにしても私には、何も一日半夜を爭つてまで、爾く急に引越しなければならない必要は認められない。そして、彼は其の時は毫もさう云ふことは豫想してはゐなかつただらうけれど事實は終ひに其處で一生を閉ぢてしまはなければならなくなつたのだから、私はそれが恨みなのだ。だがしかし、私は其の恨みに燃えながらも、一歩退ひて考へてみると、當の相手たる岡田の屍は、今其の下宿屋の一室に、此の私を待つてゐるのだ。いや、かう云つては少し當らない。こ云ふのは、彼はもう屍になつてゐるのだから、此の私を待つてゐる謂はれがない。ただ其處には、生前彼の爲には、餘り力にもならなかつた仲ではあつたが、こにかく彼の兄なる人が上京してきて、今此の私を待つてゐるのだ。だから私は、何を措い

ても、私こ彼この交情を通じて繋がる彼の兄の下に急がねばならないのだ。こ同時に私は幾度云つても同しことだが、私は私こ其の下宿屋この關係に思ひいたるこ、私の足はひこりでに釘づけにされたやうになつてくるのだ。それを無理から勵まして、其處のだらだら坂をのぼつてくるこ、何時の間にか私の腋の下へ、冷めたい汗が流れてきた。

私の知つてゐる限り、時間の上から云つて、下宿屋の主人はもう寢てゐるこだらう。それが萬一まだ起きてゐて、遇然私こ玄關で顔を合はすやうなことがあつても、今夜に限つては彼も、現在起きてゐる事件の手前、恐らくは私を捉へて、それこ切りだすやうなことはよもあるまい。私はさう思ひ、さうあるやうにこ思つた時には、今までについぞ考へてみたこともない權現の社の方を振りかへつて、合掌祈願したいやうな氣持ちにさへなつてきた。そして、目をあけて見るこ、其處はもう四つ角になる蕎麥屋の前なのだ。私は雨に寂れて、しんこしてゐる其處の室内の燈火が、朽ちかかつてゐる竹垣越しに外へ洩れてくるのを見るこ、また岡田のことが思はれてきた。こ云ふのは、私達がまだ松風館にゐた頃はこもするこ夜此處へやつてきたことがあるからだ。で、其の頃の思ひでを、それからそれ

と追ふてゐる中に、はたと今更のやうに、其の岡田がもう亡くなつてしまつたのだと思ふと、突きつけられたやうに、私の目の前へ、彼の死に顔が映つてきた。はなはまだ熟しない無花果の實を見るやうに思へたそれが、暫くすると、熟したレモンのやうに變つてきた。そして、心持ち押しだされたやうになつてゐた彼の雙の目が、怒りと恨みに燃えながら、一段高く外へ飛びだした上に、原形も止めないばかりにかつと見開いて、四邊一面を燒きつけなければ措かないやうに、凝と虚空を見詰めてゐるのだ。それがまた私の涙を誘つてくるのだ。私はそれがはつきり目についてくればくるほど、先を急がせられて、歩行も自由にならない足を引きずりながら、無理に歩きだしたが、しかし一歩一歩松風館へ近づくに從つて、私はまた自分の見窄らしい身なりが氣になつてきた。

今私を待つてゐるのは、岡田の兄である。其の兄なる人は、私の鄕里に住んでゐるのだ。そして、私は其の人と對面するのは、幾年振りになるか知れない。だから私は、せめて身なりくらゐは人並に整へた上で會ひたかつた。何分秋雨催ひの、此の冷え冷えとした夜中だけに、奢侈贅澤な拵へでなくとも好いが、出來ることなら、銘仙の袷くらゐを身につけ

て、帶も今のやうに、メリンスなどでなしに、悪くとも縮緬位のものを締めたかつた。さう思ふと、今夜會つてきた石崎のことが心に浮んできた。さうだ。ああ云つた事件などを持つた後でなく、苦し石崎が、私の無心を容れてくれて、其の場合は着古しでも好い、また物は銘仙でなく、瓦斯か綿物でも好い、袷の一枚も恵んでくれたなら、私は今こんな寂しい思ひはしなかつただらう。屹度宿へ歸つてきた時に、それに着替へてきたに相違ないと思つたりした。そして、考へなくとも好いことだが、今夜あれから石崎はどうしただらう。まともに自宅で寢ただらうか。それともまた外へ出て、何處か知りあひの待合へいつて、藝妓相手に盃を口にしてはゐやしないだらうかと、さう云ふことも思はれてきた。そして、其の石崎に引きかへ此の私は、碌碌身に纏ふものもなく、今夜これから、自殺し果てた友人のこころへ出掛けていくのだと思ふと、また私は、いきなり向ふ臑でも叩き折られたやうに、ひとりでに立竦んでしまはなければならなくなつてきた。

更にそれを勵まして、歩きだす途端に傍を見ると、其處は私の尋ねていく松風館の方へ折れまがつてゐる横丁の角なのだ。一方を見れば、其處は寺院なのだ。そして、其處から

は、戰時の航海船でも見るやうに、微光だに差すではなく、髪を梳くほゞの音も持たずに丁度死んだやうになつてゐるのと反對に、右角の家は、一軒を兩分して、玉突きとミルクホールとを營んでゐるのだ。ミルクホールの方は、佗しげな燈影が、其處の硝子戸を燻してゐる外、絶えて物のけはひもしなかつたが、一方の玉突場からは、髑髏をかち合してでもゐるやうな、玉を打つ音が洩れてゐた。私はそれを耳にしながら、其處を曲つて、突きあたりの右手になる松風館の前へきた時は、もう夢中だつた。私は、地獄の扉でも押しあけろやうな氣持ちでもつて、其處の硝子戸を押しあけて、土間へ入つていつた。

二六

ところで來てみると、其處には一つの偶然があつて、それがごんなに私を喜ばしてくれたか知れない。私が其處の土間へ入つていくと、丁度私が下宿してゐた時分からゐる女中が、二階から下りてくるところだつた。其の女中が私を見ると、

「ごうぞ、おあがりくださいまし。」と云ふのだ。かの女は、私が何しにきたのか、それを私の顔を見ると同時に讀みとつてくれたのだ。私にはそれがうれしかつた。

ある刹那には、私の體中が目となり、また耳となりがちだつたが、私はそれをいやが上にも聳てて見聞きすると、帳場には誰もゐないらしかつた。四邊は大風の凪いだ後のやうにひつそりとしてゐた。私は其の間を、まるで牢獄から逃げだす者のやうな心持ちで、謂はば助け舟にも比すべき女中の後に跟ひて、今度は聾者のやうに、また盲者のやうにして脚の疼痛も何も一切忘れて、いきなり其處の階段をのぼつて行つた。そして、二階へ上つてからだ。私は女中に、

「何處です。岡田君の部屋は。」と云つて、聞いたものだ。すると女中は、微笑を含みながら、

「三階ですわ。」と云ひながら、またかの女が先にたつて、其處の階段をあがつて行つた。上りつめると、其處の廊下を眞直ぐに行つた、突きあたりの部屋の前へくると、

「岡田さん、お客樣です。」と、それを内へ向つて云つて、今度は私の方へ、

「ごうぞ、お入りくださいまし。」と云つて、かの女は元きた方へ歸つていつた。

其の時、

「ごうぞ、お入り。」と云ふ聲がしたが、私はもうそれが私の耳へついてくる中に、其處の障子を開けて中へ入つてゐた。

其の時、第一に私の目についてきたのは岡田の兄だつた。彼が廣い此の世から、ただ一人取りのこされたやうに、寂しい顔をしてゐるそれだつた。だがしかし、私は其の時、それに目を留めて、必然しなければならない、挨拶などをしてゐる餘裕を持つてゐなかつた。私は、丁度家宅捜索に出張してゐる豫審判事か、でなければ、犯人逮補に向つゐる刑事巡査のやうな氣持ちになつてゐたから、それを拂ひのけ、押しのけても、なほ仔細に其の部屋の隅から隅を見廻してみなければならなかつた。ここころで、幾度見廻してみても、岡田の死體らしいものは見當らないのだ。ただあるのは、彼が所持してゐた、一等大形の柳行李の實と蓋とが、中へ一杯ずたずたに破棄された紙片を呑んで、並列されてゐるくらゐのものだつた。私は、盗まれはしないかと思ひわづらつてゐたそれが、何時の間にか竊取さ

れてしまつてゐるのに氣づいた時のやうに、其處に名狀しがたひ驚愕にうたれてきた。

「ごうしました。徳さんは。……」

これが、其の時私の立ちながら云つた言葉だ。さう云つてからも私の心は、研ぎすました針のやうになつて、ただ一筋に岡田の死體をのみ探求してゐた。

岡田の兄は、私のさう云つた言葉が聞えぬやうに、

「暫くでしたがいね。あんたはお達者で、何よりですがいね。」と、北國生れの彼が、國訛りの言葉でもつて、久濶を叙するのだ。だが私はそれどころではなかつた。

「徳さんの死體をごうしました。」

私は、此の異常な場合に臨んで、そんな悠長な辭令などを弄してゐる彼の態度が癪だつた。だから、相次いで云つた私の言葉は、彼から見れば、固より非禮至極だつたに相違ない。其の上に私のそれは、内に燃ゆる焦燥さを受けて、彼の胸へも、七首のやうに鋭く響いたこだらう。

「ええ、いろいろと、徳次郎が生きてる中は、お世話さんでしたがいね。ありがたうご

さんしたがいね。あれは昨夜燒いてしまふだがいね。」と云つて、ちよつと言葉を切り、「ごうぞお敷き。」と云つて、彼は其處にあつた座蒲團を差して勤めてくれたりした。それから、「番茶ですがいね。」と云つて、茶を入れてくれたりした。そして、彼の調子、彼の態度は、薄氣味惡いくらゐ冷靜であり、落着いてゐるのだ。だが私は、飲酒した者は、屹度顏面に變化をきたすか、でなければ、呼吸が匂ふかするやうに、隱しても隱しきれない內心の悲痛さは、態度に於てか言葉の調子に於いてか、一見一聞して分るやうに、もつとはつきり外面へ現はれてゐても好い譯だと思つたので、私はかなり嚴重に觀察することを怠らなかつたけれど、遂にそれらしいものは目に止まらなかつた。ただあるのは、顏面の蒼白さと、絕えず痙攣してゐるらしく見える、其の筋肉の幽かな戰慄くらゐのものだつた。それが私には慊らなかつた。慊らなかつたと云へば、それは彼が、私の問ひに答へるに先立つて、岡田の生前に於ける私の友誼を謝するのを耳にした時には、私は逆上に近い憤りさへ感じた。そして、悲しいのは、最初は岡田の兄に對して發したそれが、暫くすると、まるで玩具の「飛んでこい」を投げたやうに、自分の方へ返つてきた。

私は岡田の晩年と云ふのか、少くとも彼が死に就く十日ばかり以前に、私が彼に對して取つた態度をかへりみた時には、消えも入りたいやうな慚愧の念に堪へられなくなつてきた。其の爲に私の頭は、火の玉のやうになつてきた。同時に私は、それにしても此の私に一應の通知もなくして、彼を茶毘に附してしまふなどと云ふのは、餘りに人を侮辱した所業ではあるまいかと思つた。しかしこれは、彼の死に方が死に方なので、外聞とみえとを命のやうにしてゐる彼の兄の身にすれば、さう云ふ醜い死體を、他人の目には觸れさせたくないと云ふ一念から、敢へてさう云つた風な、私から云へば無禮至極な態度を採つたに相違ない。さう思ふと、一旦は火のやうに燃えさかつてきた私の不平も、丁度其の火先きを驟雨にでも打たれたやうになつてきた。

それにしても、岡田は如何なる方法に依つて、自殺して退けたのだらう。私は何よりも前に、それを知りたかつた。私は、態と座蒲團を傍へ押しやつて坐ると、

「ささ、敷かんかいね。あんた。」と云つて、岡田の兄はなほそれを勸めながら、私の方からは左手になる、向ふの隅の三尺床を指さして、「あれが骨やがいね。」と云ふから、私が

指さされた方へ目をやると、なるほど其處には、白木綿に包まれた、方四寸位の丸い骨壺が置いてあつた。それを見た時には、私は犇と胸をしめあげられるやうな動亂を覺えた。で、私は、

「一體德さんは、どうして死んだんです。――毒藥でも飲んだんですか。それとも剃刀でも使つて、咽喉でも搔ききつたんですか。」と云つて、凝と岡田の兄の顏をみた。

「病院で死んだのやがいね。――赤坂の腦病院で、急病で死んだのやがいね。」

岡田の兄は、何處までも冷靜を極めてゐるのだ。言葉の端なごにも、微塵それらしい、悲痛さ怨恨さなごを讀むこごも出來ないのだ。それが私には、ますます癪だつた。

餘人には別に說きあかす必要はなかろう。たがしかし、此の私には、其の手段くらゐは明にしてくれても好からうと思ふと、また消えかかつてゐた私の不平は、遽に油をそそがれたやうになつてきた。

「どうして、腦病院なんぞへ入つたんです。さう云ふところへ、誰が入れたんです。」

「ええ、あんたも知つてるやらうがいね。あの宮部さんが入れてくれたのやと云ふこつ

ちやがいね。さつきもあの人と一緒に、――あの人の外に、もう一人畠山と云ふ、あの人のお友達と三人連れに、あんたのところへ行つたがやがいね。」

私はそれを聞いて、さつき宿のおかみから云はれた時には、岡田の兄と一緒にきたと云ふ連れは、誰が誰やら分らなかつたそれが、漸く此處へきて氷解した。それから私が、

「どうして、病院へ入つたんです。」と云ふと、

「ちよッこり腦が惡いやうやから、入れたんださうやがいね。」と、岡田の兄は、きつぱり答へるのだ。

「で、どうして其の病院へ入れたんです。誰か病院に知つてる者でもゐるんですか。」

「なんでも宮部さんの話にや、あこの病院の若大將とは、大學校からのお友達ぢやと云ふこつちやがいね。其の若大將に賴んで、入れたがやさうやがいね。」

「どうしたらまた宮部さんに、德さんの頭の惡いことが分つたんでせう。」

「そりやなんぢやさうやがいね」と云つてきて、其處でちよつと云ひ淀んだが、直ぐと後をつづけて、「ええ、なんぢやさうやがいね。德が頭が惡いと云ふもんやさかいに、ほい

ちや、病院へ入つて、直したらごうやと云ふことになつたんださうやがいね。」と云ひをへた時に、彼の顔面には、漸く人目を忍んで、密事を運んだ時のやうな、一種の不安さと一種の安心さとが見えてきた。

「で、どうして死んだんです。自殺したことは分つてますが、どんな方法で死んだんです。」

私の焦燥は、寒暖計を火中へ投じたやうになつてきた。私は、其の硝子の破裂するのを恐れながら、一心に彼の應答を待ちまうけてゐた。

「いや、違ふがいね、そんな自殺なんぞぢやないがいね。急病で死んだがやがいね。」

「いいえ、そりや嘘です。徳さんに限つては、急病なんぞで、死ぬ譯がありませんや。自殺したんです。屹度さうでせう。」

「いや、そんなことはないわいね。急病で死んだがやがいね。さきおとこい電報がきたから、わしや出てきたがやがいね。」

「いや、なんと云つても、そりや嘘です。なるほど、病院へ入つたことや、あなたのと

ころへ、電報で持つて、其の急變を知らしていつたのは事實でせう。しかし、死因が病死だと云ふのは、そりや嘘です。自殺したに定つてます。さうぢやありませんか。なにも僕にまで、さう盗んだ物でも隠すやうにしなくたつて好いぢやありませんか。」と、私はかう云ひながらまた凝と彼の顔面に目を留めてみた。すると彼の目の中に、幽かながら一種の運動の起るのをみた。それは瞬きに似て瞬きではなかつた。動搖に似て動搖ではなかつた。なんと云つたら好いだらう。今適切な比喩も形容も持たないけれど、云つてみれば、眞劍勝負の立ちあひ中に、相手の者の眼光に打たれて、怯む時の表情、さう云つたやうな物が彼の目の中に讀むことが出來た。だから私は、それに心を踊らしながら、「正直にさう云つてください。」と云つて、更に彼の顔面を注視した。

「いや、さう云ふことはないがいね。わしや病院へいつてみたが、ちつとも變つたことがなかつたがいね。」

此處までくると、私はもう凝として居れなくなつてきた。若し私が、其の時鞭を持つてゐたなら、容赦なくそれを彼の額に加へたに相違ない。若しまた私が、身に刄物を帶びてゐ

たなら、それでもつて、彼の胸元深く突きさしたに相違ない。其の證據には、彼を見詰めてゐる私の目の上瞼が自然に下降してくるとともに、私の齒は、堅く堅く喰ひしばられてきた。

「あなたがさう云つた風に、何處までも病死だとおつしやるなら仕方ありませんが……さうです、あなたがさう云ひはるなら、私は德さんのことをお話しなきやなりませんが……」と云つてくると、岡田の兄は、それを遮ぎるやうにして、

「ほいぢや何かいね。あんたに心當りでもあるのかいね。」と云ふのだ。

「無論ありますとも。第一德さんは、死ぬ前の四五日と云ふものは、毎日僕のところへ相談にやつてきたもんです。――自殺に就いての相談を持つてやつてきたんです。」

私がかう云つた時に、彼の目が眠るやうに閉ぢられた。そして、開いた時には、私には幽かながら、中から涙が絞りだされたやうに思へた。彼は、私がさう云ふと、もうすつかり、足のついてゐるのが分つたのだらう。そして、すつかり觀念したのだらう。

「ああさうでしたかいね。だらなやつちやわいね。病院で首を吊つて死んだがやがいね。いやはや、ほんまに話にもなにもならんやつちやがいね。わしやもう恥かしうて、あ

んたにも隱してゐたがやがいね。」と云つて、とうとう告白してしまつた。それを聞くと私は、自分の目差す目的地へ達して、それまで背負つてきた重荷を、いきなり其處へ投げおろした時のやうな感じがした。同時に私が、ほつと息をついてゐる隙を狙つて打ちかかつてくるやうに、また私の胸は、荒繩でもつて、強くつよく締めあげられるやうな、切なさ痛ましさを覺えた。そして、スポンヂのやうに、小さくなり增つていく私の心の中へ、縊死者の醜い容貌や姿態が、まざまざと映つてきた。同時に彼が、さう云つた風な、醜い方法を採つたことに對して、また限りない反感を感じた。それと私が今の今まで、ただ一圖にかれ岡田が、此處松風館内で自殺して退けたものだとのみ思ひこんでゐた自分の輕卒さに對しては、堪へがたひ自嘲さを覺えた。最後に、彼がどうしたら、あの宮部などの手に掛かつて、そんな病院などへ入れたのか、それも深い疑問になつて殘されてきた。

二七

「で、あなたは、徳さんの死體を御覽になりましたか。」

第一に氣になるのは、岡田の死體のことだつたから、私はかう云つて聞いてみた。

「ええ、見たわいね。」

此の時岡田の兄の云つた此の簡單な言葉は、熱する土瓶の口から洩れる湯氣のやうにな つてきた。そして、これも私の心なしか知らないが、内に燃えさかる悔恨悲痛の情を、一つところに集めたやうに、其の目は異樣にひかつてみえた。

「どう云ふ風でした。苦しさうでしたか。」

私は新に想像されてくる彼の容貌、――永劫の沈默を誓約するもののやうに、堅く食ひしばつた口つきとは反對に、目は此の世の窮局までも見極めなければ措かないやうに、かつと見開いてゐたことだらう。そして、鼻下へ二本垂れさがつた涕は、まるで硫黄を解きながしたやうに見えるばかりか、四肢は彼が痛感した苦痛と悲哀とを、蘊すなく表現して、あの藤蔓のやうに凝結してゐただらうと思つた。それへ岡田の兄の返答は、的確な證明を與へてくれるだらうと云ふ期待が、――一面にはそれを恐れる氣持ちと、一面にはそれを喜

ぶ心持ちとの間を縫つて起つてきた。こころで彼の返答は、全然それを裏切つてしまつた。

「ちつとも苦しさうなことはなかつたがいね。まるで寢たやうだつたがいね。だらなやつちやがいね。」

だがしかし私には、それは飽くまで信じられなかつた。特に私は、それに對する反證は持つてゐなかつたが、何か知ら其の儘それを信じられなかつた。

今百歩を讓つて、事實縊死なるものは、即ち、生理上縊死することの主因たる、頸動脈を壓迫すると云ふことは、何等苦痛らしい苦痛もなく致死することの出來るものかも知れない。――まこと縊死と云ふものは、さう云ふものかも知れないが、しかし、私が此の場合岡田の兄の言ひぐさに對して、なほ幾分の疑ひを持つたと云ふものは、彼は既に岡田の自殺したのさへも、私に隱匿して置かうと云ふ人間なのだ。だから、たまたま私が其の死體なる物を、遂に一瞥するの機會をも持つてゐなかつたのを幸ひに、よし其處に如何なる苦悶の狀態が殘されてあつたにしても、彼はそれを直截に語らうとはしないのではなからうか。さうも私には思はれた。

また今度は、それを極めて善意に解釋すると、彼が自殺したる岡田の死體と相對するまでには、其處にかなりの時間の隔りがある。だから、其の隔てられたる時間の中に、それぞれ病院の方で手當てをしてしまつた後だから、彼がそれを目にした時には、事實岡田の容態には、何等の異狀もなく、――微塵其處に苦痛の痕跡らしいものを止めてゐなかつたかも知れない。だがしかし、それは飽くまで、自殺後幾時間か經過したる時の岡田の容態であつて、決して、岡田が絶息した當時の眞相ではない。

一體に世間では、人の臨終を目して、其處に何らの若悶もなく、易易として死の手に就いて行くと、それは死んで行く其の者の過去の善因であり、現在の高德を證明するもののやうに盲信する關係上、延いては其の未來をも善果あるものとして、大に祝福しようとする傾向がある。だが私は決してさうは思はない。私の見るところ、これは現在や過去の德操善因の然らしむるところではなくて、要は、死んで行く其の者の生活機能の衰弱が、襲ひかかる死の手に抵抗する力さへも持つてゐないところから、爾く歸するもののやうに死に就いて行くのだと思ふ。其の證據の一つに、私は曾て、病臥後幾許も經ない一人の患者

が、突然心臟痲痺の爲に果敢なくなつて行つたのを目擊したことがある、其の時の苦悶さは眞に見るに忍びないものがあつた。それは、誇張に誇張を重ねたものだと云はれてゐる、あの歌舞伎狂言に現はれてくる人物が、不意に殺害されて落入る時の動作其のままだつた。即ち、ぱは凝と一つところを見詰め、口は堅く食ひしばられるとともに、雙手は虛空を摑みながら悶えるのだ。云つてみればそれは、此の世に於ける苦痛を一身に集めたやうな苦痛さだつた。あるひはそれを、苦痛其のもののやうだつたと云つて好いかも知れない。とにかく、見るに忍びないものだつたことだけは事實だ。で、此のことは、生みの苦しみなるものを知つてゐるほどの者には、容易に會得されなければならない問題だ。ただそれが、往往世人に誤解されると云ふものは、其の當事者は皆、死でなければ死人だからである。

だから、私は今これを岡田に就いて考へる場合には、彼も屹度死の苦痛を嘗めていつたことだらうと思ふ。それどころか、私の知つてゐる限りでは、彼は死ぬにも死ねない幾多の苦悶を持つてゐたのだ。それがただ一時の發作に驅られて、誤つて彼自身が彼の生活機

能に危害を與へたのが因を成して、こうこう亡びて行つてしまつたのだ。だから其處には表裏の別は措くとして、泣くにも泣かれない無限の怨恨、悲哀、憤怒、苦痛の凡べてが、十重二十重に渦を卷いてゐたに相違ない。それを思ふと、今更に私には彼の死なるものまでが疑はれてきてならなかつた。よしそれが、——彼の死は事實だとして、而もそれが、一點苦痛の影をも止めずに行はれてゐたとすれば、飽くまでそれは表面上のことに過ぎない。其の裏面なる心底には、少くとも憤怒と怨恨とが、猛火のやうに燃えさかつてゐたに相違ない。さうだ。そして、彼は其の猛火の爲に、遂に身も心もともに、燒きほろぼしてしまつたのだ。それが私には、哀れにもかなしかつた。

二八

それにしても彼はどうして、縊死する時間を持つたのだらう。ところが假りにも腦病院だとすれば、患者に對する監視は、嚴重な上にも嚴重でなければならぬ筈だ。それともそ

れは、欲する者の前には、銀行へ預金を下げにいく時の手續同樣に、自分の考へ一つでどうにでもなるものなのだらうか。それが疑はれてきた。だから私は、

「何ですか、德さんには看護婦は附いてゐなかつたんですか。どうしたらまた、さう云つた風な、首を縊る間があつたんでせう。」と云つて聞いてみた。すると岡田の兄は、

「そりや附いてゐたんださうやわいね。それが、惡い時には惡いもんぢやわいね。丁度其の何ぢやわいね。其の看護婦さんが、交代する時間になつたもんで、それまで附ひてゐた看護婦が、ちよつと部屋を明けてる間に、德が外へ出て、首を吊つてしまつたんだと云ふこつちやがいね。何てふだらなやつちやろいね。」と云つたかと思ふと、今度は直ぐ話頭を轉じて、「それよか、あんたのところへ、德が相談に行つたさうがや、其のことを一つ聞かして貰へんかいね。——德がなんの爲に、首なんぞ吊つたのか、あんたは分つてゐるやろがいね。」と云ふのだ。

「そりや分つてゐます。ですが、それよりも僕は、あなたの知つてゐらつしやる、病院の方の話を先にお聞きしたいんです。」と云つて賴んでみた。

なるほど考へてみると、私が彼の話を待望してゐるやうに、岡田の兄も私の話を待望してゐたことだらう。いや彼は、肉親と云ふ關係において、私などよりはもつともつと待望の念うたた切なるものがあつたことだらう。それは私にも察することは出來たが、飽くまで我がままな私は、此の時もそれと知りながら、徒らに彼を先にしようと思つたのだ。そして、さう云ひながらふと傍を見ると、また其處に並べられてゐる柳行李が目についてきた。私は思はず、

「これはどうしたんです。誰がしたんです。」と云つて聞いてみた。

「こりや、わしやきた時からかうなつてゐたがいね。今も此處の大將と話したのやが、こりや、德が此處を出掛けに、自分でかうやつて、みんな引きやぶつて行つたとみえるがいね。」

私はそれを耳にしながら、片手を伸して、其の中の一個を引きよせて中を搔きまはしてみた。搔きまはしてみると、多くのノートや原稿用紙の破片の中から、彼が編輯してゐた「二葉」と云ふ幼年雜誌をはじめ、文藝雜誌や心理學雜誌の類が出てきた。私は何氣なく其

の中の一部を自分の膝の上へ持つてきて、目次を繰りながら、

「若しか、僕に宛てた書置きが見つかりませんでしたか。」と云つてみた。これは、ノートの破片や原稿用紙の斷片を目にしたところから、突差に思ひついたからだつた。すると岡田の兄は、心持ち顏を染めながら、

「書置きつてのはこれかいね。」と云つて、傍にあつた海老茶色したメリンスの風呂敷包の中から、二重になつてゐて、上からはピンク色に見える封筒に入れられた、一通の手紙を取りだした。そして、「机の抽斗の中にあつたがいね。」と云ひながら、それを私に手渡した。

私はそれを受取ると、それこそ家宅搜索に出張してゐる豫審判事が、偶然思ひがけない場所から、最も有力な材料でも發見した時のやうに、心のときめくのを覺えた。先づ封筒を見ると、表に私の姓名を書いて、裏へは自分の署名がしてあつた。何を隱くさう。私が其の封を切らうとした時には、怪しく私の雙の手は、あの一本の蠟燭の裸火を見るやうに顫へてゐた。そして、其の時は流石に口にのぼすことは憚られたから、それは敢へてしな

かつたものの、衷心私は、私がさう云つて尋ねるまで、凝こそれを隠匿してゐた岡田の兄の心情が猜疑されてきた。若し私が其の時思ひつかず、從つて切りださなければ、彼は岡田が最後の思ひでに、私へ宛てて書いた其の手紙も、遂に私が墓に入つた後までも、屹度見せる氣はなかつたのだらうと思ふと、私は彼の面上へ唾してやりたくなつてきた。だがそれもこれも、實行出來ないもどかしさは、やがて私の右手を驅つて、如何にも疎暴さうに其の手紙の上端を破棄させてきた。そして、其の中へ息を吹きいれるとともに、中なる紙片を撮みだして開いてみると、それは一葉の原稿用紙だつた。今度は呼吸をも殺して、一氣にそれを讀みくだしてみた瞬間に、私の心はうつろになつてしまつた。私は餘りの腹立たさに、それを其處へ叩きつけてしまつた。そして、我れに返つた時には、私の唇へただ冷めたい苦笑がのぼつてきた。無論それは、自嘲の意味を籠めたものだつたことは云ふまでもない。

ところで、私がそれを其處へ投げだすが早いか、岡田の兄は、まるで飛びつくやうに、

「なんと書いてあるいね。」と云つて、今にも火花の散りさうに思へる雙の眼でもつて、

凝と私の方を見詰めてきた。それを見返しながら私は、漸くのことで、

「これは、さうぢやありません。」と云つた時には、また更に新しく、私の唇へ冷めたい苦笑がのぼつてきた。其の時岡田の兄は、

「さうかいね。」と云ひながら、それを取りあげて見てゐた。

私は今が今まで、ただ一筋に、岡田が私に宛てた書置きだとのみ思つてゐたそれは、彼が千駄木から此處松風館へ轉居した時の通知なのだ。思ふにこれは、彼は移つてきた晩に若し私が留守の場合は、私の宿の者へ托していく考へでもつて、ものしたものなのだらう。ところで、事實はきてみると、案に相違して、私が宿にゐたものだから、用件は口上で濟して、歸つてきてから思ひだしたそれを、懷中から取りだすと、何氣なく彼の坐つてゐた机の抽斗の中へ入れて置いたのだらう。それに相違ない。さう思ふと私は、岡田の兄に對して、暫時にしろ恨みを抱いてゐたのが恥かしくなつてきた。其の氣持ちを、窃と見ると もなく見てゐると、今度は岡田の仕打ちが恨めしくなつてきた。

彼は既に、數あるノートや原稿まで、一切破棄してしまつたのぢやないか。だから物は

ついでだ。何故其の時に、此の手紙も同樣に破棄してしまはなかつたのだらうと思ふと、やがて其の恨みは憤りに變じてきて、ごんなに私を苛苛させたか知れない。終ひに、飽くまで卑怯未練に生れついてゐる私は、其の憤りを振りかざして、八つ當りに當りちらさなければ、氣が濟まなくなつてきた。

二九

「だつて、不都合ぢやありませんか。——看護婦の交代するのは好いが、何もそれをするからと云つて、徳さんに附いてる看護婦の方から先に、出て行くがものはないぢやありませんか。僕にすれば、代りの看護婦がきてから、替つたつて好いことだと思ひます。さうぢやありませんか。何も親の死に目に遇ひに行くんぢやあるまいし、危險な上にも危險な患者をおつぽり出して置いてまで、駈けだしていかなくたつて好いと思ひますね。そんな巫山戯た眞似をするから、殺さなくとも好い患者まで、皆殺してしまふやうなことになるんです。實に看護婦が不都合ですね。それに不都合だと云へば、第一そんな看護婦を使つてる病院の院長が不都合ですね。」と云つて、口を極めて罵倒してやつた。

「わしもさう思ふがいね。」

其の時岡田の兄は、百萬の味方でも得たやうに思つたのだらう。寂しく打ちしづんだ中にも、何處か浮き浮きしたところを見せてきた。

「それからまた、賴みもしないのに、そんなけちな病院へ入れる者も入れる者ぢやありませんか。」

「そりや、少し違ふわいね。」

「少し違ふか、餘計に違ふか知れませんが、僕はさう思ひますね、それから、ことの起りを云へば、徳さんが一等いけないんです。愚にもつかないことを氣に病むから、揚句の果てが、そんなくだらねえ野郎の手にかかつた上に、そんな大箆棒な病院の厄介にならなきやならなくなるんです。」

「そりやあんたのおつしやる通りやけど、徳は病氣のことですし、いや、そんな病氣に

なるのは、だらやからなるのやけれど、まあそれが病氣なら仕方ないとしてやがいね。それを親切に病院へ入れてくれた宮部さんのことは、わしやありがたいこつちやと思ひみすがいね。ただわしや、病院のやり口が氣に入らんがいね。」

「僕も病院の仕打ちが氣に入らないのは云ふまでもありませんが、それとともに僕は、宮部さんの採つた處置にも慊りませんね。僕に云はするとあの人が、凡べて今度の發頭人なんですからね。」

「そりやどうしてですいね。」

岡田の兄は、私の云つた言葉尻を捉へて、其處からまた私の方へ踏んごんでこようとするのだ。恐らくは彼は、其處に潜んでゐる事情なるものを、幽かながらも直覺したのではあるまいか。どうやら私には、さう思はれてならなかつた。だから私は、

「いや、話す日になると、其處にはまたいろいろ話さなきやならないことがありますがしかしそれは後廻しにして、僕は、病院ではあなたに何と云つてましたか、それをお聞きしたいんです。」と云つて、逃げを張つてみた。

岡田の兄は、此處でも先づ、何より先にそれを聞きたいやうな樣子だつたが、しかし、彼と私との關係は、飽くまで故人を通して繫がる、單なる一個の友人關係に過ぎない。其の上、此の場合に於ける二人の位置は、彼が飽くまで主人であるやうに、私は飽くまで客である。そればかりか、其の客たる私は、誰よりも故人の爲には唯一の親友であり、從つて故人の最も良き理解者だつたので、彼はそれらの點を尊敬し、且つ思ひはばかつたのだらう。强ひて逃げる私を追はうともしなかつた。彼は其處に立ちごまつて、恨めしさうに私の方を見ながら、私の問ひに答へなければならなかつた。

「ええ、病院の方ぢや、なんともまをし譯がないと云つて、平あやまりにあやまつてゐたがいね。中でもあすこの若大將が、其の何ですがいね。院長さんの息子さんが、それはそれは物優しい人でして、其の方が地面に頭でも擦りつけんばかりにして、ほんまにまをし譯がない。あんたから、何と云はれても云ひわけがないが、ちよつとした間違ひから、かう云ふことになつたのやさかいに、我慢して貰ひたいもんだ。成らないことだらうが、其處を一つ勘辨して貰ひたいと云ふてゐましたがいね。……」と云つて、ちよつと言葉を切つ

たかと思ふと、今度は一段と聲を落して、「ごう云ふもんでせういね。なんとかして、向うをあやまらせる法はないもんかいね。わしの考へでは、訴訟をするなりして、向うから金を出させるやうな法はないかと思ふがいね。」と云ふのだ。

私はそれを聞くと、溜らなく厭な氣持ちがしてきた。同情よりも輕蔑の念が先立つてきた。恐らくはこれは、彼の妻がある代書人の娘だから、それらの關係から、聞きおぼえ見知つてゐる知識でもつて思ひついたことだらう。なるほど、徒らに法律を尊重する點から云へば、一應さう思ふのも無理がつい。がしかし、それでは餘りに人情がなさ過ぎると云ふものだ。私は先づ何よりも其の點から彼を卑しんだのだ。

「さあ、ごう云ふもんでせう。」と私は云はねばならなかつた。「そりやことの結果は、訴へた上でなきや分りませんが、しかしこれが僕なら、さう云ふことはしたくないと思ひますね。さうぢやありませんか。なるほど、そりや向うの取つた處置なるものは、間違つてゐるには相違ありませんが、しかしそれは、何も相手に惡意があつて起したことではなしそれに今あなたのお話に依ると、其處の副院長ですか、其處の若主人なる者が、明に自分

の過失を認めて、衷心からあなたに謝罪してゐたと云ふぢやありませんか。僕はそれでもう許してやつて好いと思ひますね。それをなほ此方から進んで、法律問題にして、爭つてみようとするのは、する方が惡いのぢやないかと思ひますね。そりや訴訟の結果は、法律上勝つかも知れませんが、一方德義とか、人情とかの上では、みごとに此方が敗北するに定つてゐます。さうぢやありませんか。」と私は云つてやつた。私は故人の名において、此の上さう云ふ悲しいことはしたくないと思つたので、極力それを押しとどめたのだ。

「いや、こりや此處だけの話やがいね。わしもそれを是非せにやならんと云ふんぢやないわいね。わしも全く、あこの病院の若大將の人柄には感心したがいね。あの人が、いろいろと譯を云つて、堪へてくれと云ふさかいに、それでわしやもう澤山だと思ふたがいね。昨日の日暮れ方、わしと一緒に燒き場へ行つてくれた人は、あの人一人だつたがいね。」

岡田の兄は、私の言葉の後から、かう云つて私の說を容れてくれた。私にはそれが溜らなくうれしかつた。私の前に感じた輕蔑の度が烈しければ烈しいだけ、それだけまたうれしかつた。恐らくは彼は、生前其の弟に對しては、何らの信頼も掛けてはゐなかつたのだ

らう。だがしかし、失はれた後になつてみれば、其處にはまたいろいろな慾望も出てくるのだらう。そして、其の失はれた原因の一つに、病院の過失が與つてゐるのを知ると、今度は其の關係者全體を、八つ割きにしてもなほ慊らないものがあるに相違ない。がしかしさう云ふ野蠻な形式の下に行はれる復讐は、今の法治國たる我が國では、到底許さるべくもないことだとなると、今度は其の法治國の定められたる法律に依つて、適當な賠償を要求しようと思ふのは、誰彼の差別なく、皆これ自然の人情だらう。それは私にも能く分つてゐた。ところで彼は、一度私が、彼の希望とは全然相反した說を述べると、彼はそれに依つて、過失の性質、及び關係者の意志を理解してくれたばかりか、關係者一同の代表者とも云ふべき、病院の悴が彼にしたと云ふ謝罪の中に含まれてゐた眞實さを認めてくれたのが、私には此の上もなくうれしかつた。

ところで、さう思ふのもほんの束の間で、岡田の兄は、直ぐまた其の後から、私の心持ちを裏切つてきた。

「此處の勘定は、幾くらほどになるやろいね。」

これが、其の時彼の云つた言葉だ。それは、丁度猛獸と相對してゐて、云つてゐるやうな調子なのだ。

「さあ、幾くらほどになるでせう。さうですね。」と云ひながら、私は其處へ投げだして置いた岡田の手紙を取りあげて、其の日附をみて、「此處へ越してから、廿日位のものですから、まだ幾くらにもなつちやゐないでせう。」と云ふと、

「ごんなもんやろいね。明日の朝わしは此處を出てしまはうと思ふのやが、其の時せにやならぬ此處の勘定を、半分にまけて置いて貰ふ譯にいかんもんかいね。」と云つて、不安さうにしてゐるのだ。

私は情けなくなつてきた。宿料額は、幾くら多分に見積つても、十圓以上にはなつてゐないだらう。よしまたそれが、十圓はおろか、二十圓、三十圓になつてゐるとしたところで、それは今の場合、當然岡田の兄が支拂ふべき義務のある金なのだ。それを彼は、如何なる理由あれば、値切らうとするのだらう。恐らくはこれは、彼が吝嗇な性格のいたすところなのだらう。それが私には悲しかつた。

「さあ、さうはいきますまい。これが拂はなくても好いものなら、つまり、初めから支拂ふ義務のないものなら、全部これを否認してしまふのですね。でなければ、綺麗に支拂つてやるんですね。それとも、御都合がお悪いんですか。」

私は、あるひはこれは、金の持合せのないところからきてゐるのではなからうかと思つたので、ちよつとかうも云つてみた。

「いいえ、都合の悪いことはないわいね。錢は持つてるがいね。ただわしは、こんな不意なことで德が死んでしまつたもんやから、ほいでまけて貰ふたらごうかと思ふがいね。」

此處へくると彼は、いよいよ私に對して、何處かかう憚りがちになつてきた。恐らくは彼も、彼の持つてゐる理由なるものは、此の場合相手の者へ對して、正當な拒絶理由にならないことを知つてゐるのだらう。少くともそれに對して、幾分危懼の念を持つてゐるのだらう。こころで私は、それを聞くと、いよいよ慣れでもあればまた憎くくもなつてきた。

曾て岡田が蓄膿症と、慢性肥厚鼻炎の治療をしてゐた時に、いよいよ其の費用に窮してきたこころから、彼は恥を忍んで此の兄のこころへ、繰返し繰返し事情を訴へて、此の

際幾くらでも好いから無心させてくれないか。生涯恩に着るからと云つて賴んでやつたことがある。其の時の返事に「自分の病氣は自分で治療するのだ。それが出來なければ、自殺をするのだ。」と云ふ意味のことを書いて寄越したと云つてゐたことがあつたのを、ふと私は此の時思ひだした。假りにも自分の弟が發病した上に、治療費にも窮したところから目を瞑つて幾分其の費用の補助を哀願してやつたのに對して、かくまで無情冷酷な返事を送る兄があるだらうか。さう云ふ兄だから、今其の弟が生前寓居してゐた下宿屋の支拂ひに就いても、かう云ふ不條理なことを云ふのだ。其の癖彼は、明日此處を立ちさる時には何を措いても、岡田が使用してゐた夜具や蒲團に、柳行李などを、誰に一言謝辭を述べるでもなくして、殘らず持つて行かうと云ふのだから、私は憎みてもなほ餘りある者のやうに思つたのだ。

「金をお持ちでしたら、綺麗にお拂ひになつたらごうです。此處の者は、德さんの生死を考へて、今まで止宿させてゐた譯ぢやないでせうから、今度の出來ごとが不意だつたからと云ふのを理由として、たとへほんの一部分にしろ、宿料の支拂を拒まうとするのは、

僕はどうかと思ひます。若しこれが僕なら、僕は何處をどう都合してきても、全部滯りなく支拂ひますね。」と、私は其の時、それこそ堅板に水を流すやうに、些の淀みもなく述べたものの、云ひをはると、私は兩腋の下をはじめ、背中一面へかけて、冷汗の浮きたつてくるのを覺えた。と云ふのは、「若しこれが僕なら、僕は何處をどう都合してきても云云」と云つた言葉に就いてだ。さう思ふと私の體は、期せずして耳のやうになつてきた。――私は、誰か此の宿の者が、戸下のあたりに立ち聽きでもしてゐるやうなことはなからうかと案じられてきた。同時に私は、貧しい自分のことを思つて、泣きたくなつてきた。すると丁度其處へ、岡田の兄が、

「ほいぢや、幾らになるか知りみせんが、みんな拂つて置かうかいね。だらくさいこつちやけど……」と云つて、狐のやうな目つきでもつと、窃と私の顏色をみてゐた。

其の時ではない。これより前私は、吸つてゐたバットの灰を膝の上へ落したので、それへやつてゐた目をあげて、彼の目つきを見た時に、また私は見窄らしい自分の服裝が顧みられた。そして、無闇と金が欲しくなつてきた。若し私に金があるなら、今夜あたり私は

こんな見窄らしい風はしてこなかつただらうと思ふと、意氣地のない話だが、ひとりでに涙を覺えてきた。同時に私は、大名縞の銘仙の袷の上に、物はやはり銘仙の、下のよりはもつと細かい大名縞の羽織を引つかけた岡田の兄の、痩せて小さな姿態を見てゐる中に、私はまた、曾て岡田から聞いたことのある彼は、もう四人の子持ちだと云ふことを思ひだした。そして、かう云ふ人間の子として、生ひたつて行く子供の將來を想像してゐると、悲しいよりは寧ろ恐ろしくなつてきた。私はまた其處に、限りなき人生の悲慘さと、皮肉さとを思はしめられた。

私は成れるものなら、早くひとかどの資產家になりたかつた。そして、岡田の兄をも、私同樣の資產家にしてやりたくなつた。私の見るところ、彼も今少し資產を持つてゐたなら、現在云つたやうな吝嗇なことは、賴まれたところで決して考へはしまい。また曾て、岡田が治療費の無心をした時だつて同樣だつただらう。それどころか屹度彼は、それと知ると自から進んで、岡田の爲には、最善の治療法をも講じてやつたことだらうと思ふと、今更に恆心なき謂はれが考へられてきて、心は電氣の消えた室內のやうになつてきた。で